

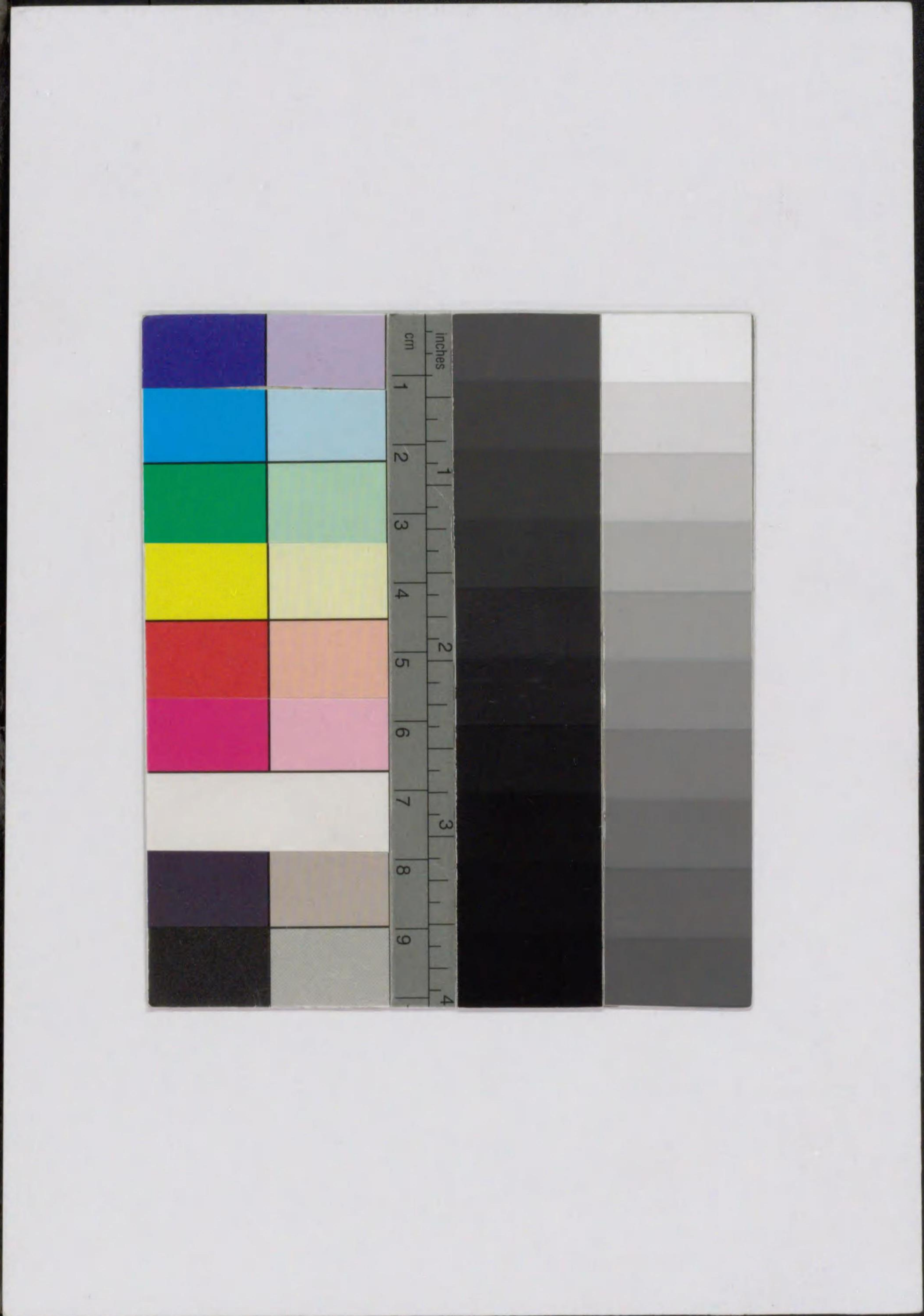
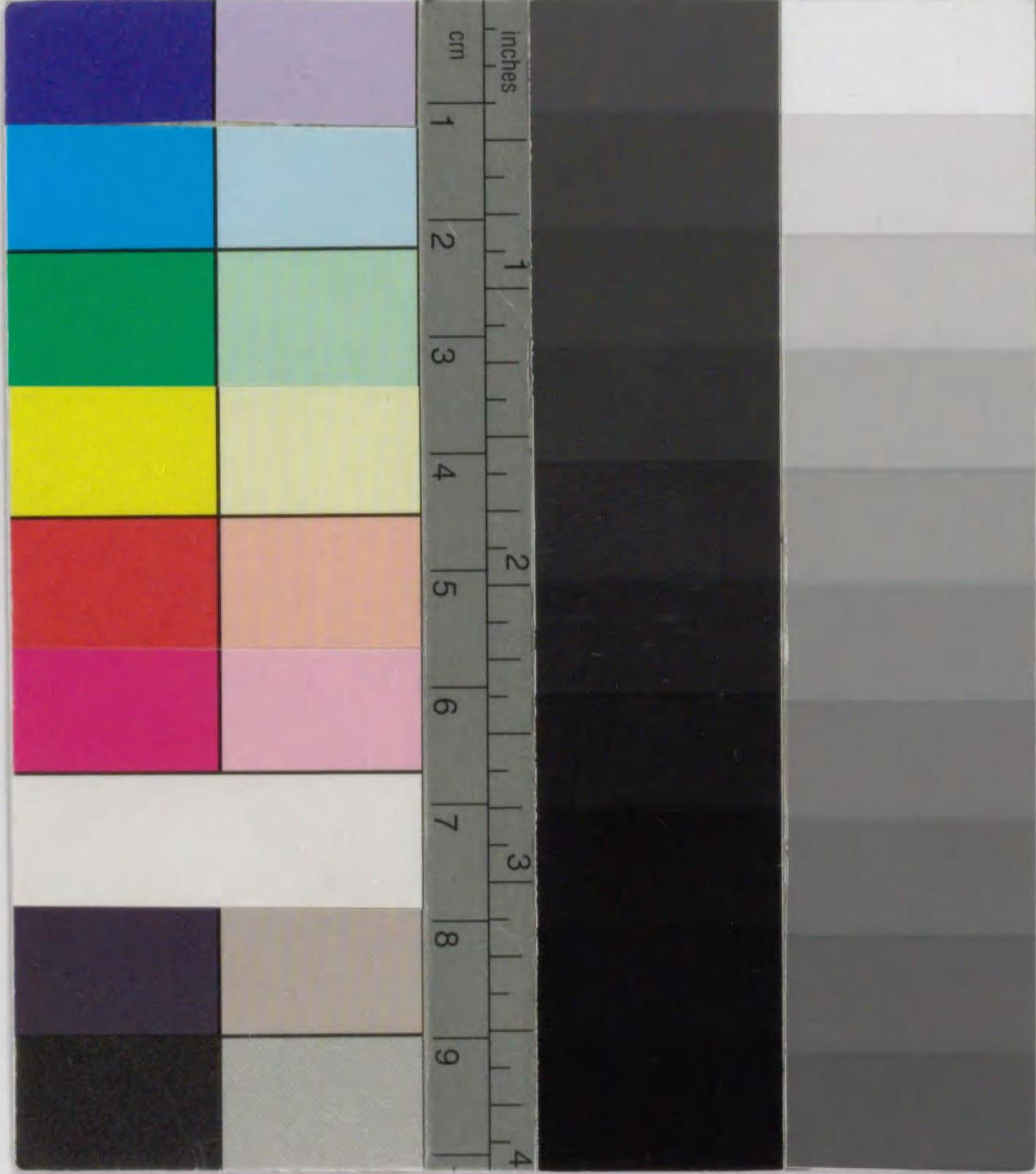
566-49



1200501514985

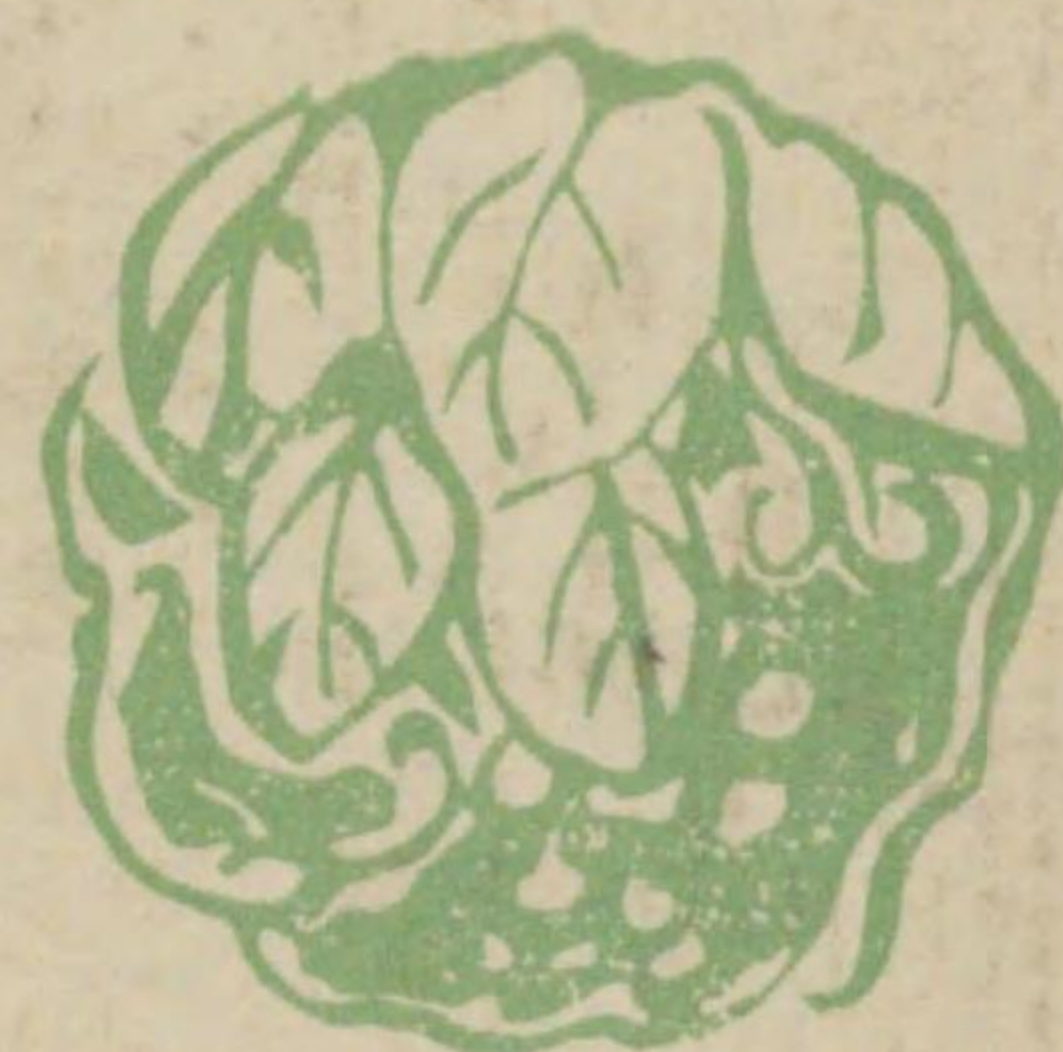
566
9

Handwritten Chinese characters in green ink on a brown background, arranged in vertical columns. The characters are in a cursive style, likely representing a title or a list of items.





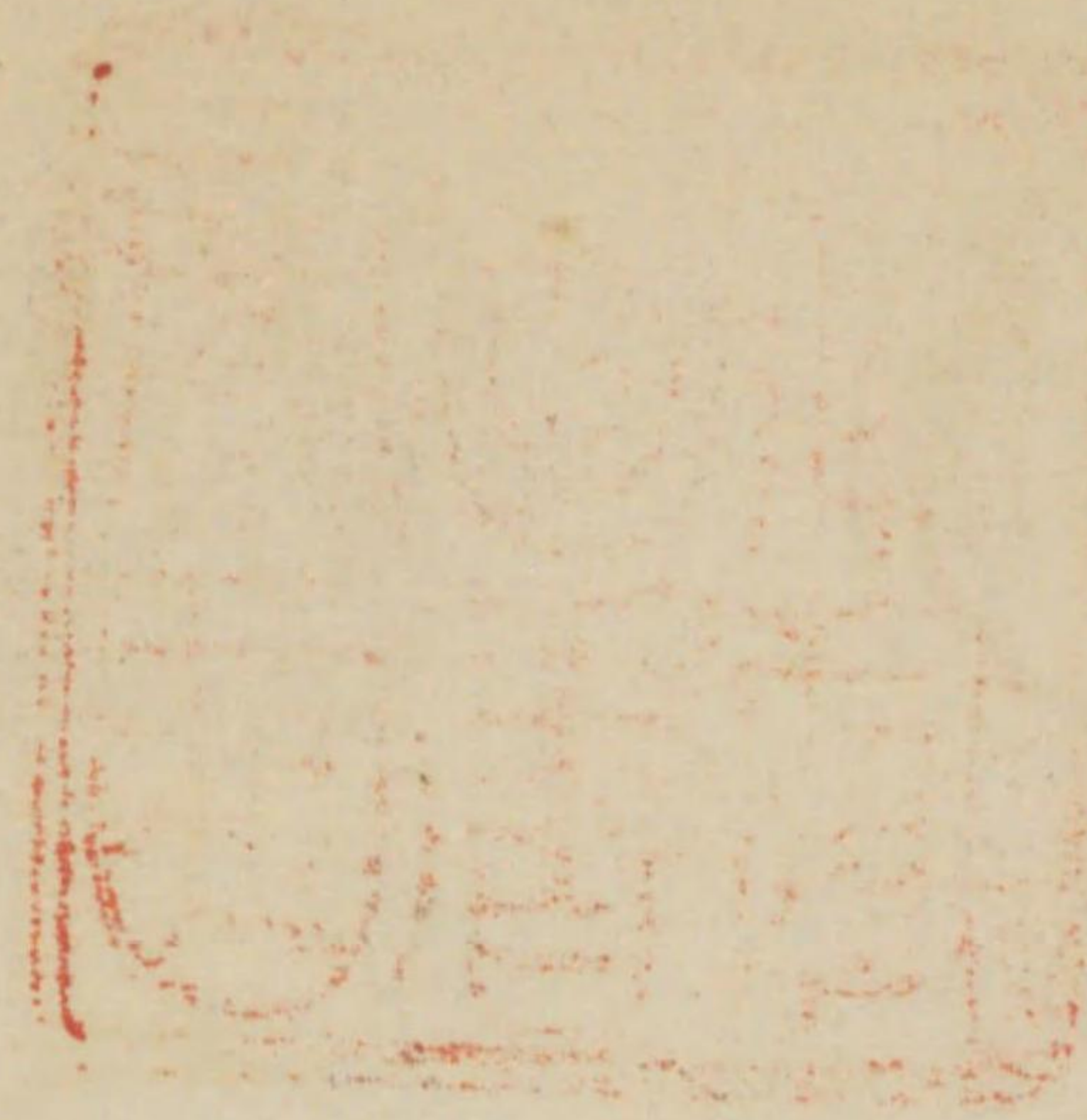
1362





漱石全集
第十八卷

書簡集



566-49

明 治 三 十 二 年	明 治 三 十 一 年	明 治 三 十 年	明 治 二 十 九 年	明 治 二 十 八 年	明 治 二 十 七 年	明 治 二 十 六 年	明 治 二 十 五 年	明 治 二 十 四 年	明 治 二 十 三 年	明 治 二 十 二 年
----------------------------	----------------------------	-----------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------	----------------------------

目次

九 五	九 〇	七 六	六 五	五 四	四 七	四 六	四 一	三 二	二 一	三
--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	---



明治三十三年
 明治三十四年
 明治三十五年
 明治三十六年
 明治三十七年
 明治三十八年
 明治三十九年
 明治四十年
 明治四十一年
 明治四十二年
 明治四十三年

九九
 一一三
 一四四
 一六〇
 一七六
 二〇五
 二七四
 四二二
 五三一
 五八五
 六三八

明治二十二年五月十三日 方便 下込區喜久井町一番地より本郷區眞砂町常盤會寄宿舎正岡常規氏へ

今日は大勢罷出失禮仕候然ば其砌り歸途山崎元修方へ立寄り大兄御病症並びに療養方等委曲質問仕候處
 同氏は在宅乍ら取込有之由にて不得面會乍ら本意取次を以て相尋ね申候處存外の輕症にて別段入院等にも
 及ぶ間鋪由に御座候得共風邪の爲めに百病を引き起すと一般にて咯血より肺勞又は結核の如き劇症に變ぜ
 ずとも申し難く只今は極めて大事の場合故出来る丈の御養生は專一と奉存候小生の考へにては山崎の如き
 不注意不親切なる醫師は斷然癩し幸ひ第一醫院も近傍に有之候得ば一應同院に申込み醫師の診斷を受け入
 院の御用意有之度去すれば看護療養萬事行き届き十日にて全快する處は五日にて本復致す道理かと存候且
 ツ少シにても肺患に罹ル「プロバビリチー」アル以上ハ二豎の膏肓に入らざる前に英斷決行有之度生あれ
 ば死あるは古來の定則に候得共喜生悲死も亦自然の情に御座候春夏四時の循環は誰れも知る事ながら夏は
 熱を感じ冬は寒を覺ゆるも亦人間の免かるゝ能はざる處に御座候得ば小にしては御母堂の爲め大にしては
 國家の爲め自愛せられん事こそ望ましく存候雨フラザルニ隔戸を網繆ストハ古人ノ名言に候へば平生の客
 氣を一掃して御分別有之度此段願上候

to live is the sole end of man!

五月十二日

歸ろふと泣かずに笑へ時鳥

聞かふとて誰も待たぬに時鳥

金之助

正岡大人

梧右

何れ二三日中に御見舞申上べく又本日米山龍口の兩名も山崎方へ同行し呉れたり
僕の家兄も今日吐血して病床にあり斯く時鳥が多くてはさすが風流の某も閉口の外なし呵々

二

明治二十二年五月二十七日 九便 牛込區喜久井町一番地より本郷區眞砂町常盤會宿舎正岡常規氏へ

昨日は存外の長座定めて御蒼蠅の事と恐入り奉る其砌り妄評を加へ御返呈申上候七草集定めて迂生歸宅
後御讀了の事と存じ候右に付き後に胸に手をあて善く／＼勘考仕れば前後の分引もなく無茶苦茶に六ツ
カ敷漢字を行列したるは流石の某も例のゾー／＼しきに似ず少しく赤面の體に御座候何事も不作法者と御
堪忍遊ばせと御詫の序でに願上けまするは批評の後に付したる二十八字の九絶に御座候是は餘り大人氣な
く小兒の手習と一般にて只々紅燈綠酒の文字を書き散らしたる而已に候得ば斯ル者を見事の尊著にくツつ
け置かん事七草集の耻辱且つは人目を愧づる小生の心底憐れと覺し給ひ一遍の御回向ならで一刀兩斷に切
り棄て、屑籠の淨土に送らせ玉へ生レつきの不具者に候得ば扁鵲の妙術も一人前には治し難きは無論の儀
と存じ候得ば生きて人目に曝しますより殺した方が親の慈悲かと存候去り乍ら凡夫の淺ましき萬一貴君の
配劑にて生來の癡疾も頓治の見込なきやと夫ばかり心配仕居候燒野「の」きゞす夜の鶴不具な子程「可」
愛ゆきは矢張り親の慾目に御座候必ず必ず凡夫と御さけしみなき様願上候 匆々

二十七日

菊井の里

漱石より

丈 鬼 様

七草集には流石の某も實名を曝すは恐レビデダスと少しく通がりて當座の間に合せに漱石となんし
たり顔に認め侍り後にて考ふれば漱石とは書かで漱石と書きし様に覺へ候此段御含みの上御正し被下
度先は其爲め口上左様

米山大愚先生傍より自己の名さへ書けぬに人のの文を評するとは「テモ恐シイ頓馬ダナー」チヨ
ン々々々々

三

明治二十二年八月三日 牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

炎暑之候御病體如何被爲渡候哉日夕案じ暮し居候とは些と古めかしくかたくるしき文句ながら近頃の熱
さでは無病息災のやからですら胃弱か腦病、脚氣、腹下シ杯種々な二豎先生の來臨を辱ふする折柄なれば
貴殿の如き殘柳衰蒲も宜しくといふ優にやさしき殿御は必ず療養專一攝生大事と勉強して女の子の泣かぬ
様餘計な御世話ながら願上候諸悪口は休題として愈本文に取り掛りますれば小生義愚兄と共に去月廿三日
出發東海道興津へ轉地療養の爲メ御越し被遊昨二日夜歸京仕候興津の景色の美なるは大兄も御承知ならん
が先づ大體を申せば

五

都城之西、六十餘里、山勢隆然、拔地而起、潮流直逼山麓、山海之間得平地、纔五十步、旗亭十數、點綴其間、與蟹戶漁家錯落相間、呼曰興津、所謂東海五十三驛之一也、山腹有古刹、佛閣經樓、高出于青靄之上、望之縹渺如畫圖、興津之西、山勢漸向北而走、海灣亦南曲、三里而達清水港、港盡而灣再東折、突出洋中二里許、古松無數、遠與天連、白帆明滅、行其間、是則興津驛之勝概也、呼其寺、曰清見寺、呼其山、曰清見山、呼其灣、曰清見瀉、而西南長岬、橫斷大海者、爲三保松原、遠山如黛、白雲蓬勃者、爲伊豆大嶋、天晴氣朗之時、仰看芙蓉于東北、大凡騷人墨客、上旗亭坐樓頭者、杯酒談笑之際、一矚而得悉收此數者於眸中焉、蓋所謂東海道、自東都至西京、長二百餘里、有驛五十有三、山則函嶺、水則天龍矢矧、都邑則靜岡名古屋、其間長亭短驛、名山大川、固不爲鮮矣、然至山海之勝、魚蝦之美、則余獨推興津爲最、是以數年以來、縉紳公卿、避暑遊于此地、陸續麇至、山蒼水明之鄉、亦將漸化絃歌熱鬧之地、可嘆也、……餘り長イト御退屈先ヅ、御里が露ハレヌ中ニ切り上ゲベク候右の如く風光は非常に異な處ナレ風俗ノ卑陋ニテ物價の高値ナルニハ實ニ恐レ入りタリ小生等最初は水口屋と申す方に投宿せしに一週間二圓にて誠にいや、雲助同様の御待遇を蒙むれり樓上には曾我祐準先生將軍乎として鎮座まします者から拙如き貧乏書生は「バラサイト」同様の有様御憫笑可被下候拙曾我中將を呼んで御山の大将ト云へり（解に曰く高之謂山、樓者高故曰御山、大将者武人之）手短かに申せば樓上ノ軍師（梁上ノ君子ニアラス）ト云フ意味之宿屋ノ主人御山の大将ヲ拜スルヲ平蜘蛛ノ如ク婢僕ノ之ヲ敬スルヲ鬼神ノ如シ諸々金錢程世ノ中に尊きはあらずと樓下ニテ握り罌丸をしながら名論を發明仕り候夫より恍惚心を鼓舞し身延屋といふに一週間三圓の御散財にて御轉居仰せ被出二三日逗留すると又々何處かの縉紳先生の爲に追出され、どうにもこゝにも駿河の國立つたり寐たり又興津、清見の浦は清むとても心はずまぬ濱千鳥啼くより外はなかりしが（ヤ、デン）といふ體裁、汗臭き富士講連と同車にて漸々歸京仕候何れ道中の御話は御面晤之節萬々可申

述候 云々

先は炎熱の候時候御厭ひ可被成何れ九月には海水にて眞黒に相成りたる顔色を御覽に入べく夫迄はアヂユ一

菊井町のなまけ者

丈鬼 兄座 右

〔正岡子規稿「筆まかせ」より〕

四

明治二十二年九月十五日 牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

露冷殘螢瘖風寒柳影疎なるの時節とはあまり長過ぎてゴロがわるくは候得共僕が創造の冒頭ナレバだまつて御讀被下度候儲右の様なる時節到來仕候處貴兄漸々御快方の由何よりの事と存候小生も房州より上下二總を経歴し去月卅日始めて歸京仕候其後早速一書を呈スル積りに御座候處既に御出京に間もあるまじと存日々延頸して御待申上候處御手紙の趣にては今一ヶ月も御滞在の由隨分御のんきのことと存候 云々

〔正岡子規稿「筆まかせ」より〕

五

明治二十二年九月二十日 牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

（略）五絶一首小生の近況に御座候御憫笑可被下候

抱劍聽龍鳴、讀書罵儒生、如今空高逸、入夢美人聲、

第一句は成童の折の事二句は十六七の時轉結は即今の有様に御座候字句は不相變勝手次第御正し被下度候云々

〔正岡子規稿「筆まかせ」より〕

六

明治二十二年九月二十七日 方便 牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

貴意の如く懐冷財布瘡の候大まい二錢の御散財をも顧み給はず四國下りまで御震翰下し賜はる段御親切
嚙かし感涙にむせびて郎君の大慈大慈をあり難がり奉るならんといやに恩に著せて御注進仕るは餘の儀に
あらず先頃手紙を以て依頼されたる點數一條おつと承知皆迄云ひ給ふな萬事拙の方寸にありやす先づ江戸
つ子の爲す所を御覽じろとひま人のありがたさ急に用事の持ち上りたるを嬉しがり早速祕術をつくして久
米の仙人を生捕り先づ安心はした者の鐵砲すれで（面すれより脱化し來るに似たり）手の皮の厚さ一尺も
あると云ふひなた臭い兵隊を相手の談判は都び男やさ男を以て高名なるやつがれには到底出來やせん引き
下りやすと反り身になつて斷はると云ふ所だがそこがそれ君いや妾の爲めでけす掛がへさへあれば命の二
つや三は進呈仕りてよろしくと云ふ位な親切者だからちつともひるます古今未曾有の勇氣を鼓舞して二三
回戰爭の後是も武運目出度乃公の勝利と相成令娘の身體は一部一年三の組の室中を横行しても豎行しても
御勝手次第なり
定めて

あらまあほんとうに頼もしい事、ひよつとこの金はんは顔に似合ない實のある人だよ原と云はれるだろ
ふと乃公の高名手柄を特筆大書して吹聴する事あら〜如此

九月二十七日夜

郎君より

妾

此手紙到着の頃は定めて東上の途中ならむ若しも亦愚圖々々して故郷にこびりついて居るなら此書
拜見次第馳出して東京へ罷り出べき事

七

明治二十二年十二月三十一日 牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

歸省後は如何病軀は如何讀書は如何執筆は如何、如何にして此長き月日を短く暮しめざる、やけふは大
三十日なりとて家内中大さわきなるに引きかへ貧生のありがたさは何の用事もなく只晝は書に向ひ膳に向
ひ夜は床の中にもぐりこむのみ氣取りて申さば閑中の閑、靜中の靜を領する之俗に申せば錢のなきため不
得已握り擧丸をしてデレリと陋巷にたれこめて御座る之此休みには「カーライル」の論文一冊を讀みたり
二三日前より「アルノルド」の「リテレチュア、エンド、ドクマ」と申者を讀みかけたり御前兼て御趣向
の小説は已に筆を下し給ひしや今度は如何なる文體を用ひ給ふ御意見なりや委細は拜見の上逐一批評を試
むる積りに候へとも兎角大兄の文はなよ〜として婦人流の習氣を脱せず近頃は篁村流に變化せられ舊來
の面目を一變せられたる様なりといへとも未だ眞率の元氣に乏しく従ふて人をして案を拍て快と呼びしむ
る箇處少きやと存候總て文章の妙は胸中の思想を飾り氣なく平たく造作なく直叙スルガ妙味と被存候され
ばこそ瓶水を倒して頭上よりあびる如き感情も起るなく胸中に一點の思想なく只文字のみを弄する輩は勿

論いふに足らず思想あるも徒らに章句の末に拘泥して天真爛漫の見るべきなければ人を感動せしむると覺束なからんかと存候今世の小説家を以て自稱する輩は少しも「オリヂナル」の思想なく只文字の末をのみ研鑽批評して自ら大家なりと自負する者にて北海道の土人に都人の衣裳をさせたる心地のせられ候成程頭の飾り衣の模様仕立の具合寸分の隙間なきかは知らねど其人の價值はと問はゞ三文にも當せず其思想はと問はゞ一顧の價なきのみならず鼻をつまんで却走せざるを得ざる者のみの様に被思候獨り篁村翁のみは直ちに胸臆を直叙して天真爛漫の風姿紙上に躍然たる處なきにあらねど是亦質朴なる老翁のいやみ氣なきに過ぎず田舎漢の通がりにまさる萬々なりといへ共ざりとも端肅とか遁麗とか磊落とか人を一見嘆賞感動せしむる風采には乏きやに被存候故に小生の考にては文壇に立て赤幟を萬世に翻さんと欲せば首として思想を涵養せざるべからず思想中に熟し腹に滿ちたる上は直に筆を揮つて其思ふ所を叙し沛然驟雨の如く勃然大河の海に瀉ぐの勢なかるべからず文字の美章句の法杯は次の其次に考ふべき事にて Idea it self の價值を増減スル程の事は無之様に被存候御前も多分此點に御氣がつかれ居るなるべけれど去りとて御前の如く朝から晩まで書き續けにては此 Idea を養ふ餘地なからんかと掛念仕るゝ勿論書くのが樂なら無理によせと申譯にはあらねど毎日毎晩書て書き續けたりとて子供の手習と同じとて此 original Idea が草紙の内から靈現する譯にもあるまじ此 Idea を得るの樂は手習にまさると萬々なると小生の保證仕る處なり(餘りあてにならねど)伏して願はくは(雜誌にあらず)御前少しく手習をやめて餘暇を以て讀書に力を費し給へよ御前は病人之病人に責むるに病人の好まぬを以てするは苛酷の様なりといへども手習をして生きて居ても別段馨しきことなし knowledge を得て死ぬ方がましならずや塵の世にはかなき命ながらへて今日と過ぎ昨日と暮すも人世に happiness あるが爲めわれが十倍の happiness をすて、十分の一の happiness を食り夫にて事足り給ふと思ひ給ふや併し此 Idea を得るより手習するが面白し

と御意遊ばさば夫迄なり一言の御答もなし只一片の赤心を吐露して歳暮年始の禮に代る事しかり穴賢御前此書を読み冷笑しながら「馬鹿な奴だ」と云はんかね兎角御前の coldness には恐入りやす

十二月卅一日

漱石

子規御前

〔正岡子規稿「筆まかせ」より〕

八

明治二十三年一月 牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

いそがしき手習のひまに長々しき御返事態々御つかはし被下候段御芳志の程ありい(洋語にあらず)かく迄御懇篤なる君様を何しに冷淡の冷笑のとそしり申すべきやまじめの御辯護にていたみ入りて穴へも入りたき心地ぞし侍る程に一時のたわ言と水に流し給へ七面倒な文章論か、すともよきに、そこがそれ人間の淺ましき終に餘計などをなべて君に又攻撃せられて大閉口何事も餅が言はする雜言過言と御許しやれ當年の正月は不相變雜煮を食ひ寐てくらし候寄席へは五六回程参りかるたは二返取り候一日神田の小川亭と申にて鶴蝶と申女義太夫を聞き女子にてもかゝる掘り出し物あるやと愚兄と共に大感心そこで愚兄余に云ふ様「藝がよいと顔迄よく見える」と其當否は君の御批判を願ひます

米山は當時夢中に禪に凝り當休暇中も鎌倉へ修行に罷越したり山川は不相變學校へは出でこず過日十時頃一寸訪問せしに未だ褥中にありて煙草を吸ひ夫より起きて月琴を一曲弾て聞かせたりいつもくんの氣なるが心は憂鬱病にかゝらんとする最中へ是も貴兄の判斷を仰ぐ兎角此頃は學校でも吾黨の子が少ないか

ら何となく物淋しく面白くなし可成早く御歸りくもう仙人もあきがきた時分だろうから一寸已めにして
此夏に又仙人になり給へ云々
別紙文章論今一度貴覽を煩はす云々

四國仙人悟下

埋塵道人拜

七草集四日大盡水戸紀行其他の雜錄を貴兄の文章と之文章でなしと仰せらるれば失敬御免可被下候

〔別紙〕

僕一己ノ文章ノ定義ハ下ノ如シ

文章 is an idea which is expressed by means of words on paper 故ニ小生ノ考ニテハ idea ガ文
章ノ Essence ニテ words ナ arrange スル方ハ element ニハ相違ナケレド essence ナル idea 程大切
ナラズ經濟學ニテ申セバ wealth ナ作ルニハ raw material ト labor ガ入ナルト同然ニテ此 labor ハ
單ニ raw material ナ modify スルニ過ギズ raw material ガ最初ニナクテハ如何ナル巧ノ labor モ手
ヲ下スニ由ナキト同然ニテ idea ガ最初ニナケレバ words' arrangement ハ何ノ役ニモ立タヌナリ
是ヨリ best 文章ヲ解セン

Best 文章 is the best idea which is expressed in the best way by means of words on paper.
此 under line ノ處ノ意味ハ idea ナ其儘ニ紙上ニ現ハミテ讀者ニ己レノ idea ノ Exact ナル處 (no
more no less) ナ感ゼシムルト云フ義ニテ是丈ガ即チ Rhetoric ノ treat スル所之去レバ文章 (余ノ所謂)

ハ決シテ Rhetoric ノミヲ指スニ非ス此儀上ノ解ニテ御合點アリタシ

ソコデ此 idea ナ涵養スルニハ culture ガ肝要ニテ次ハ己レノ經驗ナリ去レモ己レノ經驗ノ區域ノミニ
テハ Idea ナ得ル區域狭キ故 culture ノ方が要用ナリト申スナリ

然ラバ Culture トハ如何ナル者ト云フニ knowing the ideas which have been said and known in
the world ト小生ハ定義ヲ下ス積リナリ然ラバ culture ナ得ル方ハト云フニ讀書ヲ捨テ、他ノ方ナキハ
貴君モ御左袒ナルベシ故ニ讀書ヲシ玉ヘト勸ムルナリ乍ラ Rhetoric ナ廢セヨト云フニ非ス Essence
ヲ先ニシテ form ナ後ニスベク Idea ナ先ニシテ Rhetoric ナ後ニセヨト云フナリ (時ノ先後ニアラズ輕
重スル所アルベシト云フノ意ナリ)

是ヨリハ嚴肅トカ端麗トカ云フ文章ヲ analytically ニ御示シ申スベシ

(1) 嚴肅ナル文章 = 嚴肅ナル idea expressed by means of words.

(2) 端麗ナル文章 = 端麗ナル idea expressed by means of words. etc.

故ニ idea ニシテ嚴肅トカ端麗トカ云フ形容詞ヲ附ケ得ベキ Idea ナら紀行文デモ議論文デモ小説デモ
何デモ嚴肅ナル又端麗ナル文章ト云ヒ得ル也

(然シ idea ニモ斯ル形容詞ヲ附シガタキ者アリ此 idea ナ express スル文章ニハ到底カ、ル形容詞
ヲ附シ難シ此ハ scientific treatises ニテ見出ス物ニテ pure literary work ニハ如何ナル種類ヲ問ハズ
斯ル形容詞ヲ付スルヲ得ベシト存ズ)

是ヨリ mathematically = Idea + Rhetoric ノ combination ヨリ何如ナル文章ガ出來ルカヲ御目ニ
カケン

1 case Idea = best } make up no 文章
Rhetoric = 0 }

臨杯ハ best idea ガブルル Rhetoric ナキタメ any speech ガデキヌ如シ但シコレハ文章ノ例ニアラズ

2 case Idea = 0 } no 文章 imaginary case
Rhetoric = best }

3 case Idea = best } best 文章
Rhetoric = best }

4 case Idea = bad } bad 文章
Rhetoric = best }

5 case Idea = best } ordinary 文章
Rhetoric = bad }

6 case Idea = bad } bad 文章
Rhetoric = best }

此 last two cases ナ比較セバ Idea ノ R ヨリ要用ナルヲ知ルベシ

此 cases ノ中 1 & 2 ハ殆ント extreme ノ case デ實際ナシト云フモ可ナリ但シ尤 important トナルハ 5 & 6 ナリ元來 best Rhetoric トハ△ナラ△ノ idea ナ Express シテ人ガ讀ンデモ同形同積ノ△ニ感ズルヲ云フニアラズヤ換言スレバ original idea ナ original ノ儘ニ convey スルガ best Rhetoric ナリ故ニ假令 R ガ best ナリトモ idea ガ bad ナレバ bad ナ idea ナ bad ナリニ convey スルニ過

ギザレバ文章ハ bad ニシカナラズ之ニ反シテ R ハ bad ニテモ Idea ガ best ナレバ best ナ Idea ガ此 bad Rhetoric ノ爲メ幾分カ modify セラント best ナリニ express セラル、能ハズ單ニ ordinary ノ者トナルニ過ギザルナリ

小生ノ平タク無造作ニ飾氣ナク Idea ナ express スルガ妙文ナリトハ (3) ノ case ナニフノミ即チ best ナ Idea ナ平タク無造作ニ best ナリニ讀者ニ感ゼシムルノ (which is only possible by means of the best Rhetoric!) 章句ノ末ニ拘泥スルトハ第二ノ如キ case 々 R ハ best ナレバ Idea ガ〇ニ近ケレバ幾んど no 文章ナリト云フン

君ノ三條 (1) 讀ム本ヲ知ラサバ人ニ聞クガク、デハナイカ
ハ實ニ (2) 讀ム本ガナクハ買フテモ借リテモイ、デハナイカ
Himsy (3) 英文ガ讀メナクハ勉强シテモヨシバムヲ得ズバ日本書漢籍ヲ讀ムデモイ、デハナイカ
君ノ云フ二條ノ文學者ノ目的ハ僕ハ大ニ不賛成ダケレバ暫ラク君ノ云フ通り右ノ二條ガ目的ナルニモセヨ君ノ所謂文章 (Rhetoric only) デ此目的ガ達セラル、ト思ヒ給フヤ又ハ (Rhetoric only) ガ此目的ヲ達スルニ最必要ナリト思ヒ玉フヤ今一度御勸考アラマホシウ

【正岡子規稿『筆まかせ』より】

九

明治二十三年七月二十日 牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

御經づくめに抹香くさき御文益すぎにてちと時候おくれながら面白をかしく拜見仕候先以て御病體日々佛くさく被相成候段珍重奉存候此頃の暑は松山の邊土のみならず花のお江戸も同様にて日中はさながら

中の章魚同然中々念佛廻向杯の騒ぎにあらず唯々命に別條なきを頼りにて日々消光仕る仕儀なれば愛國心ある小生も此暑さをちつとこらへて蒼生の爲じや百姓の爲じやとすましこんでゐられたものにあらず(尤血液の少なき冷血動物に近き貴殿杯は此限りにあらず)其上何の因果か女の祟りか此頃は持病の眼かよろしくない方で讀書もできずといつて執筆は猶わるし實に無聊閑散の極、試験で責めらるゝよりは餘程つき位之無事は貴人とは如何なる馬鹿の言ひ草やら今に至つて始めて其うそなる事を知れり實は此度非常の大奮發大勉強にて(吳服屋の引札にあらず)平生貯蓄せるポテンシャル、エナージーを化學的作用にてカイチツクに變じ九月上旬には貴殿の目を驚かしてやらんと心待ちに待ちたる甲斐もなくあら悲しや天吾才を妬みそう今から大學者になられては困るといふ一件で卑怯にも二豎を以て吾英氣を挫折せり狭くいへば國の爲め大きくいへば天下の爲め實に惜むべき事共なり併し小生が眼病の爲め貴殿九月になつて小生に面會するも別段目を驚かすともなく膽を寒からしむる程の騒動は出來せず濟むから其點は安心すべし(略)貴意の如く山川を落第させる位なら落第させる人はいくらでもある第一貴殿杯は落第志願生だから同人と變つてやれば善いのにそこが人事の不如意で不得已次第さ

午眠の利益今知るとは愚か／＼小生杯は朝一度晝過一度、廿四時間中都合三度の睡眠之晝寐して夢に美人に邂逅したる時の興味杯は言語につくされたものにあらず晝寐も此境に達せざれば其極點に至らず貴殿已に晝寐の堂に陟るよろしく其室に入るの工夫を用ゆべし

曾て君が「西行の顔も見えけり富士の山」といふ句を自慢したが僕が先頃富士を見て不圖口を衝て出た名吟にはとても不及斯様なる手昏の後に書くのは勿體なけれども別懇の間柄だから拜讀さすべし其名吟に曰く

西行も笠ぬいで見る富士の山

我ながら感々服々だ然しかやうの名吟を漫りに人に示すは天機を漏らすの恐れあり決して他言すべからず又くだらぬ隨筆中にたゞき込むべからず穴賢

漱石

子規病牀下

「正岡子規稿『筆まかせ』より」

明治二十三年八月九日 牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

爾後眼病兎角よろしからず其がため書籍も筆硯も悉皆放抛の有様にて長き夏の日を暮しかね不得已く、り枕同道にて華胥の國黒甜之郷と遊びあるき居候得共未だ池塘に芳草を生せず腹の上に松の木もはへず是と申す珍聞も無之此頃では此消閑法にも殆んど意屈仕候といつて坐禪觀法は猶できず瀟茗漱水の風流氣もなければ仕方なく只「寐てくらす人もありけり夢の世に」杯と吟じて獨り洒落たつもの處瘠我慢より出た風雅心と御憫笑可被下候然し小生の病は所謂する／＼ベツたりにて善くもならねば悪くもならぬといふ有様故風光と隔生を免かれたりと喜ぶ事もなきかはりには韓家の後苑に花を見て分明ならずといふ嘆も無之眼鏡ごしに簾外の秋海棠の哀れに咲きたるをかしと眺むる位の事は少しも差支無之候去れば時々は庭中に出て(米山法師の如く蟬こそ捉らね)色々ないたづらを致し候茶の樹の根本に丹波ほうづきとかいふ實の赤く色づきて寐ころけたるを何心なく手折りて不圖心つけば別に贈るべき人もなし小さき妹にてもあれかすと願ふも甲斐なし撫し子の淵みたる間より桔梗の一株二株ひよる長く延びいでたるが雨にうたれて苔を枕に打ち臥したるに紫の花びらを傳ひて小蟻の行きかふさま眼病ながらよく見えたり女郎花の時なら

ぬ粟をちらすを實の餌と思ひて雀の群がりて拾ふを見るに付諸々鳥獸は馬鹿な者だと思へどさういふ人間も矢張此雀と五十歩百歩なれば悪口はいへず朝貞も取りつく枝なければ所々這ひ廻つた末漸々松の根形にある四角張たる金燈籠に纏ひ付かなし氣にたつた一輪咲きたるは錆びつきて見る影もなき燈籠の面目なり病み上りの美人が壯士の腕に倚りけるが如しとでも評すべきか呵々先づ庭中の景は此位にておやめと致すべし

此頃は何となく浮世がいやになりどう考へても考へ直してもいやで／＼立ち切れず去りとして自殺する程の勇氣もなきは矢張り人間らしき所が幾分かあるせいならんか「ファウスト」が自ら毒藥を調合しながら口の邊まで持ち行きて遂に飲み得なんだといふ「ゲーテ」の作を思ひ出して自ら苦笑ひ被致候小生は今迄別に氣兼苦勞して生長したといふ譯でもなく非常な災難に出合ふて南船北馬の間に日を送りしともなく唯七八年前より自炊の竈に顔を焦し寄宿舎の米に胃病を起しあるひは下宿屋の二階にて飲食の決闘を試みたりそれは／＼のん氣に月日を送り此頃は其にも倦きておのれの家に寐て暮す果報な身分でありながら定業五十年の旅路をまだ半分も通りこさず既に息竭き候段貴君の手前はづかしく吾ながら情なき奴と思へどこれ *misanthropic* 病なれば是非もなしいくら平等無差別と考へても無差別でないからおかしい *life is a point between two infinities* とあきらめてもあきらめられないから仕方ない

We are such stuff

As dreams are made of; and our little life

Is rounded by a sleep.

といふ位な事は疾から存じて居ります生前も眠なり死後も眠りなり生中の動作は夢なりと心得ては居れど左様に感じられない處が情なし知らず生れ死ぬる人何方より來りて何かたへか去る又しらす假の宿誰が爲

めに心を惱まし何によりてか目を悦ばしむると長明の悟りの言は記憶すれど悟りの實は迹方なし是も心といふ正體の知れぬ奴が五尺の身に蟄居する故と思へば悪らしく皮肉の間に潛むや骨髓の中に隠るゝやと色詮索すれども今に手掛りしれず只煩惱の焰熾にして甘露の法雨待てども來らず慾海の波險にして何日彼岸に達すべしとも思はれず已みなん／＼目は盲になれよ耳は聾になれよ肉體は灰になれかしわれは無味無臭變ちきりんな物に化して

I can fly, or I can run,

Quickly to the green earth's end,

Where the bowed welkin slow doth bend;

And from thence can soar as soon

To the corners of the moon.

と申す様な氣樂な身分になり度候、あゝ正岡君、生て居ればこそ根もなき毀譽に心を勞し無實の褒貶に氣を揉んで鼠糞梁上より落つるも膽を消すと禪坊に笑はれるではござらぬか御文様の文句ではなけれど二ツの目永く閉ぢ一つの息永く絶ゆるときは君臣もなく父子もなく道徳も權利も義務もやかましい者は滅茶／＼にて眞の空々眞の寂々に相成べく夫を樂しみにながらへ居候棺を蓋へば萬事休すわが白骨の歟の先に引きかゝる時分には誰か夏目漱石の生時を知らんや穴賢

(略) 小生箇様な愚癡ッほい手紙君にあけたる事なしかゝる世迷言申すは是が皮きり／＼苦い顔せずと讀み給へ

明治二十三年月日不詳 八月末頃 牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

さすが詩神に乗り移られたと威張られる御手際読み去り読み来つて河童の何とかの如くならず天晴れくつかつほれく手を拍て感じ入候然し時々は詩神の代りに悪魔に魅入られたかと思ふ様な悪口あり君此頃大變傷をかつぎ出す事が好きになつたから僕一偈を左右に呈すべし毎朝焼香して此偈を唱へ此悪魔を祓ひ給へ

我昔所造諸惡業 皆由無始貪瞋癡

從身語意之所生 一切我今皆懺悔

女崇の攻撃晝寐の反對奇妙く然し滑稽の境を超えて悪口となりおどけの旨を損して冷評となつては面白からず其も貴様の手紙が癩に障るからだと言はるれば閉口仕候悟道徹底の貴君が東方朔の嚙語に等しき狂人の大言を眞面目に攻撃してはいけない(略)

詩神は佛なり佛は詩神なりといふ議論斬新にして面白し君能く色聲の外に遊んで清淨無漏の行に住し自己の境界を寫し出されたとすれば敬服の外なし今より朋友の交を絶ち師弟の禮を以て贊を執り君の門に遊ばんかね然し例の臆測的揣摩的の議論なら一切御免蒙る(悟れ君)なんかと呶鳴つても駄目だ(狐禪生悟り)杯とおつにひやかしたつて無功とあきらむべし又理窟詰め雪隠詰めの悟り論なら此方も大分言ひ草あり反對したき點も澤山あれど此頃の天氣合ひ兎角よろしからず攫み合ひ取組合ひ果ては決闘でもしなければならぬ様になるとどつちが怪我をしても海内幾多の美人を愁殺せしむるといふ大事件だから一先づこゝ

は中直りをして置きましよう何れ九月上旬には詩神にのりうつられたといふ顔色しみぐと拜見可仕候

君が散々に僕をひやかしたから僕も左の一詩を詠じてひやかしかへすこ

江山容不俗懷塵。 君是功名場裏人。

憐殺病軀多客氣。 漫將翰墨論詩神。

君の説諭を受けても浮世は矢張り面白くもならず夫故明日より箱根の靈泉に浴し又々晝寐して美人でも可夢候

仙人墮俗界。 遂不免喜悲。 啼血又吐血。 憔悴憐君姿。

漱石又枕石。 固陋歡吾癡。 君病猶可癒。 僕癡不可醫。

素懷定沈鬱。 愁緒亂如絲。 浩歌時幾曲。

一曲唾壺碎。 二曲双淚垂。 曲闕呼咄々。 衷情欲訴誰。

白雲蓬勃起。 天際看蛟螭。 笑指函山頂。 去臥葦湖湄。

歲月固悠久。 宇宙獨無涯。 蜉蝣飛湫上。 大鵬嗤其卑。

噓者亦泯滅。 得喪皆一時。 寄語功名客。 役々欲何爲。

眞に塵陋で詩とも何とも申し様御座なく候へ共何となく出来仕候間御笑ひ草に御目にかけて候何卒御叱りなく御添削の程偏に奉願候(どうだ此位卑下したらさすがの君もよもや犬の糞の躰きうちは爲されまい)

露地白牛

正岡詞兄

明治二十四年四月二十日 郵便 牛込區喜久井町一番地より本郷區眞砂町常盤會寄宿舎正岡常規氏へ

狂なるかな狂なるかな僕狂にくみせん君が芳墨を得て始めは其唐突に驚ろき夫から腹を抱へて満案の嘯を噴き終りに手紙を掩ふて泣然たり君の詩文を得て此の如く數多の感情のこみ上げたるは今が始めてなり君が心中一點の不平俄然炎上して滿腦の大火事となり餘焰筆頭を傳はつて三尺の半切に百萬の火の子を降らせたるは見事にも目ばゆき位なり平日の文章心を用いざるにあらず修飾なきにあらず只狂の一字を缺くが故に人をして瞠若たらしむるに足らず只此一篇狂氣爛熳わが衷情を寸斷しわが五尺の身を戰栗せしむ七草集はものは隠れみのも面白からず只此一篇……

嗚呼狂なる哉狂なるかな僕狂にくみせん僕既に狂なる能はず甘んじて蓄音器となり來る廿二日午前九時より文科大學哲學教場に於て團十郎の假色おつと陳腐漢の囁語を吐き出さんとす蓄音器となる事今が始めてにあらず又是が終りにてもあるまじけれど五尺にあまる大丈夫が情けなや何の果報ぞ自ら好んでかゝる器械となりはてたる事よ行く先きも案じられ年來の望みも烟りとなりぬ梓弓張りつめし心の弦絶えて功名の射らんとも思はざれば馬鹿よ白癡と呼ばれて一世を過し蓄音器となつて紅毛の士に弄ばるゝも亦一興ぞかし

左様なら

廿日夜

偷花兒殿

平凸凹

三

明治二十四年七月九日 郵便 牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

觀劇の際御同伴を不得残念至極至極残念(宛然子規口吻) 去月卅日曇天を冒して早稻田より歌舞伎座に赴くぶらゝあるきの錢いらす神樂坂より車に乗る烈しかれとは祈らぬ南風に車夫よたまたあるきの小言澤山否とよ車主さな怒り給ひぞ風に向つて車を引けばほろふくるゝの道理ぞかしと説諭して見たれど車耳南風にて一向埒あかず十時半頃土間の三にて仙湖先生を待つ程なく先生到着練郷をつれて來ると思ひの外岩岡保作氏を伴ひし時こそ肝つぶれしか(再模得子規妙) 固より年來の知己なれば否應なしに柎に引つぱり込んで共に見物す柎の内より見てあれば團十郎の春日の局顔長く婆々然として見苦し然し御菓子頂戴御壽もじよろしい口取結構と舞臺そつちのけのたら腹主義を實行せし時こそ愉快なりしか。仙湖先生は頻りに御意に入つてあの大きな眼球から雨滴程な涙をこぼすやつがれは割前を通り越しての飲食に天咎のがれ難く持病の疝氣急に胸先に込み上げてしくゝ痛み出せし時は芝居所のさわぎにあらず腰に手を當て顔をしかめての大ふさぎははたの見る目も憐なり腹の痛さをまぎらさんと四方八方を見廻せば御意に入る婦人もなく只一軒おいて隣りに圓遊を見懸けしは鼻々おかしかりしなあいつの痘痕と僕のと數にしたらどちらが多いだらうと大に考へて居る内いつしか春日の局は御仕舞になりぬ公平法問の場は落語を實地に見た様にて面白くて腹の痛みを忘れたり

惣じて申せば此芝居壹圓以上の價値なしと歸り道に兄に話すと田舎漢が始めて寄席へ行と同じ事どころが面白いか分るまいと一本鎗込られて僕答ふる所を知らずそこで愚兄得々賢弟黙々

今日學校に行つて點數を拜見す君の點で缺けて居る者は物集見の平生點(但し試験點は七十)と小中村

三

さんの點數（是は平生も試験も皆無だよ）餘は皆平生點ありじくそんは平生87に試験46先以て恐悅至極右の譯だから小中村の平生點六十以上と物集見の平生點六十以上あれば九月に試験を受ける事が出来る然し今のまゝでは落第なり

先は手始めの御文通迄餘は後便

九日午後

金之助

正岡常規さま

一四

明治二十四年七月十六日 郵便 牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

貴地御安着日々風流三昧に御消光の事と羨望仕居候小弟不相變宰予の弟子と相成雖しがたき朽木をござるく持ちあつかひ居候

小中村物集見平常點の義に付き教務掛りへ照會致候處一日も早く御差出し有之可くとの事故去る十二日芳賀矢一君方へ参り右の談判相頼み候處小中村は當時伊香保入浴中の由にて早速木暮金太夫方へ同氏より書狀差し出しもらひ候

物集見へも同日同時に頼み狀同人より相つかはし候但し兩人とも不承知なら返事をよこす筈承知なら何とも云ふて來ぬ筈なり今迄何ともいふて來ぬ故出して來れたに相違なしと斷定する者なり（尤も此頃の暑さに恐れて學校へは参り不申）由て來る九月に追試験の御覺悟にて随分御勉強可被成候」
芳賀氏訪問の節同人の話しに來る九月より大學にて文學會雜誌といふ者を發兌する都合にて其手順と、

のいたる赴きに御座候過日大兄と御話しの件不圖實行の緒につきたるは随分奇妙月且は發兌の上の事何しろ大學の名譽に關せぬ様願度者也大兄も一臂の御盡力あつては如何（おいやでけすかね）

先は用事迄餘は後便

此手紙二本目に付無性者の本性として非常の亂筆なりおゆるしあれ

盆の十六日

平凸凹

物草次郎様

こもだれの中

試験は是非受ける積りでなくては困ります

一五

明治二十四年七月十八日 郵便 牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ（封筒の表側に「眞言秘密封じ文」あり）

去る十六日發の手紙と出違に貴翰到着早速拜誦仕候人をけなす事の好きな君にほめられて大に面目に存候嗚呼持つべき者は友達なり

愚兄得々賢弟黙々の一語御叱りにあづかり恐縮の至り以來は慎みます

御歸省後御病氣よろしからざるおもむきまことに御氣の毒の至に存候左様の御容體にては強いて在學被遊候とても詮なき事御老母のみかは小生迄も心配に御座候得ば貴意の如く撰科にても御辛抱相成る方可然人爵は固より虚榮學士にならなければ飯が食へぬと申す次第にも有之間じく候得ば命大切と氣樂に御修業可然と存候夫に就ても學資上の御困難はさこそと御推察申上候といふ迄にて別段名案も無之、いくら僕が

器械の龜の子を發明する才あるも開いた口へ牡丹餅を抛りこむ事を知つて居るとも是ばかりはどうも方がつきませんなそれも僕が女に生れていれば一寸青樓へ身を沈めて君の學資を助るといふ様な乙な事が出来るのだけれど……夫も此面ではむづかしい

試験癡止論貴察の通り泣き寐入りの體裁やつた所が到底成功の見込なしと觀破したね

ゑゝともう何か書く事はないかしら、あゝそう、昨日眼醫者へいつた所が、いつか君に話した可愛らしい女の子を見たね、——〔銀〕杏返しに竹なはを^{たけなは}かけて——天氣豫報なしの突然の邂逅だからひやつと驚いて思はず顔に紅葉を散らしたね丸で夕日に映する嵐山の大火の如し其代り君が羨ましがつた海氣屋で買った蝙蝠傘をとられた、夫故今日は炎天を冒してこれから行く

七月十八日

凸 凹

物草次郎殿

明治二十四年七月二十四日 又便 牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

〔はがき〕

御返事 咒文

燬盡朱顏爛痘痕失來輕傘却開昏癡漢悟道非難事吾是宛然不動尊（大兄の咒文を三誦して悟りたる境界に御座候）

岐岨道中の詩拜見佳句も澤山ある様なり次韻したけれどそう急には出來ず昨日故人五百題と云ふ者を見て急に俳諧が作りたくなり十二三首を得たり御笑ひ草に供したけれど端書故いづれ後便にて御斧正相願度

候

明治二十四年八月三日 又便 牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

一文餘の長文被下難有拜見小子俳道發心につき草々の御教訓情人の玉章よりも嬉しく熟讀仕候天稟庸愚のそれがし物になるやらならぬやら覺束なき儀には存候得共性來かゝる道は下手の横好とやらに候得ば向後驥尾に附して精々勉強可仕〔候〕間何卒御鞭撻被下度候

玉作數首謹んで拜見俳句はいづれも美事に御座候仰せの如く句調の具合先日中拜見仕候者と隻かに別機軸の御手際と感心仕候峽中雜詩第一五首中の翹楚と存候管々しき細評は佛頭の天糞とやらにつき御免蒙り候實は負けぬ氣に次韻でもして君の一粲を博せんと存居候處去月下旬一族中に不慮の不幸を生じ其が爲め彼是取紛れ只今にては硯に對する閑暇はあれど筆を執る忍耐力なく幼學詩韻をひねくり廻す騒ぎにも參り兼候間次韻の義も願下に致候

不幸と申し候は餘の儀にあらず小生嫂の死亡に御座候實は去る四月中より懷妊の氣味にて惡疽と申す病氣にかゝり兎角打ち勝れず漸次重症に陥り子は闇より闇へ母は浮世の夢廿五年を見殘して冥土へまかり越し申候天壽は天命死生は定業とは申しながら洵にく口惜しき事致候

わが一族を賞揚するは何となく大人氣なき儀には候得共彼程の人物は男にも中々得易からず況て婦人中には恐らく有之間じくと存居候そは夫に對する妻として完全無缺と申す義には無之候へ共社會の一分子たる人間としてはまことに敬服すべき婦人に候ひし先づ節操の毅然たるは申すに不及性情の公平正直なる胸懷の洒々落々として細事に頓着せざる杯生れながらにして悟道の老僧の如き見識を有したるかと怪まれ候

位鬚髻々たる生悟りのえせ居士はとても及ばぬ事小生自から慚愧仕候事幾回なるを知らずかゝる聖人も長生きは勝手に出来ぬ者と見えて遂に魂歸冥漠魄歸泉只住人間廿五年と申す場合に相成候さはれ平生佛けを念じ不申候へば極樂にまかり越す事も叶ふ間じく耶蘇の子弟にも無之候へば天堂に再生せん事も覺束なく一片の精魂もし宇宙に存するものならば二世と契りし夫の傍か平生親しみ暮せし義弟の影に髣髴たらんかと夢中に幻影を描きこゝかかしこかと浮世の羈絆^原につながらるゝ死靈を憐みうたゝ不便の涙にむせび候母を失ひ伯仲二兄を失ひし身のかゝる事には馴れ易き道理なるに一段毎に一層の悼惜を加へ候は小子感情の發達未だ其頂點に達せざる故にや心事御推察被下たく候

悼亡の句數首左に書き連ね申候俳門をくゞりし許りの今道心佳句のあり様は無之一片の衷情御酌取り御批判被下候はゞ幸甚

朝貌や咲た許りの命哉

細眉を落す間もなく此世をば

(未だ元服せざれば)

人生を廿五年に縮めけり

(死時廿五歳)

君逝きて浮世に花はなかりけり

(容姿秀麗)

假位牌焚く線香に黒む迄

こゝろけの飛ぶや木魚の聲の下

(三首通夜の句)

通夜僧の經の絶間やきりくす

(骨場のみき)

骸骨や是も美人のなれの果

何事ぞ手向し花に狂ふ蝶

(二首初七日)

ますら男に染模様あるかたみかな
 聖人の生れ代りか桐の花

(記念分)

(其人物)

今日よりは誰に見立ん秋の月

(心氣清澄)

先日御話しの句左に抄録す是亦御邸正奉願候

馬の背で船漕ぎ出すや春の旅

行燈にいろはかきけり獨旅

親を持つ子のしたくなき秋の旅

さみだれに持ちあつかふや蛇目傘

(蓮の花)

見るうちは吾も佛の心かな

螢狩われを小川に落しけり

藪陰に涼んで蚊にぞ喰はれける

世をすてゝ太古に似たり市の内

雀來て障子にうごく花の影

秋さびて霜に落けり柿一つ

吾戀は闇夜に似たる月夜かな

柿の葉や一つ一つに月の影

涼しさや晝寐の貌に青松葉

あつ苦し晝寐の夢に蟬の聲

とぶ螢柳の枝で一休み

朝貌に好かれそうなる竹垣根
秋風と共に生へしか初白髪

先づこんな物に御座候向來物になられませうか

鷗外の作ほめ候とて圖らずも大兄の怒りを惹き申譯も無之是も小子嗜好の劣等なる故と只管慚愧致居候元來同人の作は僅かに二短篇を見たる迄にて全體を窺ふ事かたく候得共當世の文人中には先づ一角ある者と存居候ひし試みに彼が作を評し候はん結構を泰西に得思想を其學問に得行文は漢文に胚胎して和俗を混淆したる者と存候右等の諸分子相聚つて小子の目には一種沈鬱奇雅の特色ある様に思はれ候尤も人の嗜好は行き掛りの教育にて(假令ひ文學中にて)種々なる者故己れは公平の批評と存候ても他人には極めて偏窳な議論に見ゆる者に候得ば小生自身は洋書に心醉致候心持ちはなくとも大兄より見れば左様に見ゆるも御尤もの事に御座候全體あの時君と僕の嗜好は是程違ふやと驚き候位然し退いて考ふれば是前にも云へる如く元來の嗜好は同じきも從來學問の行き掛りにてかゝる場合に立ち到り候事と存じ夫よりは可成博覽をつとめ偏僻に陥ざらん様に心掛居候其上日本人が自國の文學の價値を知らぬと申すも日本好きの君に面目なきのみならず日本が夫程好き者のあるを打ち棄て、わざ／＼洋書にうつゝをぬかし候事馬鹿々々敷限りに候のみならず我等が洋文學の隊長とならん事思ひも寄らぬ事と先頃中より己れと己れの貫目が分り候得ば以後は可成大兄の御勸めにまかせ邦文學研究可仕候さはれ成童の頃は天下の一人と自ら思ひ上り三身の己れを欺いて今迄知らずに打ち過ぎけるよと思へば自ら面目なき迄に愧入候性來多情の某何にでも手を出しながら何事もやり遂げぬ段無念とは存候得共是亦一つは時勢の然らしむる所と諦め居候御憫笑頃日來司馬江漢の春波樓筆記を讀み候が書中往々小生の云はんと欲する事を發揮し意見の暗合する事間間有之圖らず古人に友を得たる心にて愉快に御座候此は序ながら申上候

時下炎暑の砌り御道體精々御いとひ可被成候 拜具

八月三日

のほるさま

一八

平凸凹拜

明治二十四年九月十二日 才便 牛込區喜久井町一番地より埼玉縣大宮驛水川公園菫松樓高島方正岡常規氏へ

屁理窟を海容の上はちときびし過ぎる、なれど御採用にあづかりて千萬辱けなし試験の可否今日念の爲め小泉と談判に及び候ところ異論のあるべき筈なく御都合次第教師と相談の上御受験可被遊との趣に候向後一週間位の中に完結可致規則にやと問返したれば否左にあらず今少々は後れてもよろしく然し可成早き方こそ望ましけれといふ次第なれば下讀濟次第御歸京目前の障礙御取り被ひ可被成候小生杯は心の不平のみならず顔も一面に不平なれば君よりは申し分もある筈なるに大人しく今迄辛抱致し居候へば大兄も少しは苦しむ方朋友へ對しての義理なり試験の問題は悉く忘れたれば菊地より送つてもらふ筈然し問題外の處も目を通さなくつては困るぜ何しろ下讀濟次第御歸京可然候

餘は拜眉の上

十一日午後

平凸凹

もの草次郎どの

明治二十四年十一月七日 又便 牛込區喜久井町一番地より本郷區眞砂町常盤會寄宿舍正岡常規氏へ

思ひ掛なき君が思ひがけなくも明治豪傑譚に氣節論まで添へて御惠投あらんとは眞以て思ひがけなく驚入候何は儲ありがたく受納仕候御手紙は再三繰返し豪傑譚は興味に連れ一息に讀了仕候當時少しく風邪の氣味にて腦巔岑々の折柄はからずも半日消閑の工夫を得申候段拜謝仕候

豪傑譚は仰せの如く先頃中より讀賣紙上にて時たま閱覽仕居候頃より是が豪傑の行爲にやと不審を抱き候角も不少欣慕杯と申す感情は儲置中には眉を蹙めて卻走せんと欲する件りも有之昨日興味につれ讀了候は聊も感服敬服杯と申す念慮より生じたる事に無之編中人物の行爲矯激極端にして殆んど狂縦の痕跡あるかを疑ふ位故何となく好奇の念禁じがたく一部の天然滑稽戯を披覽する心地にて通過致し儲卷を掩ふて是等の人物が如何に小生の心緒を攪動せしやと諦觀仕候へば寸毫も高尚だの優美だのと申す方向に導びきし點無之中には索隱行怪の餘弊殆んど人をして嘔吐を催ふせしむる件りも有之やに見受られ候かく申せばとて編中の人間皆氣節なき「ゲータラ」のみと申す次第には無之中には仰の如き稜々たる風骨を具したる人も有之べく其代りには一點の意氣地なき輩も交り居るべくそも氣節と申すは己れに一個の見識を具へて造次顛沛の際にも是を應用し其一生を貫徹するの謂に候得ば其人の氣節の有無は其人の前後を通觀せず候ては全體上其人の行爲が其人の主義と並行するや否やは判じ難きかと存候今此編に記載する件りは單に豪傑の(流俗の豪傑)一言半行位にとまりて其人の氣節を斷定するの材料には爲し難きやと存候先づ書中の事件を大別すれば第一即座の頓智、第二其場の激情等多く之に屬せざるものは或は何人の生活中にも穿鑿したらば出てきさうなる失策話しか尋常一様の世間話にして偶其人が後日に盛名を博したる爲め役もな

き好奇漢の詮議立てより是も豪傑の行ひぞと人に云はるゝに至りたる件りも見受け候位是等は此失策話しが豪傑の傳を構造するにあらずして豪傑の盛名が溯つて此失策話しを著名にしたるに過ぎず猶分類せば他の族門をも設け得ん其中には欣慕と迄行かずと「も」感心な行ひと賞する位の事は曉星のごとくちらほらと見ゆる事もあらんなれど先づ右の三種と大別した處で即座の頓智と云ふ事は其人天稟の賦性にて能もあり不能もあり頓智あるが爲に氣節あり頓智なきが爲に氣節なしとは誰も許さぬ事なるべし否氣節を尊む人は場合に依れば出る頓智もわざわざ引き込す事あり是は其人の行爲を支配するものは一定の主義にして頓智とは即座の開放題其場逃れの便宜なれば苟も頓智にして己れの主義と相反するものは一定の主義にして頓智かゝる方便を用ゆる事あるべからずよしんば頓智が己れの氣節を貫くに必要なる場合ありとするもかゝる能を有せざる人は到底用ゆる事の出来ぬ話なり第二に一時の激昂にて感情的に爲したる事が氣節を表影すと云ふも受取りがたし氣節とは前にも云ふ如く(余の考へにては)一定斷乎の主義を抱懷して動かざるに外ならず己れに特有なる一個の標準を有しこの標準を何處にも應用せんとするの觀念に過ぎず一時の感情若し此標準と合せば卒然の行爲必ずしも氣節を發揮せずとは云ひ難けれど感情はいつも智識と並行して起るものにあらず、のみならず屢ば背馳して相戻る事あるは君の知る所なれば此點にても氣節の有無は知りながら第三種に屬する失策話し(逸話にせよ)は吾人の生活中日々眼前に横たはるものにて中にも小生杯は人一倍失策多ければ若し之を以て氣節の發したるものとせば僕杯は風骨稜々の冠を戴くを得べし鬼に角失策は豪傑に限りて多きにあらず又氣節あるが爲に大なるにあらず是は申す迄の事もなからんかく右の三者何れをとるも編中の人物に氣概ありや否やを判するの材料とは致し難くはなきやと愚考仕候今一步を譲つて此片言隻行の間に豪傑の氣宇躍然としてあらはるゝにもせよ編中の人は皆同鑄型中に鍛鍊せられたるにあらず甲の爲す處はこの爲す處と牴牾し丙の言ふ所は丁の言ふ所と隔違す或人は鹽を振りかけ

三十四
られたるさへ辛抱し或人は師の教訓に堪へずして長者を撃つ一方が氣節あらば一方は意氣地なきなり一方が風骨を有するならば一方は馬骨を有するなり君何が故に稜々の字を下して軒輊する所なきや君が意は其行爲の裏面に横たはる精神を見よとの事なるや精神を見るも二人の心行きは決して同じからず一は堪忍を大事となし一は任意直情を潔しとせるなり堪忍の方が氣節あらば任意の方氣節なきなり但し兩方共に氣節ありと云ふや職を高官に奉じて座睡禁ぜず是毫碌なり氣節にあらず格闘を挑まれて敢てせず之を酒樓に誘つて逃る是れ卑怯なり（昔しの武士道より見れば）氣節にあらず故に假令ひ氣節をして片言隻行の間にあらばるゝものとするも編中の事悉く氣節的の件りのみとは云ひ難からんと存候君若し以上の論議に不同意ならば再び方針を轉じて總概的に氣節の何物たるを説明致さんと存候御存じの如く人間の能力は智、情、意の三者に外ならず氣節は人間能力の一部なる以上は三者の中何「れ」にか屬せざるべからず第一氣節とは情に屬するやと云ふに決して然らず一時の怒りに激して人を痛罵す是氣節なりや余は氣節とは思はざるなり年來の怒りに激して日常人を痛罵す是氣節なりや是も亦氣節とは思はれずさらば一時の感情にもせよ年來の感情にもせよ感情を以て爲したる行爲は氣節と云ふ可からず氣節既に感情に屬せずんば之を意志の作用とせんか打つ可きの道理なく打ち度の感情なく妄りに鐵拳を擧て人に加ふ是れ氣節なりや同じく打つ可きの道理なく又打ち度の念慮なきに日常鐵拳を擧けて人に加ふ亦氣節にあらず去らば一時の意志にせよ年來の意志にせよ意志より來るもの氣節なりと云ふべからず意志に屬せず感情に屬せずんば氣節の屬する處は智の範圍内にあらずんばあらず親には孝を盡すべき理ありと心得て孝を盡す是氣節なり君に忠を致すべき道存すとて忠を致す是氣節なり人を罵るべきの理あり故に罵る人を打つべきの理あり故に打つ是氣節なり然れど一時の理を行ふ是れ一時の氣節を表はすのみ一小見識を抱いて之を行ふ是れ一小見識の氣節のみ一時の氣節一小見識の氣節有もよし無くとも差支へなし吾人の欲する所は絶大見識を抱懐して人生

の前後を貫き通するにあり書物にても一頁には一頁の主意あり文字あり一篇には一篇の主意あり文字あり一卷には一卷を貫くの主意あり文字なかる可らず一頁の主意一篇の文字は一時の氣節一小見識の氣節のみ人生五十年の浩峽人生天大の主意決して一章一篇の中に存せざるなり故に僕謂ふ氣節は情に屬せず意に屬せずして智に屬す而して大氣節は人生を掩ふ大見識に屬すと君若し氣節は情若くは意に屬すと云はゞ僕一言なし唯見解の異なるを悲しむのみ君若し氣節は小見識を一時に行ふにありといはゞ僕又一言なし愈見解を異にするを悲しむなり

小生元來大兄を以て吾が朋友中一見識を有し自己の定見に由つて人生の航路に舵をとるものと信じ居候其信じきりたる朋友がかゝる小供だましの小冊子を以て氣節の正本にせよとてわざ／＼惠授せられたるはつや／＼其意を得ず小生不肖と雖亦人生に就て一個の定見なきにあらず此年頃日頃詩を誦し書を読むも讀むに従ひ誦するに従つて此定見の自然と發達して長大になるが爲めのみ徒らに彫琢の末技に拘して一字一句の是非を論ずるは愉快なきにあらず然れども遂に小生が心を満足せしむるに足らざるなり去れど小生とて我が見識こそ絶大なれ最高なれと云ふにあらず若し吾が主義の卑野ならんか大兄の高説を拜聽して其愚を癒するも可なり前賢の遺書に因て之を啓發するも可なり何を苦んで此叢藪たる一俗冊を用いん君此書を讀んで自ら思へらく日本男子の區域外に放逐せられて饜餮飽くなきの蠻夷と伍するに至らざるを喜ぶべかりと然れども君の目して蠻夷となすもの饜餮飽くなきの輩となすもの實に余に誨ゆるに人生の大思想を以てせり僕をして若し一點の節操あらしめば其節操の一半は缺舌の書中より脱化し來つて余が腦中にあり此腦中にあるの秤量を以て此書の貫目をはかるに其輕き事秋毫の如し君何を以て此書を余に推舉するや余殆んど君の余を愚弄するを怪しむなり君の手翰を通觀するに字義共に眞面目にして通例滑稽的の文字にあらず且つ結末に（僕が之を贈るの微意を察せよ）とあり小子翻讀再三に及んで猶其微意の在る所を知るに

苦しむ不敏の罪逃るゝに由なきは是非なし但し小子は賢愚無差別高下平等の主義を奉持するものにあらず己より賢なるものを賢とし己より高きものを高しとするに於ては敢て人に遜らずと雖此編中の人吾より賢なる人吾より高き人吾の取て以て崇拜せんと欲するもの果して幾人かある由しや之れありとするも君の余に勧めんと欲するものは抽象的の氣節にして實體的の片言隻行にあらず余も三尺の童子にあらずれば此片言隻行を誦して氣節こゝにありと歎賞する能はず故に聊か疑を書して机下に呈す

君の書に曰く試みに學校の兒童を見よ工商の子多くは上座にあり士家の子多くは末席にあり然れども其學校を出づるや工商の子弟は終に士家の子弟に「一籌を」輸するを常とすと是は君一家の經驗にて云ふなるか統計杯にて云ふや（僕嘗て曰ふ）とあれば貴君一家の説なるべし然し小生の居りし學校にては工商の子弟より士家の子弟常に上席を占めたりかく事實相反する以上は議論の土臺と爲り難し且つ學校を出で、工商の子「弟」が士家の子弟に一籌を輸すとは學問の點なりや世渡りの巧拙なりやはた君の所謂氣節の點なりや學問の點より云へば工商は工商の業あり專意學問に従事する事能はず士家の子弟は學を以て身を立つるもの多ければ工商の及ばざるは勿論の話なり世渡りの巧拙に至つては容易に斷言しがたし工商は世に應じて甘く切りぬけ行くもの澤山ならん士人の子弟にても御鬚の塵を拂ひおべつか專一にて世に時めく者幾千萬なるを知らず又氣節の點に至つても工商の子無下に意氣地なしと思ひ給ふ可からず身分くゞに應じて相應の意地はあるものなり但し無學なる工商に望むに絶大の見識を以てするは赤子をして郵便配達夫たらしめんとするが如し云はずとも分り切た話なり之に反して士人の子と雖もあながち氣節ある人多しとは云ふ可らず方今紳士とも云はるゝ輩青萍とも浮草とも評すべき行爲あるもの枚擧すべからず其身元を尋ねたらば大方は士族なるべし兎に角氣節の有無は教育次第にて工商の子なりとて相應の教育を爲し一個の見識を養生せしめば敢て士家の子弟に劣らんとも覺えず暫らく氣節は士人の子の手に落ち工商の夢視

せざる處とするも是は工商たるが爲に氣節なきにあらずして氣節を涵養するの時機に會せざりしのみ試みに士家の子弟をとりて幼少より丁稚たらしめば數年を出ずして銅臭の兒とならん君の議論は工商の子たるが故に氣節なしとて四民の階級を以て人間の尊卑を分たんかの如くに聞ゆ君何が故「に」かゝる貴族的の言語を吐くや君若しかく云はゞ吾之に抗して工商の肩を持たんと欲す

君又曰く僕は賢愚の差に於て人を輕重する事少し然れども善惡の違に至つては一步もこれを假さず小惡あれば即ち極口之を罵詈し小善あれば則ち極口之を褒美す……僕之を以て得意となす他人の毀譽敢て關せざるなりと君既に他人の毀譽に關せず其主義を貫かんとす故に僕敢て君を褒貶せず然れども善惡の差を重んずる事君の云ふ所の如くならば願くは僕が言の善か惡かを聞け君が腦中には至善なる理想あり此理想を標準として他を褒貶せらるゝならん然るに世界の人間中君が理想を以て嚴正なる判定を下し是人こそ至善なれと君が道德試験に滿點を得て及第する者ありや余は斷じてかゝる人間なしと云はん人は完全なる者にあらず頭の頂點より足の爪足^爪まで圓滿の徳を具へたる聖人は實際世間に存するものにあらず人間の思想は實より空に入り卑より高きに推移す實を離れたる善世間より高き善是れ君が腦中の理想なり此理想の尺度を以て此善惡混合の人間をはかる決して合格者あるべからず若し合格者なきときは君朋友中に於て又知人中に於て遂に一人も君の意に合する者を見出す能はざらんとす見出す能はざれども之を我慢すれば差支へなし然し君の如く善惡の差に於ては一步も假さずと云ふ以上は君遂に滿天下を見渡して一の交る可き者なく言語を交はす者なきを見ん若し又善は善でとり惡は惡としてすつると云ふ意ならば君既に善を褒すると同時に惡を寛假したるなり由しや惡を寛假せずとするも若し一人に接して毫末の惡を見出し彼れ談するに足らずとて之を嫉視せば彼人假令ひ他に蓋世の善あるも君遂に其善を知る能はずして已まん又彼れ涓滴の善ありとて之に交はるとも其人滔天の惡ある以上は之を奈何すべき必竟人間界にては善は善惡は惡と範

園を分ち善の區域にあるものは生涯悪を見ず惡の領分に居るものは終身善を知らずと云ふ様な勝手な事は行はるゝものにあらず何人にも取るべき所あり又貶すべき所あり君既に寸善を容るゝの量あらば又分惡を包むの度なかるべからず乍失禮君の一身でさへ前後を通看したなら機微の際忽然として惡念の心頭に浮びし事あるべし(假令ひ之を行はぬにもせよ)何となれば人間は善惡二種の原素を持つて此世界に飛び出したるものなればなり若し人性は善なりと云はゞ惡と云ふ事を知るべきの道理なし惡と云ふ事を行ふ善なし善惡二性共に天賦なりとせば善を褒すると同時に不善をも憐まざるべからず今君毗睚の不善を假さずして終身之を忘れずんば僕實に君が慈憐の心に乏しきを嘆ぜずんばあらず僕思ふに君實にかゝる主義を應用するにあらず論じて筆端に上る「に」至つて遂に此過激の文字となりしならん先年僕が厭世の手紙の返事に天下不瓢不細の了見で居るべしと云ひ給へり其了見で居る君が斯る狹隘なる意見を述べて(得意となす)杯云ふに至つては實に前後の隔絶せるに驚かずんばあらず先に云ふ處のものは單に壯言大語僕を驚かせしなれば僕向後決して君を信すまじ又冗談ならば眞面目の手紙の返事にかゝる冗談は癢して貰はんと存す又先年の主義を變じ今日の主義となしたりと云はゞ夫でよし人間の主義終始變化する事なければ發達するの期なし變じたるは賀すべし然し變じ方の惡きは驚かざるを得ず高より下に上り大人より小兒に生長したる様な心地するなり僕決して君を誹謗するにあらず唯君が善惡の標準を以て僕が言の善か惡かを量れ實は黙々貰ひ放しにしておかんと存じたれどかくては朋友切磋の道にあらず君が眞面目に出掛たものを冷眼に看過しては濟まぬ事と再考の上好んで忌諱に觸る狂妄多罪

十一月七日

常規殿

金之助拜

明治三十四年十一月十一日 口便 牛込區喜久井町一番地より本郷區眞砂町常盤會客宿舎正岡常規氏へ

僕が二錢郵券四枚張の長談議を聞き流しにする大兄にあらずと存居候處案の如く二枚張の御返禮にあづかり金高より云へば半口たらぬ心地すれど芳墨の眞價は百枚の黄白にも優り嬉しく披見仕候仰の如く小生十七八以後かゝるまじめ腐つたる長々しき囁語を書き連ねて紙筆に災ひせし事なく議論文杯は君に差上候手紙にも減多に無之唯君の方で足下呼はりで六づかしく出掛られた故つい乘氣になり色々の雜言申上恐縮の至に不堪決して御氣にかけられざる様願上候

頑固の如くには候へども片言隻行にては如何にしても氣節は見分けがたくと存候良雄喜劍の足を舐る良雄の主義人の辱を受けざるにあれば足を舐るは氣節を損したるなり良雄の主義復讎にあれば足を舐るは氣節を全ふしたるなり喜劍良雄の墓前に死す喜劍の主義長生にあらば墓前に死するは節を損したるなり喜劍の主義任侠にあれば墓前に死するは節を全ふしたるなり去れば一言一行を其人の主義に照り合せざれば分らぬ事と存候(其人の主義の知れておる時は例外)

氣節は(己れの見識を貫き通す)事と申し上候積り此(見識)は智に屬し(貫く)(即ち行ふ)は意に屬す行はずして氣節の士とは小生も思ひ申さず唯行へと命令する者が情にもあらず意にもあらず智なりと申す主意に御座候處筆が立ぬ故其所迄まはり兼疎漏の段御免被下度候

僕決して君を小兒視せず小兒視せば笑つて黙々たるべし八錢の散財をした處が君を大人視したる證據なり恨まれては僕も君を恨みます

君は人の毀譽を顧みず毀譽を顧みぬ君に喃々するは君を褒貶するの意にあらず唯僕の説が道德上嘉すべ

き説なりや道德上悪しき説なるやを判じ給へとの意に御座候唯卑説の論理に傾きたる爲め善惡の字を以つて正否の字に見違へらる是亦僕の誤り(説に善惡あり又眞偽あり多妻論は耶蘇教徒より見れば論理的なると否とを問はず惡説なり進化主義も神造物者主義より見れば惡説なり社會主義は高天原連より見れば惡説なり)

四〇

「其惡を極口罵詈せしとて其人と交らぬと云ふにはあらず」御説明にて恐れ入候叩頭謝罪

僕前年も厭世主義今年もまだ厭世主義なり嘗て思ふ様世に立つには世を容るゝの量あるか世に容れられるの才なかるべからず御存の如く僕は世を容るゝの量なく世に容れらるゝの才にも乏しけれどどうかか食ふ位の才はあるなりどうかか食ふの才を頼んで此浮世にあるは説明すべからざる一道の愛氣隠々として或人と我とを結び付るが爲なり此或人の數に定限なく又此愛氣に定限なく雙方共に増加するの見込あり此増加につれて漸々慈憐主義に傾かんとす然し大體より差引勘定を立つれば矢張り厭世主義なり唯極端ならざるのみ之を撞着と評されては仕方なく候

最後の一段は少々激し過ぎたる由貴意の如くかも知れず(僕の愚を憐んで可なり)杯と出られては眞に慚愧不禁再び叩頭謝罪

道德は感情なりとは御同意に候絶大の見識も其根本を煎じ詰れば感情に外ならず形而下の記號にて證明し難ければなり去れど此理想の標準に照し合せて見る過程が智の作用と存候

君の道德論に就て別に異議を唱ふる能はず唯貴説の如く惡を嫉むの一點にて君と僕の間になん少しく程度の異なる所あるのみどう考へても君の惡を嫉む事は餘り酷過ぎると存候
微意の講釋は他日拜聽仕るべく候
君の言を借りて

(偏へに前書及び本書の無禮なるを謝す 不宣)

又々行脚の由不相變御精興賀し奉候

秋ちらほら野菊にのこる枯野かなの一句千金の價あり

畢丸の句は好まず、笠の句もさのみ面白からず

十一月十日夜

平凸凹亂筆

子規

臥禪傍

二二

明治二十五年六月十九日 小便 牛込區喜久井町一番地より下谷區上根岸町八十八番地正岡常規氏へ (はがき)

十九日早朝

凸凹昨君の青白の容を拜むに何ぞ累々として喪家の犬に似たるや就ては九時頃ブツセの試験問題到着皆哲學の試験を濟せ了んぬ處が君の平生點があれだから困る譯だけれど昨日の様な條件のある試験だから後から受る事も出来るだらう故都合次第左様談判可相成候先は用事まで早々頓首

三三

明治二十五年七月十九日 小便 岡山市内山下町百三十八番邸片岡方より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

貴地十七日發の書狀正に落手拜誦仕候先は炎暑の候御清適奉賀候小子來岡以來愈壯健日々見物と飲食と

四一

晝寐とに忙がはしく取紛れ打ち暮し居候去る十六日當地より金田と申す田舎へ参り二泊の上今朝歸岡仕候
閑谷賢へは未だ参らず後樂園天守閣等は諸所見物仕候當家は旭川に臨み前に三權山を控へ東南に京橋を望
み夜に入れば河原の掛茶屋無數の紅燈を點じ納涼の小舟三々五々橋下を往來し燭光清流に徹して宛然たる
小不夜城なり君と同遊せざりしは返すも残念なり今一度閑谷見物かたゞ御來岡ありては如何一向平
氣にて遠慮なき家なり試験の成績面黒き結果と相成候由鳥に化して跡を晦ますには好都合なれども文學士
の稱號を頂戴するには不都合千萬なり君の事だから今二年辛抱し玉へと云はゞなに鳥になるのが勝手だと
云ふかも知れぬが先づ小子の考へにてはつまらなくても何でも卒業するが上分別と存候願くば今一思案あ
らまほしう

鳴くならば満月になけほとゝぎす

餘は後便にゆづる亂筆御免

十九日午後

平凸凹より

瀬祭詞兄

尊下

二三

明治二十五年八月四日 八便 岡山市内山下町百三十八番邸片岡方より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

朶雲拜誦仕候御申越の如く當地の水害は前代未聞の由にて此前代未聞の洪水を東京より見物に來たと思
へば大に愉快なる事ながら退いて勘考すれば居席を安んぜず食飽に至らず隨分酸鼻の極に御座候御地は別

段の水害もなき模様先々結構の至に存候津山は餘程の損害と承る是空子の處は如何

小生去る二十三日以後の景况御報申し上んと存居候へども鳥に化して跡をかくすとありし故旅行中にも
やと案じ別段書状もさし上げず居候先便にも申し上候通り當家は旭水に臨む場所にて水害中々烈しく床上
五尺程に及び二十三日夜は近傍へ立退終夜眠らずに明し二十五日より當地の金満家にて光藤と云ふ人の離
れ座敷に迎へ取られ候處同家にて老祖母大患にて厄介に相成も氣の毒故八日目に歸宅仕候歸寓して觀れ
ば床は落ちて居る疊は濡れて居る壁は振い落してあるいやはや目も當てられぬ次第四斗樽の上へ三疊の疊
を並べ之を客間兼寐處となし戸棚の浮き出したるを次の間の中央に据へ其前後左右に腰掛と破れ机を緋べ
是を食堂となす屋中を歩行する事峽中を行くが如し一步を誤れば椽の下に落ついやはや丸で古寺か妖怪屋
敷と云ふも猶形容し難かり夫でも五日が一週間となるに従ひ此野蠻の境遇になれて左のみ苦とも思はず可
笑しき者なり實は一時避難の爲め君の所へでも罷り出んと存居候ひしが旅行中で留守にでも遇つたら困る
と思ひ今迄差し控へ居候斯る場合に當方に厄介に相成候も氣の毒故先日より歸京せんと致候處今少し落付
く迄是非逗留の上緩々歸宅せよと強て抑留せられ候へども此方にては先方へ氣の毒先方では此方へ氣の毒
氣の毒と氣の毒のはち合せ發矢面目玉をつぶすと云ふ譯御憫笑可被下候

夫故閑谷賢へも猶参らず然し近日當主人の案内にて金比羅へ参る都合故其節一寸都合よくば御立寄可申
歸京は九月上旬と御約束申上置候へども右の次第故少々繰り上本月中旬か又は下旬頃には致し度と存候大兄
の御見込は如何に御座候や若し御不都合無之ば御同伴仕り度と存候來る六七日頃太田達人より爲替送付致
し吳候筈故夫より後なら何時でも歸京差支へなし

實に今回の水は驚いた様な面白い様な怖い様な苦しい様な種々な原素を含み岡山の大洪水又平凸凹一
生の大波瀾と云ふべし然し餘波が長くて今に乞食同様の生活を爲すは少し閉口石關の堤防をせき留めるや

否や小生肛門の土堤が破れて黄水汎濫には恐れ入る其に床下は一面の泥で其上に寐る事故餘程身體には害があるならんと愚考仕る許りで目下の處では當分此境界を免がるゝ事能はざらんとあきらめ居候
猶委細は御面會の節 頓首頓首

八月四日

平凸凹

子規さま

尊下

二四

明治二十五年十一月二十日

ル便 牛込區喜久井町一番地より下谷區上根岸町八十八番地正岡常規氏へ

〔はがき〕

御一家御無事御着京之趣大慶奉存候早速參上可仕のところ御(惘然)の際御邪魔と存じ差控へ居候御老母さま並びに御令妹へよろしく御鳳聲被下度候何れ其内拜趨萬々

二五

明治二十五年十二月十五日

イ便 牛込區喜久井町一番地より下谷區上根岸町八十八番地正岡常規氏へ

貴書拜見目下愈寒氣に差し向ひ候ところ筆硯ますく御清榮奉賀候小生不相變毎日々々通學仕居候間乍憚御休神被下度候儲運動一件御書狀にて始めて承知仕り少しく驚き申候然し學校よりは未だ何等の沙汰も無之辭職勸告書杯も未だ到着不仕御報に接する迄は頓とそんな處に御氣がつかれず平氣の平左に御座候過日學校使用のランプの蓋に「文集はサツバリ分らず」と書たるものあれど是は例の悪口かゝる事を氣にし

ては一日も教師は務まらぬ譯と打捨をき候其後講義の切れ目にて時間の鳴らぬ前無斷に室外に飛び出候生徒ありし故次の時間に大に譴責致候是は前の金曜の事其外別段異狀も無之今日迄打過居候元來小生受持時間は二時間のところ生徒の望みにて三時間と致し且つ先日前學年受持の生徒來り同級へも出席致し吳ずやと頼み候位故左程評判の悪しき方ではないと自惚仕居候處豈計らんやの譯で大兄の御手紙にて運動一件小生の耳朶に觸れ申候勿論小生は教方下手の方なる上過半の生徒は力に餘る書物を捏ね返す次第なれば不足の生徒は澤山あらんと其邊は疾くより承知なれど是は一方より見ればあながち小生の咎にもあらず學校の制度なれば是非なしと勘辨仕居候去るにても小生の爲めに此間運動杯致す程とは實に思ひも寄らずと存居候段隨分御目出度かりし無論生徒が生徒なれば辭職勸告を受てもあながち小生の名譽に關するとは思はねど學校の委託を受けながら生徒を満足せしめ能はずと有ては責任の上又良心の上より云ふも心よからずと存候間此際斷然と出講を斷はる決心に御座候

(巨燧から追ひ出れたる)は御免蒙りたし

病む人の巨燧離れて雪見かな

十二月十四日夜 〔封筒の裏に〕

金之助

子規さま

御報知の段ありがたく奉謝候坪内へは郵便にて委細申し遣はすべく候其文言中には證人として君の名を借る親友の一言なれば固より確實と見認むると云へば突然辭職しても輕卒の誹りを免が〔る〕る譯なればなり願くば證人として名前丈をかし給へ但し出處は命ぜず召還の氣使ひも無用なり

四五

明治二十六年一月六日 へ便 牛込區喜久井町一番地より下谷區上根岸町八十八番地正岡常規氏へ

先夜は失敬仕候竹村鍊郷赴任地宿所御承知に御座候はば一寸御一報被下度候也

一月六日

明治二十六年二月二十日 牛込區喜久井町一番地より下谷區上根岸町八十八番地正岡常規氏へ

二月二十日

過日文學談話會へ出席仕候處大兄御病氣の趣にて御來駕無之右は御風邪にても有之候や又は例の御持病にや心元なく存候間御容體一寸相伺ひ申上候隨分御養生專一と奉存候

明治二十六年八月七日 東京帝國大學寄宿舎より西谷虎二氏へ

一別以後如何御暮し被遊候や時下酷暑のみぎりには候へども筆硯益御清穆の事と奉欣羨候迂生事も不相關無異消光日々晝寐と食事に餘念なく勉強致居候へば乍憚御休神可被下候九洲地方の御旅行は最早相濟候や定めて優遊御逸興の儀と紅塵中より推察仕候去月中旬菊池米山兩人と兩三日間日光地方へ罷り越し少しは塵懷の洗濯仕り候心得の處當今は其反動にて何分にも炎暑に耐へがたく日々呻吟仕居候段吾ながら憫笑の至貧生の境界あはれ斯の次第御察し可被下候寄宿舎も當時は大不景氣にて惣勢十三四人に過ぎず至つて

寂寥を覺え候當夏卒業の文學士賣口大に悪しく皆困却の體氣の毒に存候小生杯も如何成る事やら頼と不相分今日を今日とのみ未來の考へなく打暮し居候此分にては九月に御馳走の約束もあり當にならず當にせずと御待ち可被下候先は右暑中御伺がひまで餘は拜眉の節萬々可申述候時節がらくれくも御道體御心づけ可被遊候 匆々頓首

八月七日

金之助

虎 二 様

梧 前

拜借の椅子少々破損仕候故〔卷紙破れて二字不明〕は不相用丁寧保存致居候〔同前〕破損後なれば元の通りには〔同前〕相成甚だ失敬

明治二十七年三月九日 東京帝國大學寄宿舎より山口縣山口高等中學校菊池謙二郎氏へ

御手紙被下難有拜見仕候大兄御赴任後は大分の好景氣の模様何しろ結構の事と奉賀候小生病氣は目下差したる事も無之日々平常の通起臥罷在候へば乍憚御安慮被下度候實は去る二月初め風邪にかゝり候處其後の経過よろしからずいたく咽喉を痛め夫より細き絹糸の如き血少々痰に混じて咯出仕り候故從來の〇〇と〇〇と兩方へ轉んでも外れそうのなき小生故直ちに醫師の診察を受け候處只今の處にては心配する程の事はなく矢張り平生の如く勉學致してもよろしく只日々滋養物を食し身體の衛養を怠らぬ様にする事專一なりとて夫より檢痰を試み候處幸ひバチルレン杯は無之去れば肺病なりとするも極初期にて今の内に加攝生

すれば全治可致との事に御座候小生身體上の自覺も至極爽快にて目下は毫も平日と異なる所無之候へども可成滋養物を食し運動を力め「ノンキ」に消光致居候今暑中休暇には海水浴か温泉にて充分保養を加ふる積りに御座候尤も人間は此世に出づるよりして日々死出の用意を致す者なれば別に咯血して即席に死んだとて驚く事もなければ先づ二つとなき命故使へる丈使ふが徳用と心得醫師の忠告を容れ精々攝生致居候

何となう死に來た世の惜まるゝ

小生始め醫師より肺病と聞きたる時は兼て覺悟は致居候へば今更の様に驚愕は不仕又死と云ふ事に就ても小生は至極冷淡の觀念を有し候へば咯血杯に心經を痛むる事は無之りしも只家の後事杯を考へ過ぎて少は心配仕候然し一方にては一度び此病にかゝる以上は功名心も情慾も皆消え失せて恬淡寡慾の君子とならんかと少しは希望を抱き居候にも係らず身體は其後愈壯健に相成醫師も左程差當りての心配はなし杯申し聞け候に就ても性來の俗氣は依然不改舊觀實に自らもあきれ果候そこで君の漫興に次韻して蕪句一首

閑却花紅柳綠春

江樓何暇醉芳醇

猶憐病子多情意

獨倚禪牀夢美人

御一笑可被下候此頃は雨のふる日にも散歩致す位に御座候

春雨や柳の中を濡れて行く

大弓大流行にて小生も過日より加盟致候處的は矢の行く先と心得候へば何時でも仇矢は無之眞に名人と自ら誇り居候

大弓やひらりくくと梅の花

矢響の只聞ゆなり梅の中

先は御返しまで 匆々頓首

三月九日

金之助

菊池兄

机下

三〇

明治二十七年三月十二日 東京帝國大學寄宿舍より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

其後は御無音に打過候目下は新聞事業にて定めし御多忙の事と存候過日は小生病氣につき色々御配慮被下難有奉謝候其後病勢次第に輕快に相成目下は平生に異なるところなく至て健全に感じ居候へども服藥は矢張以前の通致し滋養物も可成食ひ居候固より死に出た浮世なれば命は別段惜しくもなければ先づ懸替のなき者なれば使へる丈使ふが徳用と存じ精々養生は仕る覺悟に御座候へば先づ御安心可被下候小生も始め醫者より肺病と承り候節は少しは閉口仕候へども其後以前よりは一層丈夫の様な心持が致し醫者も心配する事はなし杯申ものから俗慾再燃正に下界人の本性をあらはし候是丈が不都合に御座候へどもどうせ人間は慾のテンションで生て居る者と悟れば夫も左程苦にも相成不申先づ斯様に慾がある上は當分命に別條は有之間敷かと存候當時は弓の稽古に朝夕餘念なく候

弦音にほたりと落る椿かな

弦音になれて來て鳴く小鳥かな

弦音の只聞ゆなり梅の中

御一笑可被下候

銀婚式は生憎の天氣小生は只池の端を散歩せるのみにて市内の景況を知らず

春雨や柳の下を濡れて行く

先日來尋常中學英語教授法方案取調への爲め随分多忙に有之候處本日漸く結了大に閑暇に相成候

春雨や寐ながら横に梅を見る

閑情御一掬先は近況のみ 匆匆

十月十二日

金之助

子規子

梧下

三一

明治二十七年五月三十一日 東京帝國大學寄宿舎より山口縣山口町伊勢小路吉富氏方菊池謙二郎氏へ

二十四番の花も無常迅速の喩に漏れず最早綠陰時節と相成候處益御清適奉賀候生義不相變寄宿に起臥仕居候病氣も何處へやら行方知れず相成候へども猶醫師の診察を受け豫防の爲め服藥も仕居候大目下如何御消光被遊候や些と近況御報知可被下候小生は其後毎日弓術を強勉致居候へども天性の不氣用中々上達の見込無之去りながらこゝが辛防處と入らざる處に負惜みを出し朝夕兩度に百本位は毎日稽古致居候中らなくとも少しは面白く散歩杯は全く癡止仕候小屋坂牧吉田長谷川齋藤西谷等皆々執心に候昨今は諸氏とも大

分上達弓術部は殆んど文科の專有と相成候位其代り特別に上手も無之只數でこなす積りに御座候過日より賄の後に柔道劍道の道場を開き有志の面々頻りに勉強致居候小生も少し擊劍でも始め度と存候へども餘り運動の過劇なると手頃の相手のなきに閉口致し差控へ居候斯様に運動は随分出精致候へども肝心の研究の方は一向はかどり不申此學年はままと遊んで通り抜け候是も病氣の爲と自ら良心に對し辯護致居候兎角理窟は何とでもつけらるゝ者に御座候狩野氏も過日より出京兩三度面會仕候随分多忙の様に見受け申候昨年御存じの如く夏中寄宿に整居致居候故今年は休暇に相成次第何れにか高飛を仕る積りに御座候大兄暑中休暇中の御計畫は如何に御座候や多分御出京の上御歸省の事と存候折よくば其時拜顔を得度先は近況御伺ひ迄 早々頓首

五月三十一日

金之助

菊池賢契

座下

三二

明治二十七年九月四日 ト便 東京帝國大學寄宿舎より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

拜啓昨夜又々持て餘したる酒囊飯袋を荷ひてのそゝと歸京仕候小生の旅行を評して健羨々々と仰せらるゝ段情なき事に御座候元來小生の漂泊は此三四年來沸騰せる腦漿を冷却して尺寸の勉強心を振興せん爲のみに御座候去すれば風流韻事杯は愚か只落付かぬ尻に帆を擧げて歩ける丈歩く外他の能事無之願くば到る處に不平の塊まりを分配して成し崩しに心の穩かならざるを慰め度と存候へども何分其甲斐なく理性と

感情の戰爭益劇しく恰も虚空につるし上げられたる人間の如くにて天上に登るか奈落に沈むか運命の定まるまでは安身立命到底無覺束候俊鶻一搏起てば將に蒼穹を摩すべし只此頸頭の鐵鎖を斷するの斧なきを如何せん杯と愚癡をこほし居候も必竟慕向に直前するの勇氣なくなり候爲と深く慚愧に不堪去月松島に遊んで瑞巖寺に詣でし時南天棒の一棒を喫して年來の累を一掃せんと存候へども生來の凡骨到底見性の器にあらずと其丈は斷念致し候故踵を回らして故郷に歸るや否や再び半肩の行李を理して南相の海角に到り日夜鹹水に浸り妄りに手足を動かして落付かぬ心を制せんと企て居候折柄八朔二十日の荒日と相成一面の青海原凄まじき光景を呈出致候是屈究と心の平かならぬ時は隨分亂暴を致す者にて直ちに狂瀾の中に没して瞬時快哉を呼ぶ折宿屋の主人岸上より危ない〜と叫び候故不入驚人浪難得稱意魚と吟出したれど主人禪機なき奴と相見「え」問答も其丈にて方がつき申候右の有様故別段面白き事もなく只錢を使つた處が大兄よりは幅が利く丈にて其他の「コンデション」は大兄の方遙かによくと斷定仕候間御自身も左様御承知可被下候俗界に在て勉強が出来ぬ由御嘆息御尤もには御座候へども學問の府たる大學院に在つて勉強すべき時間はあるながら勉強の出来ぬは實心苦しき限に御座候此三四年來勉強といふほど勉強をした事なく常に良心に譴責せらるゝ小生の心事は傍で見える程氣樂な者には無之候然し申譯の爲暇さへあれば終日机に向ふ處幾分か殊勝に御座候此度も讀もせぬ書籍を山ほど携帶致候段我ながら其意を了解するに苦しみ候只「シエレー」の詩集一卷は常にと「は」云はざれど時々あまり不快の時は繰り返し〜或部分を熟讀致し大に愉快を覺え候必竟小生此不平を散ぜん爲めではなけれど此不平の頂點に達せる折忽ち腦中の靈火炎上して一路通天の路を開き或る「プリシブル」を直覺的に感得したる如き心地致し大に胸中落付候其砌「シエレー」の詩を讀み候に其句々甚だ小生の考へと合し天外亦此同情の人あるかと大に愉快に存候故に御座候

小生近日中下宿致すやも計りがたく候其折は又御報知可申上候
先は右近況迄 早々不一
九月四日

金之助

正岡賢契
座下

三三

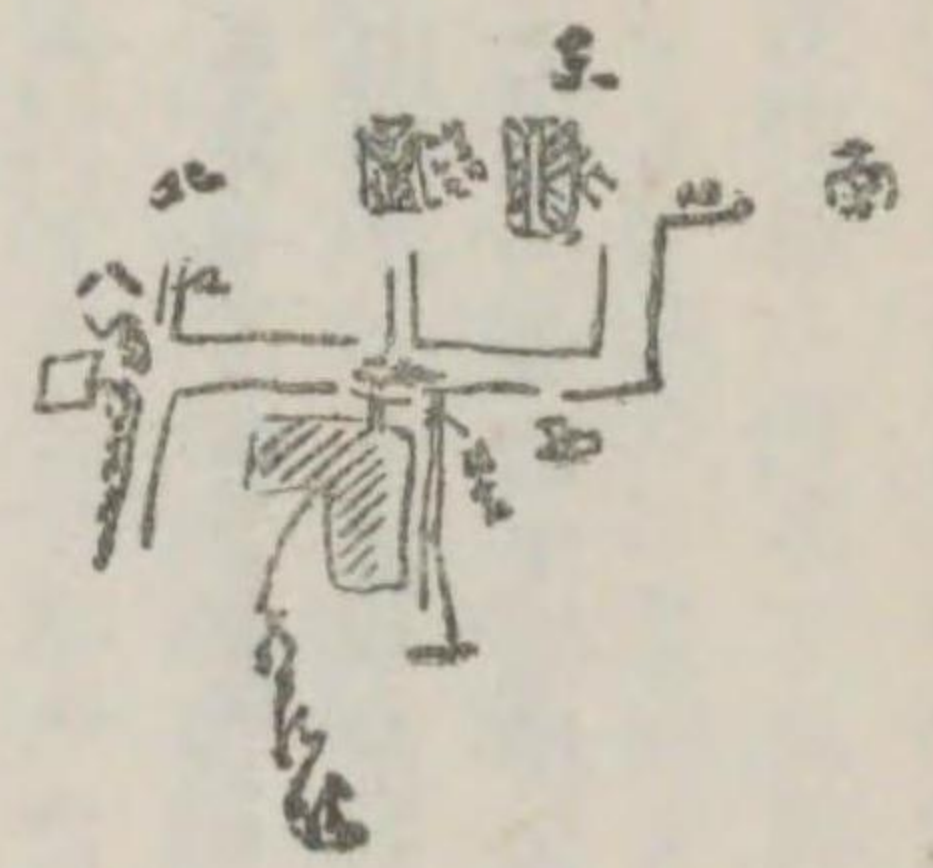
明治二十七年十月十六日 ト便 小石川區表町七十三番地法藏院より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ〔はがき〕

塵界茫茫毀譽の耳朶を撲に堪ず此に環堵の室を賃して襦袢を葬り了んぬ猶尼僧の隣房に語るあり少々興
覺申候御閑の節是非御來遊を乞ふ

三四

明治二十七年十一月一日 ニ便 小石川區表町七十三番地法藏院より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

小生の住所は先 殿通院の山門につき當り左りに折れて又つき當り今度は右に折れて半町程先の左側の
長屋門のある御寺に御座候浄土宗の寺にて住持は易斷人相見杯に有名な人豊田立本といふ 圖にて示せば



大略右の如し午後は大抵閑居す必用なければ何處へも出ず隣房に尼數人あり少しも殊勝ならず女は何時までもうるさき動物なり

尼寺に有髮の僧を尋ね來よ
三十一日

夏目金之助

正岡賢契
座右

三五

明治二十八年一月十日 卜便 小石川區表町七十二番地法藏院より本郷區駒込千駄木町五十七番地齋藤阿具氏へ
新年の御慶目出度申納候今度は〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇謹んで御祝ひ申上候小子去冬より鎌倉の楞伽窟に

參禪の爲め歸源院と申す處に止宿致し旬日の間折脚踏裏の粥にて飯袋を養ひ漸く一昨山下の上歸京仕候
五百生の野狐禪遂に本來の面目を撥出し來らず御憫笑可被下候先は右御祝ひまで餘は拜眉の上萬々
一月九日
夏目金之助拜

齋藤學兄

三六

明治二十八年三月十八日 小石川區表町七十三番地法藏院より山口縣山口町伊勢小路吉富氏方菊池謙二郎氏へ
拜呈仕候其後は打絶御無音奉謝候過日御招聘の件早速御返事可仕筈の處彼是不得其意荏苒今日に至り候
段甚だ不調法御容赦可被下候借小生儀今般愛媛縣尋常中學へ赴任の事と粗決定致し十中八九迄は相談も可
纏と存候間貴校の方は乍失禮御断り申上候右につき愈出發と定まり候上は彼是買調へ候品物も有之候處御
存じの文なしにては如何とも致方なく因て甚だ御迷惑ながら貴方にて金五十圓程御融通被下間鋪候や尤も
貴兄も随分貧の字なるべければ(是は失敬)御手本^原になきは承知なれどその所を友達好みと思ひ何
とか御算段相願はれ間じくや尤も返濟の義は赴任後兩三月中に屹度皆濟可致若し又赴任不致事と決定仕り
候へばすぐに其儘御返却可致候右否や乍憚電報にて御報被下度(若し出來なければ外に奔走せねばならぬ
故)先は用事のみ 早々頓首
三月十八日

菊池契兄

金之助

明治二十八年五月二十八日 イ便 松山市一番町愛松亭より神戸市神戸縣立病院内正岡常規氏へ

拜呈首尾よく大連灣より御歸國は奉賀候へども神戸縣立病院はちと寒心致候長途の遠征舊患を喚起致候譯にや心元なく存候小生當地着以來昏々俗流に打混じアツケラ閑として消光身體は別に變動も無之候教員生徒間の折悪もよろしく好都合に御座候東都の一瓢生を捉へて大先生の如く取扱ふ事返すべく恐縮の至に御座候八時出の二時退出にて事務は大概御免蒙り居候へども少々煩鎖なるには閉口致候僻地師友なし面白き書あらば東京より御送を乞ふ結婚、放蕩、讀書三の者其一を擇むにあらざれば大抵の人は田舎に辛防は出来ぬ事と存候當地の人間随分小理窟を云ふ處のよし宿屋下宿皆ノロマの癖に不親切なるが如し大兄の生國を悪く云ては濟まず失敬々々

道後へは當地に來てより三回入湯に來り候小生宿所は裁判所の裏の山の半腹にて眺望絶佳の別天地恨らくは猶俗物の厄介を受け居る事を當地にては先生然とせねばならぬ故衣服住居も八十圓の月俸に相當せねばならず小生如き丸裸には當分大閉口なり

貴君御親戚大原君より中學校員太田先生を以て不都合の事あらば何角世話をしてやらんと申し込まれたり所が小生例の放任主義で未だ參堂面謁の場合にも至らず御序の節はよろしく御傳聲被下度候

古白氏自殺のよし當地に風聞を聞き驚入候隨分事情のある事と存候へども惜しき極に候
當地着後直ちに貴君へ書面差上候處最早清國御出發の後にて詮方なく御保養の途次一寸御歸國は出來惡く候や

小子近頃俳門に入らんと存候御閑暇の節は御高示を仰ぎ度候
近作數首拙劣ながら御目に懸候

快刀切斷兩頭蛇 不顧人間笑語譁

黃土千秋埋得失 蒼天萬古照賢邪

微風易碎水中月 片雨難留枝上花

大醉醒來寒徹骨 餘生養得在山家

辜負東風出故關 鳥啼花謝幾時還

離愁似夢迢々淡 幽思與雲澹々閒

才子群中只守拙 小人圍裏獨持頑

寸心空托一杯酒 劍氣如霜照醉顏

二頃桑田何日耕 青袍敝盡出京城

稜々逸氣輕天道 漠々癡心負世情

弄筆慵求才子譽 作詩空博治郎名

人間五十今過半 愧爲讀書誤一生

鷺才恰好臥山隈 夙托功名投火灰

心似鐵牛鞭不動 憂如梅雨去還來

青天獨解詩人憤 白眼空招俗士哈
日暮蚊軍將滿室 起揮紈扇對崔嵬
御一噓可被下候

當地出生軍人の娘を貰はんか／＼と勸むるものあり貰はんか貰ふまいかと思案せしが少々血統上思はしからぬ事ありて御免蒙れり

先は右近況御報知まで餘は後便に譲り申候

五月二十六日

夏目金之助

正岡賢兄 研北

三八

明治二十八年五月三十日 郵便 松山市一番町愛松亭より神戸市神戶縣立病院内正岡常規氏へ (はがき)

破碎空中百尺樓巨濤却向月宮流大魚無語沒波底俊鶴將飛立岸頭劍上風鳴多殺氣枕邊雨滴鎖閑愁一任文字
買奇禍笑指青山入豫洲
追加一律 斧正を乞ふ

三九

明治二十八年七月二十六日 口便 松山市二番町八番戸上野方より本郷區駒込千駄木町五十七番地齋藤阿具氏へ

其後は手前こそ存外の御無音奉多謝候時下炎暑に向ひ候處愈御清適奉賀候小生亦幸ひに虎列拉にも赤痢にも罹らず惜くもなき壽命をぶら／＼消光致居候大兄研究の御目的を以て崎陽地方へ御出張到る處大もての由結構此事に御座候小生杯田舎にくすほり歸り居候のみにて一向さへたる事も無之當節は餘程田舎じみ申候當夏は出来るならば九州の山河を跋涉致度と存候へども囊中自ら錢なくといふ景況にて奈何とも致し難く候去年以來海水浴場温泉場杯は嫌ひに相成候故金はなくとも其方の慾望は無之別段苦にもならず候當中學は存外美少年の寡なき處其代り美人があるかと思ふと矢張り拂底に御座候何しろ學校も平穩にて生徒も大人なしく授業を受け居候小兒は悪口を言ひ悪戯をしても可愛らしきものに御座候小生當地に参り候目的は金をためて洋行の旅費を作る所存に有之候處夫所ではなく月給は十五日位にてなくなり申候

近頃女房が貰ひ度相成候故田舎ものを一匹生捨る積りに御座候此度山口高等學校より招聘を受け候へども當地の人間に對し左様の不親切は出来悪く候へば一先辭退仕候一生の間遭逢百端此先は何うなる事やら觀じ来れば不覺嗒然運は天にありと申候へども小生天公と中がわるく御座候へば別に牡丹餅の棚より墜るを望み居り不申行盡天涯似斷蓬とか末は放翁の生れ代にでも相成る事と存候呵々先日立花より來狀小生の二代目となるまで時々は厭世觀を生ずる由氣の毒の至り小生の二代目が交友間に出来ては大騒ぎに御座候ものにならぬ前御消しとめ被下度候

先は近況御報道まで餘は後便にて萬々 早々頓首

七月二十五日 [封筒の裏に]

夏目金之助拜

齋藤學兄

東京諸友へよろしく願上候
座右

ゆく水の朝な夕なに忙がしき

四〇

明治二十八年八月二十七日 松山市二番町八番戸上野方より松山市濠町四丁目十九番戸大原氏方正岡常規氏へ

拜呈今朝鼠骨子來訪貴兄既に拙宅へ御移轉の事と心得御目にかゝり度由申居候間御不都合なくば是より直に御出であり度候尤も荷物杯御取纏め方に時間とり候はゞ後より送るとして身體丈御出向如何に御座候や先は用事まで 早々頓首

八月二十七日

漱石

子規俳仙
研北

四一

明治二十八年十月八日 松山市二番町八番戸上野方より岡山縣津山尋常中學校菊池謙二郎氏へ

其後は存外御無音奉謝候時下秋冷のみぎり益御清適奉賀候先般は御地へ御就職に相成候よし新聞紙上にも散見致し御手紙にても承知致候御校は新設の費舎のよし定めて何角御多忙の事と存候其代り随分今迄よりも面白き事も候はんと存候随分御奮勵御盡力の程奉冀望候小子其後頗る頑健閑散に打暮し居候其代り

世事とは日々疎濶に打過候段々田舎び申候結婚の事も漸く落着致候〇〇〇のは母肺病にて没し候由につき小生には不適當と存じやめ申候矢張東京より貰ふ事に致候菅長谷川は過日熊本へ赴任致候同氏等一身上の爲めには結構の事に御座候山口は其後當參事官宛にて再び申し來候故同様辭退致し候處今度は岡田氏より折を見て呼ぶ積り故其心にて居てくれと申來候無論往先の事などは當には致さず風船玉主義に御座候呵々先は右近況御伺ひ迄如斯に御座候 草々頓首

十月八日

金

菊池盟兄
座右

四二

明治二十八年十一月七日 イ便 松山市二番町八番戸上野方より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

遂に東京へ御歸りのよし大慶の至に存候儂麻も差したる事ならざるよし随分御氣をつけ可被成候小生去る二日觀瀑の爲め河の内へ參り近藤氏へ一宿翌日雨中簑と笠にて白猪唐岬に瀑一覽致候近藤宅にて觀瀑の書畫帖一覽中に貴兄の發句及び歌あり發句も書も頗る拙の様に思はれ候僕此書畫帖を看て貴兄の處に至り不覺破顔微笑す番頭傍にありて曰く其内には甚だ拙なるのも御座りますと僕叱して云ふ見苦しき故に笑へるにあらず知人あるが爲めなり

十二月には多分上京の事と存候此頃愛媛縣には少々愛想が盡き申候故どこかへ巢を替へんと存候今迄は随分義理と思ひ辛防致し候へども只今では口さへあれば直ぐ動く積りに御座候貴君の生れ故郷ながら餘り

六一

人氣のよき處では御座なく候

駄句不相變御叱正被下度候可成酷評がよし啓發する所もあらんと存候 以上

十一月六日夜

升 様

金之助

四三

明治二十八年十一月十四日 口便 松山市二番町八番戸上野方より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

御手紙拜見致候其後兩待兎角よろしからぬよし怪しからぬ事隨分御加養可被遊候小生四五日風氣にて矢張臥褥然し大した事なく結句氣樂に御座候俳壇の老將御手合せのよし定め〔て〕佳句如山湧出致候事と存候霽月杯も矢張東京にぶら付居候にや今冬上京の節は仰せなくとも押しかけて見參仕る覺悟に候へども昨今の力量にては甚だ心元なく存候三々九度の方はやめにするかも知れず如何となれば先づ金の金主から探さねばならぬからな仰せの如く鐵管事件は大に愉快に御座候小生近頃の出來事の内尤もありがたきは王妃の殺害と濱茂の拘引に御座候俳句精細の御評難有奉謝候折ふし碌堂參り合せて大に喜悅致し候人の悪口をうれしがるとは隨分性のわるき男なり小生の寫實に拙なるは入門の日の淺きによるは無論なれど天性の然らしむる所も可有之と存候拙句又々御送致候故先便の如く御存分に御成敗可被下候 以上

十一月十三日

兩 待 様

愚陀拜

御枕元

四四

明治二十八年十二月十五日 へ便 松山市二番町八番戸上野方より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

兩三日來當地は雪と霰のみ降り非常の寒氣大に恐縮致候東京は如何に御座候や大兄御變りもなく漸次御快氣に御座候や諸東上の時期も漸々近づき一日も早く俳會に出席せんと心待ち居候先日差上候駄句中には句にならぬもの多く大に赤面致居候今度の分も同じく不出來に候へども御序の節御斧正被下度候小生二十五日頃當地出發の筈に有之候へば拙稿同日位迄に當地へ着致さず候はば御手元へ御留置被下度候承はり候へば日本は又々停止の厄にかゝり候由十一日より右災難にかゝり候やに承はり候左すれば十日の分は當地へ參る間敷若し御手元に御座候はゞ三ページ丈でもよし御郵送被下度候帝國文學で似角先生の悪口をいひしは醒雪と申す人にや喧嘩も悪口のやりとりと成つては下落致候先は當用まで 匆々頓首

十一月十四日

金

升 様

御もと

四五

明治二十八年十二月十八日 へ便 松山市二番町八番戸上野方より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

遠路わざ／＼拙宅まで御出被下候よし恐縮の至に存候其節何か愚兄より御話し申上候由にて種々御配意ありがたく存候小生は教育上性質上家内のもとの氣風の合はぬは昔しよりの事にて小兒の時分より「ドメスチック ハッピーネス」杯いふ言は度外に付し居候へば今更ほしくも無之候近頃一段と隔意を生じ候事も甚だ不本意に存居候然し之が爲め御配慮を受けんとは期し居らず候ひしなり愚兄の申も處も幾分の理窟も可有之上京の節緩々可伺候結婚の事杯は上京の上實地に處理致す積りに御座候かゝる事迄に貴意を煩はす必要も無之かと存候尤も家内のもとの確と致候もの少なき故此度の縁談につきても至急を要する場合には貴兄に談合せよとは兼て申しやり置候中根の事に付ては寫真で取極候事故當人に逢た上で若し別人なら破談する迄の事とは兼てよりの決心是は至當の事と存候

小生家族と折合あしき爲外に欲しき女があるのに夫が貰へぬ故夫ですねて居る杯と勘違をされては甚だ困る今迄も小生の沈黙し居たる爲め友人杯に誤解された事も多からんと思ふ家族につかはしたる手紙にも少々存意あつて心になき事迄も書た事あり今となつては少々困却して居るなり是非雲煙の如し善惡亦一時只守拙持頑で通すのみに御座候此頃は人に悪口されると却て愉快に相成候呵々切角送つた發句の草稿をなくしては困るではありませんか舊稿を再録して上るから序の時に直して下さい

過去日盧子に手紙を送る返事來る小生の發句を褒めてくれたり有難いやら耻しいやら恐縮の至やら漸々寒氣相増候龍魔隨分御氣を付可被遊候

出京の宿も御心配ありがたし一先づ歸宅時宜によつたら御厄介になるかも知れず

小生の事につき愚兄がどんな事を申し候やは出京の上で篤と伺ひ可申候へども大兄の御考へで小生が悪いと思ふ事あらば遠慮なく指摘して呉玉へ是交友の道なり諷刺嘲罵は小生の尤癢にさはる處短刀直入の説

法なら喜んで受納可致候

先は御返事まで 草々頓首

十二月十八日

升 様

金

四六

明治二十九年一月十二日 郵便 松山市二番町八番戸上野方より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ (はがき)

一月十二日

海苔ひねになつたる由御氣の毒に存候送別の詩拜誦後聯尤も生に適切乍粗末次韻却呈

海南千里遠 欲別暮天寒 鐵笛吹紅雪 火輪沸紫瀾
爲君愛國易 作客到家難 三十異還坎 功名夢半殘
東風や吹く待つとし聞かば今歸り來ん

四七

明治二十九年一月十七日 二便 松山市二番町八番戸上野方より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

其後御病勢如何可成書狀を見合せられたし小生依例如例日々東京へ歸りたくなるのみ歸途米山より陶淵明全集を得て目下誦讀中甚だ愉快なり練郷を神戸に訪ひ築島寺及び和田岬を見る其後俳會の模様如何過日霽月來る半夜過ぎまで話して歸る

歸松後何となく倉忙俳句を作るの閑を得ず偶得る處亦皆拙悪なり然しながら習慣をかくと退歩の憂あり故に送る面倒ながら御批政可被下候餘は後便に譲り申候 拜具

十六日

金

六六

升 様

四八

明治二十九年四月十六日 へ便 熊本第五高等學校より松山市千船町横地石太郎氏へ

拜啓出發の際は御見立被下ありがたく奉謝候小生去る十日發十三日午後當地に着致候當時非常の多忙永き事を書き居る暇なし願くは舊同僚諸君へよろしく御傳へ被下度候(別に手紙も出さず)

英語教師五十五圓位にて一人あり農學士渡邊勇太郎とかいふ人なり滋賀縣尋常中學にありて後長崎の耶蘇學校に入る今は喧嘩してやめて居る由佐久間の話しでは出来る由一寸御報知申上候

四月十五日

金之助

横 地 様

四九

明治二十九年五月三日 熊本第五高等學校より坪内雄藏氏へ

拜呈其後は意外の御無音平に御海恕可被下候先生愈御清穆奉恭賀候次小生不相變碌々現今は當地高等學

校に奉職致居候間乍失禮御休神可被下候諸小生友人高濱清なるもの先生の御宅に參上の上英文學に關する御高説伺ひ度由申居候間専門校以來の御交誼に對し同人紹介狀認めつかはし候間參上の節は何卒よろしく御教訓被下度先は右用事のみ早々如此に御座候 頓首

五月三日

夏目金之助

坪 内 先 生

虎皮下

五〇

明治二十九年五月三日 熊本第五高等學校より麴町區飯田町四丁目狩野亨吉氏へ

拜呈

其後は打絶御無音に打過候段御海恕可被下候諸小生去月以來當地高等學校に轉任奉職致居候間左様御承知可被下候諸小生友人高濱清なるもの小生朋友に紹介を求め訪問の上談話杯聞くべき人を教へ呉れよと申來り候間早速貴君の處へ宛差出候間可然御高説御聞かせ被下度願上候此高濱なるものは文學的才に富みたる男にて現に俳句杯は中々上手に御座候且人物も随分たのもしき男に御座候今般大學撰科へ入學志願致す筈にて勉強致居候へば何卒御遠慮なく種々御指導御交際被下度候先は用事のみ 早々頓首

五月三日

夏目金之助

狩 野 學 兄

六七

座右
東京諸友へ御面會の節はよろしく御傳聲可被下候

五一

明治二十九年五月十六日 八便 熊本第五高等学校より愛媛縣松山尋常中學校横地石太郎氏へ

拜啓 儲其後學校の有様は如何に御座候や頼と消息なき故心懸りに候へども小生も色々多忙にて遂に伺ひもせず打過居候處今般去る友人の元より今年の英文科の卒業生にて田村喜作と申す人小生の後任として松山へ参り度由につき多少目下の事情報知致しくれと申し來候然るに此田村喜作と申す人は小生よくは知らぬ故犬丈夫と引き受候譯には行かねど何にせ英文科の卒業生故別段不都合も有之間舗かと存候若し後任者未だ定まらぬならば同人の學力人物等御詮議相成候ては如何に御座候や右至急伺ひ上候
當地非常に家屋拂底にて漸くの事一週間程前敗屋を借り受候へども何分住み切れぬ故又々移轉仕る覺悟に御座候

淺田は岩手へ参り候よし

目下學校の有様は如何に御座候や 頼首

五月忘日

横地様

金之助

乍筆ニ字不思御令聞へよろしく御傳聲被下度候

五二

明治二十九年六月八日 八便 熊本市光琳寺町より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

御紙面拜誦仕候虚子の事にて御心配の趣御尤に存候先日虚子よりも大兄との談判の様相報じ來り申候虚子云ふ敢て逃るゝにあらず一年間退て勉強の上入學する積りなりと一年間にどう變化するや計りがたけれど勉強の上入學せば夫でよからん色々事情もあるべけれど先づ堪忍して今迄の如く御交際あり度と希望す小生の身分は固何時免職になるか辭職するか分らねど出來る丈は虚子の爲にせんとて約束したる事なり當人も夫を承知で奮發して見様といひ放ちたるなり雙方共別段の事故新たに出來ざる内は其積りで居らねばならぬと存候小生が餘慶な事ながら虚子にかゝる事を申し出たるは虚子が前途の爲なるは無論なれど同人の人物が大に松山的ならぬ淡泊なる處、のんきな處、氣のきかぬ處、無氣様な點に有之候大兄の觀察點は如何なるか知らねど先づ普通の人間よりは好き方なるべく左すれ「ば」左程愛想つかしをなさるるにも及ぶまじきか或は大兄今迄虚子に對して分外の事を望みて成らざるが爲め失望の反動現今は虚子實際の位地より九層の底に落ちたる如く思ひはせぬや何にせよ今度の事に就き別に御介意なく虚子と御交誼あり度小生の至望に候小生よりも虚子へは色々申し遣はすべく候

妻呼迎の件色々御心配被下ありがたく存候實は先便申上候通父同道にて兩三日中に當地へ下向の筈に御座候間御休神被下度候當夏は東京へ参り度候へども妻の事件で如何なるやら分らず

近頃は一月頃より身體の御具合あしき由精々御保養可然名譽齷齪世事頓着深く御禁じ可被成虚子の事杯はどうでも御抛擲なさいよ 頼首

六月六日 「封筒の裏に」

子 規 様

愚 陀 佛
七〇

五三

明治二十九年六月十一日 二便 熊本市光琳寺町より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

中根事去る八日着昨九日結婚略式執行致候近頃併況如何に御座候や小生は頓と振はず當夏は東京に行きたけれど未だ判然せず併書少々當地にて掘り出す積りにて参り候處案外にて何もなく失望致候右は御披露まで餘は後便に譲る 頓首

衣更へて京より嫁を貰ひけり

愚 陀 佛

子 規 様

五四

明治二十九年七月二十八日 熊本市光琳寺町より在獨乙大塚保治氏へ

御存じの如く當地は只今土曜中にて非常の暑氣毎日々弱り果居候處大兄の御近況如何に御座候や先日は獨乙着の御手紙正に拜受仕候愈御清適御勉學の御模様結構の事に存候國家の爲め御奮勵有之度切に希望仕候次に小生當四月より當地高等學校に轉任矢張り英語の教授に其日くをくらし居候不相變御無事に御目出度のんきに御座候當地は普法師杯も有之大に都合よく御座候へども暑氣のはけしきには殆んど閉口致候丸で蒸風呂に入りたらんが如く實に御苦惱の程御覽に入れ度と存候獨身に候へば疾に避暑とか何とか名

をつけて逐電可致筈の處當六月より兼て御吹聴申上置候女房附と相成申候へば御荷物携帶で處々をぶらつくも何となく厄介なるのみならず随分入費倒れの物品に候へば釜中の苦を忍んでぐすく致居候御笑ひ被下度候小生は東京を出てより松山松山より熊本と漸々西の方へ左遷致す様な事に被存候へば向後は琉球か臺灣へでも参る事かと我ながら可笑しく存居候爲朝か鄭成功の様な豪傑になれば夫でも結構と思ひ候へども愈土蕃と落魄しては少々寒心仕る次第に御座候

過日御出立後玉影一葉東京御本宅より御郵送被下ありがたく奉拜謝候

或は御承知とは存候へども過日三陸地方へ大海嘯が推し寄せ夫はく大騒動山の裾へ蒸氣船が上つて来る高い木の枝に海藻がかゝる杯いふ始末の上人畜の死傷杯は無數と申す位實に恐れ入り山忠助さん杯と洒落る場合でないから義捐金徴集の廻狀がくるや否や月俸百分の三を差出して微衷をあらはしたと云ふ次第に御座候然し是は職員全體共に出金致したる事故別段小生の名譽にもなるまじきかと心痛致居候

諸御地にて面白き事も有之候は御閑暇の時でよろしいから御一報可被下候京都大學は愈設立のよしにて過日來續々官費留學生派遣に相成候東京の諸友は不相變の様子に御座候先は右左右御伺ひの爲め草々如斯に御座候 頓首

七月二十八日

熊本市光琳寺町

夏目金之助

右は小生の寄寓致居候宿所に御座候

金之助

大塚學兄

五五

明治二十九年九月二十六日 八便 熊本市合羽町二百三十七番地より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

其後御月見も無事に打過候處世間は何となく海嘯以來騒々しきやに被存候東京は定めて目ざましき模様ならんと存候大兄御病氣過日來少々よろしからぬやに承はり候只今の處如何に候や隨分御養生專一に御座候小生當夏は一週間程九州地方瀛車旅行仕候俳句も近頃は頼と浮び申さず困却致候夫にも關らぬ小生の駄句時々雜誌杯に出るよし生徒杯の注進にて承知致候少々赤面の至と存じ何か傑作をものせんと思ひ立つ事有之候へども思ひ立つのみにして毫もものにはならない事が不思議に御座候大兄近頃は文筆の方は餘程御勉強の模様雜誌の廣告にて承知仕候新體詩會杯にも御發起のよし結構に存候時に竹の里人と申すは大兄の事なるや序ながら伺ひ上候虚子修竹大坂にて満月會に出席致候よし露石より申し來り候ちと御閑の節俳壇の様子にても御報知被下度候俳書購求一件は大兄より虚子にても御托し被下度候又同子に御面會の節活版の七部集及故人五百題一部づゝ乍面倒送る様御依頼被下度候

序に附記す小生今回表面の處に移轉せり熊本の借家の拂底なるは意外なりかゝる處へ來て十三圓の家賃をとられんとは夢にも思はざりし「名月や十三圓の家に住む」かね轉居の事虚子にも御傳被下度候

月東君は今頃寐て居るか
九月二十五日

子規様

愚陀佛

駄句少々御目にかけて候友人菅虎雄の句も同時に御批點被下度候

五六

明治二十九年十一月十五日 八便 熊本市合羽町二百三十七番地より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

拜啓

こゝに一つの御願有之候先頃學校の教務掛の庭に靈芝とか何とかいふものが生たと申すにより小生に其詩を作つて呉れと申し來り候處が小生は御存じの通りの詩人なれば何とか言ひ抜けて胡魔化さんと存候處運のわるき時は困るものにて小生の斷はりたるを謙辭とのみ推了して呉れ果は自宅迄押懸來り依頼致候につきそこは鏡面の小生遂によろしいと受合申候夫より幼學詩韻杯をひねくりちらしやつとの事で五絶五首を作り候へども自分ながら此が拙の詩でけすと人に贈る譯にも相成兼るといふ次第で不得已貴公を煩はして種竹先生の添削を仰ぎ度と存候尤も面倒なれば右五首の中只一首丈にてよろしく候間可成詩になりそうなるものを捉へて詩に御成し被下候へば夫でよろしく候化鏡爲金事は化學上に於ても文學上に於ても同様困難の事と存候間地金のまゝ少々御鍊鍛の程願上候若し又それも御面倒ならば小生の代理に一句御浮び被下候へば幸甚の至に存候右甚だ御迷惑ながら種竹氏に御依頼の程懇願致候

日本人は當地にて購讀の道を開き候へば御送に及ばず候新聞代價は君に迷惑を懸ては濟ぬと思ひ爲替で送り候然し一部位はどうで都合がつくといふなら送らぬ但し君が拂ふ位なら僕が拂ふも同じ事故是より送る事と致したし
小生近頃藏書の石印一牧を刻して貰ひたり章曰漾虛碧堂圖書と漾虛碧堂とは虚子と碧梧桐を合した様な

堂號なれど是は春山疊亂青水漾虛碧と申す句より取りたるものに候刻者は伊底居士とて先般より久留米の梅林寺に滞留し近頃當地見性寺の僧堂に参り居候もの篆刻の餘暇參禪の工夫に餘念なき様子刻風は蘇爾宜篆法とかいふ奴を注文致候頗る雅に出來致候一寸御覽に入度と存候へども肉を買はぬ故押す事が出來ず次回に送るべし

俳句頗る不景氣につき差控へ申候其癖種切の有様に御座候

大兄の新體詩(洪水)拜見致候音頭瀨杯よりも餘程よろしくと存候然も處々俗語を調和せんとて遂に俗語に了るものある様に被存候貴意如何

虚子の俳論を讀み候内容と外容の議論「論事矩」を應用したる所面白く御座候或點に於て内容を充すと同時に外容を縮めざる事を力むべきは誰も同感ならんと存候然し夫が爲め好んで詩形の外に逸出せば遂に俳句なきに至らんか況んや外容内容共に依然たるの時に於て猶好んで字句を敷張せば不必要の勢力を使用するに過ぎざらん虚子好んで長句を用ふ是既に十七字の詩壘を離れんとするなり全く離るゝは可なり虚子今日の舉動は半身を壘外に排して敵を嚙ぐか如し矢石の標とならずんば幸なり敢て貴意を問ふ
そんな事はどうでもよし先は用事まで右可成例によらず御早く願ひます穴賢

十一月十五日

漱石

子規様

研北

明治二十九年十二月五日 へ便 熊本市合羽町二百三十七番地より神田區淡路町二丁目一番地高田屋方高濱清氏へ

來熊以來は頗枯淡の生涯を送り居候道後の温泉にて神仙體を草したる事宮島にて紅葉に宿したる事など皆過去の記念として今も愉快なる印象を腦裡に留め居候今日日本人三十一號を讀みて君が書體の一文を拜見致し甚だ感心致候立論も面白く行文は秀で、美しく見受申候此道に従つて御進みあらば君は明治の文章家なるべし益御奮勵の程奉希望候先日世界の日本に出たる「音たてて春の潮の流れけり」と申す御句甚だ珍重に存候子規子がものしたる君の俳評一讀是亦面白く存候人事的時間的の句中甚だ新にして美なるもの有之候様に被存候然し大兄の御近付中には甚だ難澁にして詩調にあらざるやの疑を起し候ものも有之様存候(心安き間柄失禮は御海恕可被下候)所謂べくづくし杯は小生の尤も耳障に存候處に御座候然し「吾に酔べく頭痛あり」又「豊年も卜すべく新酒も醸すべく」杯は至極結構と存候凡て近來の俳句一般に上達巧者に相成候様子に存候讀賣杯に時々出るのは不相變まづき様覺候まづしと云へば小生先頃自身の舊作を檢査致し其まづきことに一驚を喫し候作りし當時は誰しも多少の己惚は免るべからざる事ながら小生の如きは全く俳道に未熟の致す處實に面目なき次第に候過日子規より俳書十數卷寄贈し來り候大抵は讀み盡し申候過日願上候七部集及び故人五百題(活字本)は御面倒ながら御序の節御送願上候子規子近來の模様如何此方より手紙を出しても一向返事もよこさず多忙か病氣か無性か或は三者の合併かと存候小子僻地に罷在樂みとする處は東京俳友の消息「に」有之何卒爾後は時々景氣御報知被下度候近什少々御目にかけて候御ひまの節御正願上候小生藏書印を近刻致候是亦御覽に入候 頓首

十二月五日

漱石

虚子様





五八

明治三十年一月十二日 卜便 熊本市合羽町二百三十七番地より松山市千船町横地石太郎氏へ

御書拜見仕候心經弘治版一葉御寄贈被下ありがたく拜受仕候又書籍の件拜承仕り候小生借用書籍は凡て十卷前後と存候右は全部とも中村氏に托し候山口氏が四冊は中村より受取り殘卷三卷は受取らずと申す事尤も不審に存候右は中村氏より返納せざりしか又は山口氏が手控を消す事を忘却せるかには無之候や小生第壹回の談判を山口氏に始めたる時藏庫中を搜索し若し見當らずば中村へ今一度照會致し呉れとの主意に御座候處其後二月許り何の返事も無之貴書に先つ事一日始めて同氏より一書を受取候處書籍の有無及び書名も判然不致且つ中村より受取りたりとあるのみにて何卷丈受取何々の殘卷が不明なるや分らず雑誌とか何とか有之候へども如何なる種類の雑誌なるや小生勝間田寄附の書籍は正に借用致候是は「スコット」の小説三四部と記憶致候へども右は慥かに他の教科書用の書籍と共に中村に托し候に相違なく候雑誌の如き勝間田にせよ何にせよ借用したる覺無之候何卒今一應書籍の名を分明に致し書庫中を搜索し若しなけれ

ば中村へ今一應御照會被下候様山口氏へ御命じ被下度候若し夫でも相分り不申候はゞ小生甘んじて辨償の責に任すべくと存候

兎に角山口氏が所轄の書籍に對し小生轉任後數月の後まで其儘に致し置き始めて突然書生杯に對し小生が未だ書籍を返納致し居らぬ由口外致し候のみならず小生より照會致し候も二三月間何等の返事も致さざる事第一學校へ對しては不親切なるのみならず小生へ對しても至當の處置と存じ不申候右御参考まで申上候

先は用事まで 早々頓首

一月十二日

金之助

横地 學兄 座右

五九

明治三十年四月十八日 八便 熊本市合羽町二百三十七番地より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

腰部切開後の景況あまり面白からぬ由困つた事と存候過日は美事なる短冊御寄送被下ありがたく奉謝候時々徒然の折は手習の爲めむだ書致し居候今春期休に久留米に至り高良山に登り夫より山越を致し發心と申す處の櫻を見物致候歸途久留米の古道具屋にて士朗と淡々の軸を手に入候につき御慰の爲め進呈致候勿論雙方とも眞偽判然せず且士朗の句月花を捨て見たれば松の風といふは過日差上候梅室の句と同じ様に記憶致し居候元來の駄句と存候に如何なれば色々の俳人の筆に登るにや是も偽物の一證かもしれずと存候然

し疎畫は句よりも中々風韻ある様見受申候淡々の方は畫は三文の價値も無之字は少々見處あり句に至つては矢張り駄の方と存候是も偽物かもしれず何せよ御笑草にまで御覽に入候先日來山川を當校に招聘致す事に相成目下拙宅に寄寓致居候小生東京のある學校にて招きを受け候處待遇も申分なけれど何分學校の義理あり且校長の依頼山川へ對しての信義杯の點より謝絶致す事と相成候處子北堂の病氣はかゝしからぬ由にて猶滯松のよし氣の毒の至と存候近頃小説を物せられたる由廣告で拜承嘘から出た眞と相成候にや呵々近業御覽に入候間御叱正願上候 不一

四月十六日

漱 石

子 規 様 藥湯 爐邊

六〇

明治三十年四月二十三日 へ便 熊本市合羽町二百三十七番地より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ 「封筒表側に「必頼展」さあり」

腫物猶々長大に生長龐然たる腰邊の大塊嘸かし御難儀と存候精々御自愛可然と存候

小生身分色々御配慮ありがたく奉謝候實は教師は近頃厭になり居候へどもさらば翻譯官はといふと果してやつて除るといふ程の自信と勇氣無之第一法律上の言語も知らぬ我々が外務の翻譯官と突然變化した處で英文の電報一つ満足には書けまいと思ふなり尤も一二年見習の上は多少地のある事なれば何とか故魔化しもきくべけれど差當りては到底高等官處か屬官の價値もあるまじと存候實は去年十月頃教師をやめたいが好分別はなきやと中根に相談致し候處外務の翻譯官に依頼し置きたり(多分小村なるべし)と申し越し

たり尊叔が課長なれば非常の好都合なれど自信なき事に周旋を頼み後に至り君及び加藤氏に迷惑がかゝりては氣の毒故其職掌事務等詳細の事相分り是ならば随分君の面目を損する事なく遣つて行けるといふ見込がつく迄は先づ差し控た方可然と愚考致候

仙臺の高中に目下行き度考なし仙臺は愚か東京の高等學校でも多分は辭する考なり否教師をして居る位なら當分現在の地位にて少し成績を現はしたる後にて動きたし過日高等商業學校長小山より中根を介して年俸千圓高等官六等にて來ぬかと申し來り中根も金の不足あるならば月々補助するから歸京せよとまで勧めたれど一方にては當地の校長は是非共居つて呉れねば困ると懇々の依頼なりし故宜しい貴公が夫程小生を信じて居るならば小生も出来る丈の事はすべし又教師として世に立つ以上は先づ當分の處御校の爲に盡力すべしと明言したり且此語は校長のみならず山川を呼ぶ時にも明答に及びたる次第目下假令如何なるよき口ありとも自ら進んで求むるの意なく候尤も小生と當學校との關係變化する場合或は一身の事情にて斷然教育界を去る場合や或は官命にて是非なき場合は別問題にて自由に進退し得る境遇に御座候今回の翻譯官杯も教師の口で他へ轉ずる譯でないから小生に意思あり外務省で採用すれば當校を去る點に於ては別に苦情もある間鋪と思へども如何せん進んで願はれぬと申す譯は冒頭に申せし次第なれば是非なし

偕小生の目的御尋ね故御明答申上たけれど實は當人自らが所謂わが身でわが身がわからない位故到底山川流に説明する譯には參り兼候へども單に希望を臚列するならば教師をやめて單に文學的の生活を送りたきなり換言すれば文學三昧にて消光したきなり月々五六十の收入あれば今にも東京へ歸りて勝手な風流を仕る覺悟なれど遊んで居つて金が懷中に舞ひ込むといふ譯にもゆかねば衣食文は小々堪忍辛防して何かの種を探し(但し教師を除く)其餘暇を以て自由な書を読み自由な事を言ひ自由な事を書かゝん事を希望致候然るに小生は不具の人間なれば行政官事務官杯は到底して呉れる人もなくあつても二三月で愛想を盡か

すにきまつて居れば大抵な口では間に合はず因て先頃郵便にて今回若し帝國圖書館とか何とかいふものが出来る様子だから若し出来たらば其方へで「も」周旋して呉れまいかと中根へ申てやり候處圖書館の方は牧野に面會色々聞た處恰も松方内閣成立の始めでどうなるやら夢の様な話しなりとの返答中根より到着致候まゝ其話しは今日迄夫ナリに御座候
右至急御返事まで草々如斯に御座候

序に伺候一葉集といふ俳書は前後兩篇にて壹圓貳拾錢位ならば高くはなきや又芭蕉句解も八十錢位で相當の價なりや兩書共久留米で見當たれど高さう故買はなんだ安ければ今から取寄せる積りなり
尊叔には未だ拜顔を得ざれどよろしく御鳳聲願上候

二十三日

金

升 様

六一

明治三十年五月二十八日 八便 熊本市合羽町二百三十七番地より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ 「封筒表側に「半用事」とあり」

薫風の時節病魔果して如何近日蕪村の續稿を讀みて少しく輕快に向へるを知る伏して道體の安全を祈る

小子因例如例碌々たり昏々たり詩腸枯れ硯池蕪す時に句あり皆句を成さず嘆息

行く春を剃り落したる眉青し

行く春を沈香亭の牡丹哉

春の夜や局をさがる衣の音

憶子規

春雨の夜すがら物を思はする

埒もなく禪師肥たり更衣

よき人のわざとがましや更衣

更衣て弟の脛何ぞ太き

埋もれて若葉の中や水の音

影多き梧桐に据る床几かな

郭公茶の間へまかる通夜の人

蹴付たる雛の枕や子規

辻君に袖牽れけり子規

扛け兼て妹が手細し鮮の石

小賢しき犬吠付や更衣

七筋を心利きたる鶉匠哉

漢方や柑子花さく門構

若葉して半簾の雨に臥したる

妾宅や牡丹に會す琴の弟子

世はいづれ櫻欄の花さへ穂に出でつ

立て懸て螢這ひけり草箒

若葉して縁切榎切られたる
で、蟲の角ふり立て、井戸の端
溜池に蛙鬪ふ卯月かな
虚無僧に犬吠えかゝる桐の花
筍や思ひがけなき垣根より
若竹や名も知らぬ人の墓の傍
若竹の夕に入て動きけり
鞭鳴す馬車の埃や麥の秋
渡らんとして谷に橋なし閑古鳥
折り添て文にも書かず杜若
八重にして芥子の赤きぞ恨みなる
傘さして後向なり杜若
蘭湯に浴すと書て詩人なり
すゝめたる鮓を皆迄参りたり
鮓桶の乾かで臭し蝸牛
生臭き鮓を食ふや佐野の人
粽食ふ夜漁車や膳所の小商人
蝙蝠や賊の酒呑む古館
不出来なる粽と申しおこすなる

五月雨や小袖をほどく酒のしみ
五月雨の壁落しけり枕元
五月雨や四つ手繕ふ舊士族
眼を病んで灯ともさぬ夜や五月雨
馬の蠅牛の蠅來る宿屋かな
逃すまじき蚤の行衛や子規
蚤を逸し赤き毛布に恨みあり
蚊にあけて口許りなり墓の面
鳴きもせでぐさと刺す蚊や田原坂
熊本にて
夏來ぬと又長鋏を彈すらく
藪近し椽の下より筍が
寐苦しき門を夜すがら水鶏かな
成道寺
若葉して手のひらほどの山の寺
菜種打つ向ひ合せや夫婦同志
菊池路や麥を刈るなる舊四月
麥を刈るあとを頻りに燕かな
文與可や筍を食ひ竹を畫く

五月雨の弓張らんとすればくるひたる
立て見たり寐て見たり又酒を煮たり

〔封筒の裏に認めあるもの〕

水攻の城落ちんとす五月雨

大手より源氏寄せたり青嵐

水涸れて城將降る雲の峯

こんなものばかりに候然し病中の御慰に御覽原の入候

又別紙詩文稿は熊本人野々口勝太郎といふもの、作にかゝる同人は往年商業學校の主計課を卒業し田舎新聞杯に従事し居たる處目下糊口の方に迷ひ頻りに小生方に泣き付に來るものなり當人の志願は文筆を以て月々夫婦の糊口位出來ればよしといふ也固より東京には限らねどひよつと日本〔新〕聞位にて使つて吳まいか又は他に心當りはなきか病中氣の毒ながら少々心配して見て吳ぬか願ひます 以上

五月二十八日

漱石

子規子

梧下

六二

明治三十年六月八日 二便 熊本市台羽町二百三十七番地より仙臺市東一番町五番地加藤滿方齋藤阿具氏へ

漸々暑氣相催し候處愈御清穆奉恭賀候小子幸ひに無異碌々消光仕居候間御休神可被下候兼て御依頼申上

置候歴史講本御手数の御蔭にて漸く完備深く奉鳴謝候右草稿費金七拾錢はとくに御送付可申上筈に有之候處何角取紛れ荏苒今日に至候不惡御宥恕願上候今回幸便を以て右御郵送申上候間御落掌被下度願上候
仙臺へ御就任の事大慶の至に存候隨分國家の爲め學校の爲め御奮勵御指導の程奉希望候騷動後には却つてうまく行くものに御座候

米山の不幸返すゝ氣の毒の至に存候文科の一英才を失ひ候事痛恨の極に御座候同人如きは文科大學あつてより文科大學閉づるまでまたとあるまじき大怪物に御座候蟄龍未だ雲雨を起さずして逝く碌々の徒或は之を以て轍鮒に比せん残念

小生只驚駭に鞭つて日暮道遠の嘆あり御憫笑可被下候先は右當用のみ 早々頓首

六月八日

金之助

齋藤學兄

几下

六三

明治三十年八月一日 卜便 總町區内幸町貴族院官舎中根氏方より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

一筆啓上

毎度ながら長座嘸かし御迷惑の事と存候御傭ひ被下候車夫濱田屋主人の希望により解雇主人自ら轅棒をとつて虎の門まで送り届け候六十錢は小生前の車夫より没收の上更に四拾錢を濱田屋の老翁につかはし候殘金貳拾錢何れ其内御返上可仕候兎に角昨夜御門前にての立まはりは一寸奇觀に候ひし御依頼の書籍其内

御届可申上候

御北堂様御令妹へよろしく御傳聲可被下候 以上

夕涼し起ち得ぬ和子を啣つらく

八月一日

子 規 庵

御もと

愚陀佛

六四

明治三十年八月四日 二便 麴町區内幸町貴族院官舎中根氏方より麴町區飯田河岸第五號成瀬方赤木通弘氏へ

拜啓其後御無沙汰に打過ぎ候大兄御任官の事委細熊本表校長宛にて手紙差出し候處未だ何等の廻答も無之實は校長も目下旅行中にて夫故返答の後るゝ事と存候就ては大兄履歴書は早晚學校にて入用の事と存候間御都合次第小生迄御送附被下度左すれば小生より直に校長手元へ差出し可成早く御任命の手續に致し度と存候先は用事のみ 早々頓首

八月四日

赤木賢臺

座下

金之助

六五

明治三十年八月十七日 八便 鎌倉村木座亂橋河内屋より麴町區飯田河岸第五號成瀬方赤木通弘氏へ

拜啓暑氣烈しく候處愈御清穆奉賀候過日英語御分擔の件につき御協議申上候處早速御承引被下奉謝候然る處本日熊本高等學校教頭櫻井氏よりの書面にて來學年には從來の論理受持教授黒木千尋氏やめる事に相成候に就ては該科擔當の儀貴君に願度由申來り候間左様御承知可被下候尤も該科目は一週九時間につき過日御協議申上候英語の時間は多くとも十時間位に減少する筈に有之候尤も何年何組といふ事は時間割變更の上にて可申上と存候へども先は右至急得貴意候論理御擔任の事は兼ねての御希望と存じ候へば勿論御異存なき事と存じ候 頓首

八月十六日

金之助

赤木賢臺

梧下

六六

明治三十年九月十二日 〇便 熊本縣飽託郡大江村四百〇一番地より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ (はがき)

小生海陸無事昨十日午後到着致候途上秋雨にて困却す當地殘暑劇し

今日ぞ知る秋をしきりに降りしきる

小生宿所は表面の通

明治三十年九月十九日 八便 熊本縣飽託郡大江村四百〇一番地より愛媛縣温泉郡今出町村上半太郎氏へ

其後は絶て御無音に打過申候漸々秋冷相催ふし候處愈御清福奉賀候御高吟乍毎度新聞紙上にて拜見致候先日御送の光風居七勝拙作とくに御笑覽に可入筈の處種々俗用の爲め今に不果素志實は何回かこゝろみ候へどもいつも果さずして已み申候發句も其後ほとんど中絶の姿東京に三四回子規庵に會合致し候のみに御座候今夏一月程鎌倉にくらし申候駄句二三首申譯の爲め御覽に入候

〔中斷〕

唱和の作秋季にては甚だ困難を感じ候然し其内御笑ひ草に何か物しまるらすべく候 不一

九月十九日

霽 月 様

研 北

漱 石

明治三十年十二月十二日 二便 熊本縣飽託郡大江村四百〇一番地より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

愈窮陰の時節と相成候御病體近日の模様如何に候や不相變筆硯御繁昌の様子故まづ御快氣の方と遙察致候小生碌々矢張因例如例に御座候俳句頼ともものならず囊底と共に拂底に御座候頃日五言律一首を得候間御笑覽に供し候御大政願上候

掉頭辭帝闕

倚劍出城闔

翠嶽肥山盡

滂洋筑水新

秋風吹落日

大野絶行人

索寞乾坤黯

蒼冥哀雁頻

俳句少々御目につけ候序を以て御批正願上候 以上

十二月十二日

金

升 様

几 下

明治三十年十二月十七日 熊本縣飽託郡大江村四百〇一番地より千葉縣千葉尋常中學校菊池謙二郎氏へ

啓窮陰の時節と相成候處益御多祥奉恭賀候儲今夏東京表にて御面語のみぎり一寸御評判有之候津山尋常中學の英語教授奥(泰二郎氏か)は其後矢張同校に奉職被致居候や實は本校にて來年四月頃迄には英語教師一名是非共雇入の運びに立ち至るべきかと存じ候につき只今よりそろりと候補者選定に着手致し猶進

んでは内約丈にても取極めんとの下心も有之候に就ては同氏の性行學力其他大兄の御承知の箇條委細の處御報知を煩はし度同時に大兄若し同氏を以て高等學校英語教師に差し支へなしとの御見込に候へば同氏へも書狀御差出被下來月四月頃迄には津山を去り得るや又第五高中に來り得るや一應御問ひ合せ被下間敷候や大兄の御紙面拜見の上又同氏の返答如何により猶進んで交渉致す必要も生じ候はゞ又々御手数を煩はすか或は直接の話し合ひに致し度と存候

猶可成丈多數の候補者を作り其中より選擇の自由を得度候につき奥氏へは其御含みにて只同氏の都合のみ御問ひ合せ願ひ上候成否は無論小生にも保證し難き儀に候へば左様御承知願上候

又此事は候補者製造の上にて始めて校長へ打ち明る手順につき(即ちある無能力の教師放逐を建議する積)徳義上祕密を御守り被下度奥氏へも其旨御通知願上候右取急ぎ候まゝ當用のみ御免可被下候 頓首

十二月十七日

金之助

菊地賢臺

研北

奥氏待遇上の希望杯も序に御問合せ被下度候又同氏は檢定試験合格者と記憶致し居候が如何それも御知らせを乞ふ

明治三十一年一月六日 下便 熊本縣飽託郡大江村四百〇一番地より府下日暮里村元金杉百三十七番地山岸方高濱清氏へ

其後不本意ながら俳界に遠かり候結果として貴君へも存外の御無沙〔汰〕申譯なく候

承はれば近頃御妻帯のよし何よりの吉報に接し候心地千秋萬歳の壽をなさんが爲め一句呈上致候

初鴉東の方を新枕

小生舊冬より肥後小天と申す温泉に入浴同所にて越年致候

かんてらや師走の宿に寐つかれず

酒を呼んで酔はず明けゝり今朝の春

甘からぬ屠蘇や旅なる酔心地

うき除夜を壁に向へば影法師

御大喪中とある故

此春を御慶もいはで雪多し

一年の計は元日にありと申せば随分正月より御出精明治三十一年の文壇に虚子ある事を天下に御吹聴被

下度希望の至に不堪候 以上

正月五日夜

漱石

虚子君

乍末筆御令聞へよろしく御鳳聲願上候

明治三十一年一月十八日 口便 熊本縣飽託郡大江村四百〇一番地より熊本縣玉名郡小天温泉前田氏へ

拜啓先日は兩人にてまかり出種々御厄介に相成御禮申上候今回は見事なる密柑並びに茸わざ／＼御惠送にあづかり奉萬謝候先は右口上迄早々如斯に御座候也 頓首

正月十八日

夏目金之助
山川信次郎

前田様

七二

明治三十一年三月二十一日 へ便 熊本縣飽託郡大江村四百〇一番地より神田區東五軒町高濱清氏へ

其後は存外の御無沙汰平に御海恕可被下候御惠贈の新俳句一卷今日學校にて落手御厚意の段難有奉拜謝候小生爾來俳境日々退歩昨今は現に一句も無之候此分にてはやがて鳴雪老人の跡釜を引き受る事ならんと少々寒心の體に有之候子規子病氣は如何に御座候や其後事も久しく消息を絶し居候事とて頓と様子も分らず候へども近頃は歌壇にての大氣燄に候へば先々あしき方にてはなかるまじと安心致居候先は右御禮のみ早々如斯に御座候 頓首

三月二十一日

愚陀佛

虚子様

榻下

梅ちつてそゝろなつかしむ新俳句

七三

明治三十一年六月十日 熊本第五高等學校教員室より第五高等學校三年生藤生榮へ

一昨日は御來訪の處何の風情も無之候大兄の俳句千江氏の分と共に過日子規手許迄送り置候處本日着の日本に三句丈掲載致來候間供御一覽候猶斯道の爲め御奮勵の段偏に奉希望候 不一

六月十日

漱石

紫川様

研北

七四

明治三十一年八月二十七日 土屋忠治へ

芳墨拜見致候金策の件都合よく纏まり候よし大慶の至に存候此上とも知人の好意に背かぬ様御勉學專一と存候近頃東京より参り候ものゝ話しには大學の書生の品行日々頽廢遊里杯に出入致を名譽と致す位のよしかゝる中には餘程の決心必要に御座候水に入つて溺るゝか火に入つて蘇るか平生の得力は斯様の時にわかるものに候よく／＼御注意可被成候君平素禪を好むも禪は文句にあらず實地の修行なるべし塵勞の裡にあつて常に塵勞の爲に轉ぜらるゝならば禪なきと一般ならん小生不知禪妄りに相似を説く唯君の成功を冀ふが爲のみ 不一

八月二十七日

忠 治 様

金 之 助

九四

七五

明治三十一年九月四日 不便 熊本市内坪井町七十八番地より神田區錦町眼科醫院大西氏方菅虎雄氏へ

其後は不相變御無沙汰に打過候過日來御上京のよし忽ち接華墨承知致候今度の御東上は御身邊の御關係のやうに承り候先日狩野氏より第一の方にて大兄を御招聘の相談纏まり候やの報有之多分それか爲めの御出發と存候此際結構の事と遙かに御祝申上候當校の方は過日黒本教授（一字不明）舎監兼務に任せられ候是は定めて新聞紙上にて御承知の事と存候山川狩野兩氏未だ歸熊の運びに至らず小生終日閑坐貴重米粒を浪費致候俟野生過日東上中根岸邊に寓居のよし手紙を以て報じこし候參上の節は隨分御訓示願上候淺井氏には時々面會御尊致居候過日御來示の俳句數首日本新聞へ寄送致候處夏季切後にて掲載の運びに至らず其後三池生より禮狀到來始めて同人の句なるを知り申候近頃は頼と俳句も作り不申暑中は少々奮發打坐を試み候處些の入處も無之其内運動不足の爲め下痢を催ふし夫より昨今に至りては始業間近く相成候爲め夫なりに放却致候御憫笑可被下候法語々錄の類數種披見致し候が少しの得に御座候へども晝餅不充饑依然たる曠酒糟の漢なるには閉口致候右御挨拶旁近況御報知迄 早々頓首

九月二日夜

金 之 助

虎 雄 様

研 北

七六

明治三十二年四月二十日 土屋忠治へ

啓御老母様かねて御病氣の處御療養の甲斐もなく御遠逝のよし拜承嘸かし御痛悼の事と遙察致候此際金錢上の事にて必用の事も有之候は、些少の事は如何様にも取計申候間無御遠慮御申越可相成右は先御弔詞迄早々如斯御座候 頓首

四月二十日

金 之 助

忠 治 様

七七

明治三十二年九月二日 不便 熊本市内坪井町七十八番地より牛込區香町五十四番地夏目直矩氏へ

尊書拜見仕候御手紙の趣拜讀致候右につき少々分り兼候儀有之候につき重ねて申上候
小生の伺ひ度は姉の意志並びに高田の意志の確然たる處に有之候然るに御手紙にては雙方の意志とも只貴君の御推察のみにて此件につき小生のとるべき態度を決しかね候様の御返答かと存候尤も姉は目下喘息のよし是は一週間位にて一應治る事と存候へば其節にてよろしく又高田の方は御會見の上何とか常人の口より確としたる處を御聽取被下度御迷惑とは存じ候へども最初此事件相生じ候節より中間に御立ち被下候は御覺悟の事と存候そは大兄より始めて口を開いて此事件を喚び起され候故に候
右高田の意志（姉の方は目下至急にも無之）承はり候上にて篤と處置致度と存候

九五

目下高田のなす處は疊に小生を馬鹿にするのみならず大兄をも馬鹿にしたる仕方には無之や己れの女房が人の世話になるのに一言の禮もせね様なものはあまり多からぬ様被存候若し理窟が分らずして平氣ならば御諭し被下度候わかつてゐるのなら證言を御取り被下度小生にも其考有之候

右折返し御返事申上筈の處少々旅行致居候爲め遅引致候

月々のもの送る送らぬの點に關しては要領を得たる御返事頂戴致候上の事と可致従つて今回は御答申上ず候 頓首

九月二日

金之助

直 矩 様

愚女は筆となづけ申候

明治三十二年十二月十一日 二便 熊本市内坪井町七十八番地より神田區猿樂町二十五番地高濱清氏へ

其後は大分御無沙汰御海恕可被下候時下窮陰之候筆硯愈御清穆奉賀候儲先般來當熊本人常松迂巷なる人當市九洲日々新聞と申すに紫溟吟社の俳句を連日掲載する様盡力致し猶東京諸先俳の俳句も時々掲載致し度趣にて大兄へ向け一書呈上候處其後何等の御返事もなきよしにて小生より今一應願ひくれる様申來候右迂巷と申す人は先般來突然知己に相成候人なるが非常に新派の俳句に熱心忠實なる人に有之實は今回の舉杯も新派勢力扶植の爲めの計畫に候左すればほと、ぎす發行者などは大に聲援引き立て、やる義理も有之

べきかと存候且九洲地方は新派の勢力案外によはくほとんど俳句の何ものたるを解せざる有様に候へば俳句趣味の普及をはかる點より論ずるも幾分か大兄杯は鼓吹獎勵の責任ありと存候右の理由故何とか返事でも迂巷宛にて御差出可被下候又日日新聞は同人より大兄宛にて毎日御送致し居候よし定めて御閱覽の事と存候

乍序ほと、ぎすにつき一寸愚見申述候間御參考被下度候

「ほと、ぎす」が同人間の雜誌ならばいかに期日が後れても差支なけれど既に俳句雜誌杯と天下を相手に呼號する以上は主幹たる人は一日も發行期日を誤らざる事肝要かと存候それも一日や二日なら兎「に」角十日二十日後れるに至つては殆んど公等が氣に向いた時は發行しいやな時はよす慰み半分の雜誌としか受取れぬ次第に候尤是には色々な事情も可有之又御陳述の如く期日の後れたる爲め每號改良の點も可有之とは存じ候へども門外漢より無遠慮に評し候へば頗る無責任なる雜誌としか思はれず候現今俳熱頗る高き故唯一の雜誌たる「ほと、ぎす」はかく無責任なるにも不關賣口よき次第なるべけれど若し有力な競争者出でば之を壓倒する事固より難きにあらざるべし假令有力なる競争者が出來得ざるにせよ敵なき故に怠る様に見えるは猶更見苦しく存候

次に述べたきは「ほと、ぎす」中にはまゝ樂屋落の様な事を書かれる事あり是も同人間の私の雜誌なら兎に角苟も天下を相手にする以上は二三東京の俳友以外には分らず随つて興味なき事は削られては如何加之品格が下る様な感じ致候高見如何虚子露月が俳人に重ぜらるゝは俳道に深きが爲め其秋風たると春風たるとに關係なきなり天下の人が虚子露月を知らんとするは句の上であり「頗をかむ」の「顔をなめる」のと愚にもつかぬ事を聞いて何にかせんや方今は「ほと、ぎす」派全盛の時代也然し吾人の生涯中尤も謹慎すべきは全盛の時代に存す如何

子規は病んで床上にあり之に向つて理窟を述べべからず大兄と小生とはかゝる亂暴な言を申す親みは無
き筈に候苦言を呈せんとして逡巡するもの三たび遂に決意して卑辭を左右に呈し候是も雜誌の爲めよかれ
かしと願ふ微意に外ならざれば不惡御推讀願上候 以上

十二月十一日

虚子様

漱石

横顔の歌舞伎に似たる火鉢哉

炭團いけて雪隠詰の工夫哉

御家人の安火を抱くや後風土記

追分で引き剥がれたる寒かな

正

七九

明治三十二年 月日不詳 十二月頃 土屋忠治へ

貴翰拜見致候銀行の件委細承知致候右は卒業後大分の社に入りて従事するといふ條件の如く聞え申候然
らば其年限はどの位に候や

若し過重の義務と不當の束縛ありて忍び難き程ならば出来る丈他の方法を講ずる方可然か

小生目下の状況にては月々五六圓の金は送る事出来るべし其上に山川狩野二氏に依頼して月々二圓宛も

もらへば十圓の金は手に入るべし假に中根に寄食するとせば其位にて行き立つやも知れず是も一策ならん
(狩野山川二氏共貧の方なれど君の學資に關して幾分か補助の意あるは在熊中明言されたる事あり若し
此策をとるならば小生より懸合て見るべし)

〔以下巻紙切れて缺〕

兎も角も手紙にては巨細の事は述べ難し狩野山川菅三先生の意見など聞きたる上にて御分別あるべし

〔以下巻紙切れて缺〕

八〇

明治三十三年四月五日 本便 熊本市北千反畑より愛媛縣温泉郡今出町村上平太郎氏へ 〔はがき〕

御書拜見近頃は發句廢業駄句もなにも皆無に候今般表面の處へ轉寓致候間一寸御傳申上候

鶯も柳も青き住居哉

菜の花の隣ありけり竹の垣

四月五日

八一

明治三十三年九月六日 手便 牛込區矢來町三番地中ノ丸六六十號中根氏方より本郷區駒込西片町十番地イの十六號寺田寅彦へ 〔はがき〕

小生出發は瀛船出發の時刻變更の爲め午前五時四十五分ノ瀛車と相成べくと存候是も正確ならず御見送
御無用に候

秋風の一人をふくや海の上

八二

明治三十三年九月十日 汽船プロイセン號より牛込區矢來町三番地中ノ丸内六十號中根重一氏へ
 拜啓横濱解纜ノ際ハ罷御見送被下難有存候初日ノ航海ハ氣分あしく晚餐ヲ食ハズ臥床致候乗合ハ英人ヤ
 ラ佛人ヤラニテ既ニ洋行シタル感有之神戸ニテ上陸諏訪山温泉ニテ日本料理ヲ食ヒ日本ノ浴衣ヲ着タル爲
 メ漸ク歸朝致候様ノ感ニ存候此先ハ漸々西洋クサクナル許ト存候神戸ノ時間クルヒタル爲メ鈴木君に面會
 ナ得ズ行違ニテ甚だ残念ニ存候今日午後五時頃ハ長崎へ到着ノ筈其時ハ又上陸散步デモスル積ニ候
 船中ハ只少々窮窟ナルト風波アルノミニテ他ハ凡テ我々ノ生活ヨリハ遙ニ上等ニ候朝起キルト直グニ茶
 ナ飲マセ八時頃ニ至リ朝飯ヲ出シ十二時ニ晝飯三時ニ茶ヲ出シ六時ニ晚餐九時頃又茶ト云フ譯デ都合一日
 ニ六回ノ御馳走ニ候米ツキデモ四度〔ニ〕候普通ノ我々ハ到底六回マルコトハ出來ニク、候
 先ハ無事御報知迄 匆々頓首
 九月十日午前十一時奏樂ヲ聞キナガラ

中 根 様

プロイセン喫烟室ニテ

金之助

母上様倫、梅、其他ノ人々へモヨロシク願上候

此手紙鏡へモ御示シ被下度候

〔裏に〕

湯淺、土屋、俣野へ宜敷願上候

留守中區役所其他ノ用事ハ湯淺カ土屋へ御依頼可被成候

鏡 どの

金之助

八三

明治三十三年九月十九日 濱國香港より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕
 航海は無事に此處まで參候へども下痢と船酔にて大閉口に候昨今は大に元氣恢復唐人と洋食と西洋の風
 呂と西洋の便所にて窮窟千萬一向面白からず早く茶漬と蕎麥が食度候〔中略〕熱くて閉口、二十日には
 上海邊にて出逢申候

阿呆鳥熱き國にぞ参りたる

稻妻の碎けて青し海の上

〔はら、きす〕第三卷第十二號より轉載〕

八四

明治三十三年九月二十七日 汽船プロイセン號より牛込區矢來町三番地中ノ丸内六十號中根氏方夏目鏡へ
 今日ハ九月二十七日ニテ吾等ガ乗レル船ハ味爽英領「ペナン」ト申ス港ニ着キ申候未明ヨリノ小雨ニ加
 フルニ出帆時刻ハ午前九時ナレバ遺憾ナガラ上陸ヲ得ズ上海ニテハ日本旅館ニ宿泊シ香港ニテモ同朋ノ營
 業ニ關ル宿屋ニテ日本飯ノ食納ヲナシ候上海モ香港モ宏大ニテ立派ナルコトハ到底横濱神戸ノ比ニハ無之特
 に香港ノ夜景杯ハ滿山ニ夜光ノ寶石ヲ無數ニ縷メタルガ如クニ候又「ピーク」トテ山ノ絶頂迄鐵道車ノ便

ヲ假リテ六七十度ノ峻坂ヲ上リテ四方ヲ見渡セバ其景色ノ佳ナルヲ實ニ愉快ニ候「シンガポア」ニモ上陸シ馬車ヲ假リテ植物園博物館及市街ヲ一見致候茲ニモ日本ノ旅館アリテ午食ヲ認メ候此地ノ日本人ノ多數ハ醜業婦ニテ印度ノ腰巻ニ綿チリメンノ羽織ニ一種特別ナ下駄杯ヲ穿キテ街上ヲ散步致候一種奇的烈ノ感ヲ起サシメ候熱帶地方ノ植物ハ名前ノミヲ承知致候ガ來テ見レバ今更ノ如ク其青々ト繁茂セル様ニ驚カレ候熱帶地方ト申セバ太陽直下ノ光線ニテ身體モ焦ゲル位ノ熱サト想像致候處實際ハ豈計ランヤデ却ツテ日本ノ夏ヨリモ涼シキ位ニ候但春夏秋冬ニ寒暖ノ區別ナキノミト御承知可被下候此邊ニテ見ル印度人ハ佛畫ニ見ル阿羅漢丸出シニテ其服裝顏色遙カニ日本人ヨリハ雅ニ御座候色ノ尤モ黒キハ紫檀位ニテ且其光澤ノ美ナルヲモ殆ンド紫檀ニ仿佛タル者之アリ候「シンガポア」ニテハ碇泊中船ノ周圍ニ幾十艘ノ丸木舟ヲ漕ギ寄セテ口々ニ分ラヌヲワメキ候様面白ク候是ハ船客ヨリ銀貨銅貨ヲ海中ニ投ゲロト申ス譯ニテ甲板上ヨリ慰半分ニ投ゲル貨幣ヲ海中ニモグリテ取りテ上ガルニ百ニ一モ過タズ感心ナリ候

皆御變リナキト存候其許モ筆モ達者ト存候月々ノ俸給ハ固ヨリ些少ナレモシ餘アラバ幾分ニテモ家賃トシテ御納可被成候夏目ヘハ事情ヲ善ク申シ遣ハシ候間都合次第ニテヨロシク候

小生ノ着物羽織等ハ留守中ノ寸法ノ合フ様縫直シ可被成候

其許ハ齒ヲ抜キテ入齒ヲナサルベク候只今ノ儘ニテハ餘リ見苦ク候

頭ノハゲルノモ毎々申通一種ノ病氣ニ違ナク候必ズ醫者ニ見テ御賞可被成候人ノ言フヲ善ヒ加減ニ聞テハイケマセン

食物ノ急ニ變化シタルト氣候アツキト運動不足ト船ノキラヒナトガ合併シテ消化機能兎角働キ方面白カラズ目ハ餘程クボミ申候其割ニ身體ハ左ノミヤセ不申候

此手紙ハコロソボト申ス處ニ着テヨリ出スベケレバ日本ニ二三週間位ノ後ニ達スベシト存候

鏡 どの

金之助

八五

明治三十三年十月八日 汽船プロイセン號より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ

今日ハ十月八日ニテ横濱ヲ出發シテヨリ鳥渡一月目ナリ一週間許前ニコロンボト申ス處ニ碇泊是ハセロソノ港ニテ「セロン」ハ釋迦ノ誕生地ナリ此地ニ來リテ見レバ李龍眠ノ佛畫ニアリソウナ印度人ノミ「ニ」テ頗ル雅ニ候

熱帶地方ノ植物ノ見事ナル事ハ今更ノ様ニ驚かれ候「ココ」 「バナナ」杯ノ熟シタル木ノ枝ニ見タルハ實ニ面白ク候佛敎ノ寺院ニ參詣致候是ハ海ヨリ三里許リ田舎に有之結構杯幼稚ニテ見るに足らず只古跡ト申迄に候舍利塔は今も存在致居候

昨夜は名月にて波も風もなく十二時近く迄甲板に逍遙致候今日ハ「エーデン」と申す處に着スル筈に候是ヨリ紅海ニテ砂漠ノ熱キ風が吹ク來る中を通りて地中海に出る事に候兎角する内には英吉利に着可致思へば長き様な短かきものに候

毎々ながら西洋食には厭々致候且海岸は小生の性に適せざる事とて横濱出帆以來眼が餘程くほみ申候然し別段の病氣もなく先々無事なれば御安堵可被下候

熊本にて逢ひたる英國の老婦人「ノット」と申す人上等に乗込居りて一二度面會色々親切に致し吳候此人の世話にて「ケンブリッジ」大學に關係の人に紹介狀を得候へば小生は多分「ケンブリッジ」に可參かと存候

筆は其後丈夫に相成候や随分御氣をつけ可被下候
留守中とて無暗に寐坊被成間敷候

中等船客は五十名以上有之非常に賑かに候小生は別に啻相手もなく黙然として居候

髪は丸鬘銀杏返杯に結ばざる方よろしく洗髪にして御置可被成候

西洋人ノ子供澤山居候奇麗にて清潔なる事は日本人の比に無之衣服も至極輕便にて羨敷存候

船中は毎日入浴も出来よこれ物の洗濯も出来御馳走も食へ下等宿杯よりも遙かに上等の生活と存候然し寐室の窮窟にて風通のあしきは閉口致候

印度洋は日本の夏よりも餘程涼しく候且風波も至極穩に候

雲の峯風なき海を渡りけり

御地にては漸々秋冷の候に可相成候へば随分御身御厭なさるべく候

皆々へよろしく

時さんの呉れた萬年筆は船中にて鐵棒へツカマツて器械體操をなしたる爲め打ち壞し申候洵に申譯無之御序の節よろしく御傳可被下候

十月八日

金之助

鏡との

小生への書信其他は凡て在倫敦日本公使館宛にて御出可被成候

明治三十三年十月二十三日 佛蘭西巴里より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏百鏡へ

紅海ノ熱ノ非常ナルニ引キ易ヘテ地中海ニ入レバ既ニ日本ト同ジ氣候ニ候 Naples ト申ス所ニ碇泊中上陸ノ上博物館等ヲ一見是ハ「ボンベイ」ヨリ掘出シタル種々ノ古物ヲ蒐集セル見事ノモノニ候夫ヨリ Genova ニテ船ヲ棄テ、上陸其地ニ一泊以太利ノ小都會ナルニモ關セズ頗ル立派ニテ日本杯ノ比ニアラズ殊ニ Pias ノ寺院等ノ内部ノ構造ハ來テ見テバ分リ兼候馬車ニテ見物致候が半分ハ見物サセニ歩行ク様「ナ」モノニ候皆々奇體ナ奴ダト云ハヌ許リニ見返候「ゼノア」ヨリ氣車ニテ「パリス」ニ十月二十一日（昨朝）到着氣車杯ノ雜沓混雜馴レヌ我々ハ「マゴマゴ」シテ途方ニ吳レル許リナリ金ノ力ニ頼リテ夢中ニ「パリス」迄「タドリ」ツキ候が目付ものに候「パリス」ニ來テ見レバ其繁華ナルヲ是亦到底筆紙ノ及ブ所ニ無之就中道路家屋等ノ宏大ナルヲ馬車電氣鐵道地下鐵道等ノ網ノ如クナル有様寔ニ世界ノ大都に御座候昨日ハ停車場ニ荷物受取ノ爲メ參リ夫ヨリアル素人屋（宿屋ハ高クテ居ラレズ）ノ三階ヲ借り一週間滞在ノ積ニ候食事ハ三度三度外へ出テ認メ候夫デモ一日ノ費用七八圓ヲ下ラズト存候今日ハ博覽會ヲ見物致候が大仕掛ニテ何ガ何ヤラ一向方角サヘ分リ兼候名高キ「エフェル」塔ノ上ニ登リテ四方ヲ見渡シ申候是ハ三百メートルノ高サニテ人間ヲ箱ニ入レテ綱條ニ「テ」ツルシ上ゲツルシ下ス仕掛ニ候博覽會ハ十日や十五日見ニモ大勢ヲ知ルガ積ノ山カト存候只今年後十二時迄「パリス」ノグロン ヴルヴハート申ス繁華ナ處ヲ散步シテ地下鐵道ニテ歸宅致候斯様ニシルシ候ト何モカモ自分デヤツタ様ナレバ「パリス」ニテハ文部ノ書記官渡邊董之助ト申ス人ノ世話デ歩行キ廻リ候「ゼノア」カラ「パリス」迄ハ全ク金ノ力デ通り候言語ノ通ゼメ容子ノ分ラヌ所程不便ナモノハ無之歐洲上陸以來自動的ニ何モナシタルヲナク悉皆他動的ニ候惡

者ガ田舎モノヲ瞞スノモ最ト存候意外ノ失策ナク「パリス」迄參候が不思議ニ候此位ナラ謠ヲヤラズニ佛語ヲ勉強スレバ善カツタト今更不覺ヲ後悔致候是ヨリハ一人ニテ英京ニ渡ル事故ドウナルカ妙ナモノニ候當地ニ來テ觀レバ男女共色白ク服装モ立派ニテ日本人ハ成程黄色ニ觀エ候女杯ハクダラヌ下女ノ如キ者デモ中々別嬪有之候小生如キアバタ面ハ一人モ無之候

其他大分書キタキ事有之候ヘドモ疲勞致候故擱筆後ハ英國ヨリ發信致候中根皆々様ヘヨロシク其他ノ人ヘモヨロシク

當地ハ中々寒ク冬ノ外套ヲツケテ手袋ヲハメテ歩行キ候身體ハ別段ノ事モ無之候御安意可被下候其許懐妊中善々身體ヲ大事ニ可被成候筆モ隨分氣ヲ付ケテ御養育可被成候妊娠中ハ感情ヲ刺激スル様ナ小説杯ハ御止メ可被成候可成ノンキに御暮シ可被成候

入齒ノ事御實行可被成候丸鬚杯ニハ結ハヌガヨロシク候洗髮可然候

十月二十二日午後一時

金之助

鏡 どの

小生洋服ハ東京ニテ作り來リ好都合ニ候是ナラバ「ガラ」モ仕立モ別ニ耻カシキヲナク用ラレ候太キシマ「ハデ」ナ色ノモノナドハ着テ居ル者無之皆「クスン」ダ無地下降類ニ候就中外套ハ大概黒カ紺ニ候茶ハ餘程少ナク鼠モ稀ニ見受候其他ハ一切無之候
歐洲ニ來テ金ガナケレバ一日モ居ル氣ニハナラズ候穢クテモ日本ガ氣樂デ宜敷候

明治三十三年十月三十日 76 Gower Street, London より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ

拜啓其後無恙消光致居候其許も筆も定めて丈夫の事と安心致居候可成養生して御安産可被成候

小生昨二十八日朝十日巴理發同夜七時頃倫敦に着致候博覽會も餘り大にて一週間位では何が何やら見當がつかぬ位に候倫敦も今日出で見たれども見當がつかず二十返位道を聞て漸く寓居に還り候未だ公使館へは參らず留學地も其内定めて落付つもりに候

公使館への手紙は

K. Natsume Esq.

Japanese Legation

(Crosvenor Garden)

London

にて届き可申候西洋にては金が氣がヒケル程入候留學費でどうしてやるか問題に候町杯へ出れば普通の人間は皆日本の勅任官位な身ナリをして歩行致居候洋行生が洒落るのは尤に候是が當地にては普通の事に候

詳しく手紙は何「れ」落付てより可差上候 以上

皆様へよろしく

十月二十九日夜一時

金之助

明日は十時頃迄寝る積に候

〔裏に〕

小生只今の宿所は日本人の下宿する所にて 76 Gower Street, London に候是は旅屋より遙かに安直なれども一日に部屋食料等にて六圓許を要し候到底留學費を丸で費ても足らぬ故早くきり上る積に候

八八

明治三十三年十一月二十日 午後零時十五分 85 Priory Road, West Hampstead, London 49 Bei Frau Lenke, Melancktonstrasse

28. Berlin 藤代頼輔氏〔近衛騎兵兵營繪はがき〕

ナシノ礫の御小言ニハ少々恐縮シタガ君ダツテ一杯機嫌デナケレバ葉書杯ハカクマイ此前ノ葉書ハ立花ガヨコシタノデハナイカ

倫敦原ノ天氣ノ惡〔イ〕ニハ閉口シタヨ君等ハ大ゼイ寄ツテ御全盛ダネ僕ハ獨リボツチデ淋イヨ學校ノ講義ナンカ餘リ下サラナイヨ伯林大學ハドウカネ英語モ中々上手ニハナレナイ第一先方ノ言フ事ガハツキリ分ラナイヲガアルカラナ金ガナイカラ倫敦ノ事情モ頓ト知レナイ勉強モスル積ダガソウハ手ガ廻ラナイ獨乙皇帝ハ婆サンノ鐵椎ニ遭ツタソウダ丁度博浪ノ椎ト云フ趣ガアル面白イ今日ビスケットヲカヂツテ晝飯ノ代リニシタ餘リビールヲ飲ンデハイケナイヨ左様ナラ

十一月二十一日

夏目金

萬一手紙ヲ出スナラ公使館ニアテテ吳玉ヘ一番慥カト思フ

倫敦ノ古本屋ニハ欲イ本ガ澤山アリマス一冊モ御齒ニ合フ者ハアリマセン

此繪葉書ノ處ハ僕ガ到着ノ翌日マゴツイタ處ダヨ

八九

明治三十三年十一月二十六日 6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. 4リ牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡ノ

拜啓十一月十七日附の御書面昨十二月二十五日着拜見致候先以て皆々様時候の御變りもなく御消光のよし奉賀候其許も無事に御暮しのよし珍重に存候當地着以來二回書狀差出し候只今頃は最早御地着の事と存候其後都合有之 6 Flodden Road, Camberwell New Road, S. E. と申す所に轉居致候以前の處は東京の小石川の如き處に存候今度の處は深川と云ふ様な何れも邊鄙な處に候即ち北西ヨリ南東に轉居致候日本にて三里許りの道のり有之馬車を傭ひて書物を載せて宿替隨分厄介なれど日本の書生の如くランプを手に持つ様な不體裁は無之候此度の家は先頃迄女學校なりし處傳染病の爲め閉校其後下宿と變化致候主人夫婦と妻君の妹にてやり居候下宿にしては女學校の女先生丈ありて上品に候色々親切にて家族の如く致し居候同宿のもの日本人少々有之候主人は頗る日本人好にて西洋人を下宿させるよりは日本人を客にしたしと申居候是は日本人はおとなしく且金にやかましくらぬ故に候もとの高等學校教授(我々の先生)に〔て〕國文學の先生池邊義象(もとの小中村義象)氏バリより來り此宿にて邂逅同氏歸朝の節は福本氏方へ參る故中根方へも立寄り小生の近況を話してやると申し居られ候故其内爲參候事と存候間可然御取持可被成候筆への見やけものに「クリスマス」の「カード」依頼致候筈の處混雜の際失念致候

當地にては金のないのと病氣になるのが一番心細く候病氣は歸朝迄は謝絶する積なれど金のなきには閉口致候日本の五十錢は當地にて殆んど十錢か二十錢位の資格に候十圓位の金は二三回まばたきをするとなり申候今度の下宿は頗るきたなく候へども安直故辛防致居候可成衣食を節して書物丈でも買へる丈買はんと存候故非常にくるしく候殊に留學生は少なく逗留のものは官吏商人にて皆小生杯よりは金廻りのよき連中のみ羨ましき事はなけれど入らぬ地獄杯に金を使ひ或は無益の遊興贅澤品に浮身をやつし居候事惜しき心地致候彼等の金力あれば相應に必要な書籍も買ひ得られ候事と存候其許も二十圓位にては定めし困難と存候へども此方の事も御考御辛防可被成候

中根父上の方へ借金出来候よし是は少々之事と存候もし少にても(一圓でも二圓でも)餘り候へば其方へ御廻し被下度候中根父上地方局長とかに御轉任のよし政海の事は我等には分り不申候へども御目出度き方の轉任と存候

昨日は當地の「クリスマス」にて日本の元日の如く頗る大事の日に候青き終にて室内を裝飾し家族のもの皆其本家に聚り晚餐を喫する例に御座候昨日は下宿にて「アヒル」の御馳走に相成候

湯淺土屋侯野時々参り候よしよく御あしらひ可被成候

筆も丈夫に相成候よし何より結構の事に候可成我儘にならぬ様あまへぬ様可愛がりて無暗にあまき物杯やらぬ様無暗にすはらして足部の發達を妨げぬ様御注意可被成候是等は一時に害なき様なれども將來恐るべき弊害を生じ一生の痼疾と相成申候小兒の教育程困難なる物は無之精々御心配願上候

熊本にて一ペン尋ね候西洋人の婆さん「ノット」夫人に不圖長崎より連になり夫より以後色々親切なる注意にあづかり今以て時々書狀の往復を致居候もし櫻井の妻君へでも書狀をだる序あらば「フアーデル」に頼みて右婆さんの娘「ノット」嬢(熊本在の宣教師)へよろしく御傳言可被下候

時々書面も八方へ差上度候へども一刻もむだな時間は無之可成有益に時を使度と存候故其ひまも無不惡御推察鈴木夏目其他へもよろしく御傳言頼み上候

倫敦の繁昌は目撃せねば分り兼候位馬車、鐵道、電鐵、地下鐵、地下電鐵等蛛の糸をはりたる如くにてなれぬものは屢ば迷ひ途方もなき處へつれて行れ候事有之險呑に候小生下宿より繁華な處へ行くには馬車地下電氣高架鐵、鐵道馬車、の便有之候へども處々方々へ参り候故時々見當違の處へ参る事有之候

倫敦の中央にては日本人杯を珍らしそうに顧りみるもの一人も無之皆非常に自身の事のみ之急がしき有様に候さすが世界の大都會文有之候

只天氣のわるきには閉口晴天は着後數へる程しか無之しかも日本晴と云ふ様な透きとほる様な空は到底見る事困難に候もし霧起るとあれば日中にも暗夜同然ガスをつけ用を足し候不愉快此上もなく候

當地のもの一般に公德に富み候は感心の至り氣車杯にても席なくて佇立して居れば下等な人足の様なものでも席を分つて譲り申候日本では一人で二人前の席を領して大得意なる愚物も有之候又種々の買物でも盗んで出様とすればいくらでも盗める様なもの有之古本の如きは窓外に陳列して番人も何もなき處有之候鐵道の荷物杯も「ブラットフォーム」に抛り出してあるを各自勝手に持つて参り候日本で小利口な物どもが氣車を只乗つたとか一錢だして鐵道馬車を二區乗つたとか縁日で植木をごまかしたとか不徳な事をして得意がる馬鹿物澤山有之候是等の輩を少々連れて來て見せてやり度候

まだ書けばいくらも有之候へども時なき故擱筆新年の御慶皆様へよろしく

中根様へも書狀差上る筈なれど此回は此書狀をかねて失禮致候不惡御宥恕ある様御取なし可被下候

十二月二十六日

九〇

明治三十三年十二月二十七日 午前零時十五分 6 Plodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. 4s Bel Frau Lenke, Melanchtonstrasse 28, Berlin 藤代直輔氏〔繪はがき〕

先日の御手紙拜見「コーチ」と云ふのは書生間の語で private な先生の事を云ふのだよ僕の「コーチ」は「シエクスピヤ」學者で頗る妙な男だ四十五歳位で獨身もので天井裏に住んで書物ばかり讀んで居る今は「シエクスピヤ」字引を編纂中である

二年居つても到底英語は目立つ程上達シナイと思ふから一年分の學費を頂戴して書物を買つて歸りたい書物は欲いのが澤山あるけれど一寸目ほしいのは三四十圓以上だから手のつけ様がない可成衣食を節儉して書物を買「は」ふと思ふ金廻りのよき連中が贅澤をするのを見ると惜き心持がする

御地の「クリスマス」は如何僕は「アヒル」の御馳走になつた
僕は東京でいふと小石川といふ様な處から深川といふ邊へ宿替をした倫敦原の廣いのは驚く原流車杯を間違へて飛んでもなき處へ持つて行かれる事がある

會話は一口話より出来ない「ロンドン」兒の言語はワカラナイ閉口
十二月二十六日

金之助

藤代君

九一

明治三十四年一月一日 午後三時半 6 Plodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. 4s 牛込區府町五十四番地夏目直矩氏〔繪はがき〕

新年の御慶目出度申納候貴家御一同萬福御越年の事と存候小生無恙加馬齡候御安意可被下候平生は多忙の爲め御無沙汰御海恕可被下候

三十四年一月一日

金之助

夏目直矩様
高田庄吉様

九二

明治三十四年一月三日 午前十一時三十分 6 Plodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. 4s 在獨〇〇〇〇〇氏〇〇〇

下宿の不平は僕も大有だつたが一週二十五志の場所を見出して汚い處に籠城して居る只今は頗る愉快だ
下宿は方々尋ねて歩いたが日本人のふるく居る處は皆「スポイル」して仕舞つて高くて悪い様だ
餘りビールを飲まない様餘り美人に近付の出來ぬ様天帝に祈禱して新年の御慶を申上ます
僕は書物を買つて仕舞ふから又邊鄙な處に居るから家がやかましいから金と不便と遠慮がハチ合せをし
て頗る謹直である

倫敦原に遊びにこられるなら僕の處へき給へ安い事は受合いだ

一月三日

金之助

〇〇〇

九三

明治三十四年一月二十二日 夜 6 Plodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. 14 谷込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方

夏目鏡へ「薄葉に筆にて認めあり」

其後は如何御暮し被成候や朝夕案じ暮し居候先以て皆々様御丈夫の事と存候其許も御壯健にて今頃は定めし御安産の事と存候此方も無事にて日々勉強に餘念なく候御懸念あるまじく候小兒出産前後は取分け御注意可然と存候當地冬の季候極めてあしく霧ふかきときは濛々として月夜よりもくらく不愉快千萬に候はやく日本に歸りて光風霽月と青天白日を見たく候當地日本人はあまた有之候へども交際すれば時間も損あり且金力にも關する故可成獨居讀書にふけり居候幸ひ若以後一回も風をひかず何より難有候近頃少々腹工合あしく候へども是とて別段の事には無之どうか留學中には病氣にかゝるまじくと祈願致居候

倫敦の市内を散歩すればほしき物澤山有之國へ歸るとき見やけものにしたきものも非常に多く候へども如何にせん微力にて一向買ふ事出来ず故に散歩のときは場末の田舎のみあるき居候

先年熊本にて筆と御寫し被成候寫真一枚^取序の節御送り可被下候厚き板紙の間に挟み二枚絲にてくゝり郵便に御投じ可被下候當地は十圓位出さねば寫真もとる事出来ず候故小生は當分送りがたく候

他國にて獨り居る事は日本にても不自由に候況んや風俗習慣の異なる英國にては随分厄介に候朝起きて冷水にて身を拭ひ髻をそり髪をけづるのみにても中々時間のとれるものに候況んや白シャツを着換へボタ

ンをはづし杯する實にいやになり申候西洋人との交際別段機會も無之且時間と金なき故可成致さぬ様に致居候

當地の品物は高き代りに皆丈夫向に候中にも男子の洋服は「パリス」よりも倫敦がよろしき由成程結構に候小生も當地にて「フロック」と燕尾服を作り候是は日蔭町の如き所故無論極粗末なものに候其上「フロック」は出来損ひ申候是は漸く旅費の餘で調へ申候然るに「フロック」の袖口廣く外套の袖狭く大に困難致居候此地に居る日本人の内には人より三四月前に來りながら倫敦通をきめて新來の日本人の服裝杯を冷かし申候其癖當人の洋服は頗る妙なのを着て得意がつて居候是は洋服屋にだまされて無暗に高き金をとられ自分は人よりも高き金を拂つた故品物も仕立も人より遙かに上等と心得居る如き愚物に候

此地にて物價の高きは一寸靴一足を買ひ候ても十圓位はかゝり候にて御推了被下度候毛織物は割合安く候襟等は非常に白く堅く到底日本のは比較になり兼候外に出た時一寸晝飯を一皿位食へばすぐ六七十錢はかゝり候日本の一圓と當地の十圓位な相場かと存候随つて知らず／＼の中に贅澤になり申候洋行生が日本に歸りて贅澤と思はるゝは尤もと存候是はあながち贅澤には無之當地にて普通以下の事を日本ですれば頗る贅澤と見做さるゝ迄に候

氣候は随分寒き事有之候へども概して東京よりは凌ぎよく此二三日は春の如き心地致候位それも例年此通なるや分り兼候東京は嘸寒き事と存候正月の様な心持は少しもなく候

芝居には三四度参り候いづれも場内を赤きビロードにて敷きつめ見事なる事たまける許りに候道具衣裳の美なる事亦人目を驚かし候中にも寄席芝居の様なものには五六十人の女翻々たる舞衣をつけて入り亂れて躍り候様皆に見せ度程かつくしく候其中此女がフワ／＼と宙に飛び上り（ハリガネの仕掛にて）て其女の頭胸手杯に電氣燈がツキ夫に輕羅と寶石が映すると云ふ譯だから想像しても美いと思ふだらう然し眞面目

な芝居に善き席にて見物せんとするには燕尾服をつけ白襟ならざるべからず喫烟は無論出来ず頗る窮窮（原）に候小生はセビロ赤靴にて飛び込み大に閉口したる事有之候

當地の商人紳士少し身分あるものは平生必ず「フロック」に絹帽をいたゞき候中にはクツ屋から貰た様な「シルク」帽を蒙りヘンテコな「フロック」を着て居るのも有之御羽うち枯した浪人と申す位な處なるべし男子服装は頗るデミにてせびろも黒多くゾボン縞あれども黒ズミで遠方から見れば無地と思ふ様なものゝみに候中以下は夏冬同じものをつけ居候由少し上等になれば晩には必ず燕尾服に着換て食事をなす風に候燕尾服は必ず晩の禮服ときまり居候葬儀結婚等の大禮にても日中執行するものは必ず「フロック」を用い申候「フロック」を着ても燕尾服をつけてもつけばいの致さぬは日本人に候日本に居る内はかく迄黄色とは思はざりしが當地にきて見ると自ら己れの黄色なるに愛想をつかし申候其上脊が低く見られた物には無之非常に肩身が狭く候向ふから妙な奴が來たと思ふと自分の影が大きな鏡に寫つて居つたり杯する事毎々有之候顔の造作は致し方なしとして脊丈は大きくなり度小兒は可成椅子に腰をかけさせて坐らせぬがよからんと存候尤長く當地に居る人は大抵奇麗にてどこか垢ぬけ致居候へども脊丈は十年居つても高くなる事は御座なく閉口の至に候往來にて自分より脊の低き西洋人に逢つた時は餘程愉快に候然し大抵の女は小生より高く候恐縮の外無之候

住みなれぬ處は何となくいやなものに候其上金がないときた日にはニツチもサツチも方が就かぬ次第に候下宿に籠城して勉強するより致方なく外へ出ると遂金（原）を使ふ恐有るものに候
筆は定めし成人致し候事と存候時々は模様御知らせ可被下候少し歩行く様になると危儉（原）なものに候けがなき様御注意可被下候

鈴木禎さんへは一向手紙も上げず失禮ばかりして居る序の節よろしく云ふて下さい

手紙も再々上げたいが時を使ふのが惜いからあまり書かない其積りで居（原）下さい御手紙はいつでも公使館宛で御出可被成下宿は只今の處より移らぬ積なれど換えぬとも限らぬ事に候高濱よりほとゞぎすを贈つて吳申候着後既に三冊もらひ候
産後の経過よろしく丈夫になり候へば入齒をなさい金がなければ御父ツさんから借りてもなさい歸つてから返して上ます髪杯は結はぬ方が毛の爲め腦の爲よろしいオードキニンといふ水がある是はふけのたまらない薬だやつて御覽はけがとまるかも知れない
餘り長くかくと時がつぶれるから此位にして置く

三十四年一月二十二日夜

金之助

鏡 どの

此方へ郵便を出すには郵便日といふのが極つて居る今年中の表が出来て居て横濱を何月何日に何船が出て「アメリカ」若くは印度を通つていつ倫敦につくといふ日取が分る此表は多分郵船會社か何かでくれるであらふから御貰ひなさい「アメリカ」便の方が二週間許り早く吳狀装（原）の左の上の端に Via America とかけばアメリカ便でくる

九四

明治三十四年一月二十四日 夜 6 Plodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. 4 牛込區大塚町三番地中ノ丸申根氏方

夏目鏡く 【薄葉に筆にて認むるべし】

昨日久々にて一書相認め郵筒に附し候處今日御地十二月二十一日付の書翰到着皆々無事のよし承知大慶
此事に御座候

小兒出産後命名の件承知致候是は中根爺様の御つけ被下る事と合認して何とも申し遣はさず打絶申候名
前も考へると無づかしきものに候へどもどうせいゝ加減の記號故簡略にて分りやすく間違のなき様な名を
つければよろしく候今度の小兒男兒なれば直一とか何とか御つけ可被成候是は家の人が皆直の字がついて
居る故なり又代輔でもよろしく是は死んだ兄の幼名なり或は親が留守だから家の留守居をする即ち門を衛
ると云ふので衛門杯は少々洒落て居るがどうだね門を衛るでは犬の様で厭なら御止し己と御前の中に出來
た子だからどうせ無口な奴に違ひないから夏目黙杯は乙だらう夫とも子供の名前丈でも金持然としたけ
れば夏目富がよからう但し親が金之助でも此通り貧乏だからあたらない事は受合だ女の子なら春生れだか
ら御春さんでいゝね待父の上ノ一字ヅ、を取つてマチ即ち町は如何ですか己の御袋の名は千枝といつ
たこいつは少々古風で御殿女中然として居るな姉が筆だから妹は墨としたら理窟ボーイかな二字名がよけれ
ば雪江、浪江、花野なんて云ふのがあるよ千鳥鷗とくると鳥に縁が近くなるし八つ橋、夕霧杯となると女
郎の名の様だからよしたがよからうまあ、何でも異議は申し立んから中根のおやぢと御袋に相談してき
めるさ

入齒の事承知俣野湯淺土屋へは無沙汰をして居るよろしく言つて御呉れたまに來たら燒芋でも食はして
やるがいゝ菅の奥さんが來たら是亦よろしくだ菅へも狩野へも一返も手紙をやらないよ
此手紙と前便とは一所に届くだらう此土曜が郵便日だから

二十四日夜

金

鏡 どの

御梅さんは脊が高くなつたかね御豊さん、たけさん、倫さん皆さんへよろしく倫さんは勉強するか
い近頃はどんな様子かね

九五

明治三十四年二月五日 6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より在獨ニ〇〇〇〇氏へ

所謂難關説は承はつた時は左程でもなかつたが昨今は大に名説だと思つて感服仕るね第一無精極まる僕
が妻の處へ丈は一月に一返位便りをするから奇特だらうあんな御多角顔でも歸たら少々大事にしてやらう
と思ふよ僕は書物を買ふより外には此地に於て樂なした僕の下宿杯と來たら風が通る暖爐が少し破損して
居る憐れ憫然なもんだねかういふ所に辛防しないと本杯は一冊も買へないから先達文部省へ申報書を
出した時最後の要件と云ふ箇條の下に學資輕少にして修學に便ならずと書てやつた僕はまだ一回も地獄杯
は買はない考ると勿體なくて買った義理ではない〇〇が聞たらケチな奴だと笑ふだらう西洋人と交際もしな
い廣く交るには紹介も必要だし衣服其他もチャンとしなければならず馬車も奢らねばならず第一時間を浪
費して而して「シンミリ」した話は出來ないからねあまり難有い事はないよ大學も此正月から御免蒙つた
往復の時間と待合せの時間と教師のいふ事と三つを合して考へて見ると行「く」のは愚だよ夫に月謝杯を
拂ふなら猶々愚だ夫で書物を買ふ方が好い然も其 Point がいけすかない奴と來たら猶々愚だよ君はよく
六時間なんて出席するね感心の至だ僕のコーチも頗る愚だが少しは取る處ありでは是丈はよさずに通學して
居る system も何もなくて口から出まかせを夫から夫へとシヤべる奴だよ君は病氣だつたつてね大事にし

一一九

給へ美人を封じられて轉た郷愁を惹くと云ふ譯なら封じられない前は思ひやられるね、せつばつまらなけれは不品行杯はよすがい、其方が上品でもあり經濟でもあり時間も徳であるからね僕は幸ひ無事だ安心して吳給へ友達がなくて淋い倫敦へ遊びに來ないか立花も病氣だつてね加愛相^原によろしくいつて吳給へ神田男爵はどうだね君も少しはシャルル様になつたらう以下次號

二月五日

金之助

〇〇〇

九六

明治三十四年二月九日 朝 6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より東京狩野亭首、大塚保治、菅虎雄、山川信次郎、

四氏へ

狩野君
大塚君
菅君
山川君

三十四年二月九日朝

金之助

其後は何方へも御無沙汰をして濟まん／＼と思つて居ると一昨七日山川君から年始狀が來た續いて菅君からも繪端書が來たかうなるといかな無精な拙者でも義理にも黙つて居られないといふ譯で勇猛心を鼓舞

して今土曜の朝を抛つて久し振りに近況を御報知する事にした尤も諸君へ別々に差上るのが禮ではあるが長い手紙を一々かくのは頗る困難であるから失禮ではあるが一纏めの連名で御免蒙る事とした夫から例の候の奉るのは甚だ厄介だから少し氣取つて言文一致の會話體に致した右不惡御了承を願ふ

着後の景況を詳しく述べるには紙數に限りありといふよりも時間に限りありで到底出來にくいから一寸かいつまんで申上様

九月八日に日本を出てから十月下旬に「バリ」にて博覽會を一週間許り見たが一切何にも分らないと思ひ給へ夫から皆に別れて心細くも英國へ着したが朋友も居らず方角も分らず北海道の土人が始めて東京へ修業に出た位の處さ大塚君から教へられた Gower St. の下宿へ行つて部屋の明いて居る處があるなら留めて頂きますまいか何ていふ頗る馬鹿町嚙な調子で頼み込んで漸く雨露丈は凌いだ

諸是から留學地選定の件を方付ねばならぬ「ケンブリッジ」か「オクスフォード」か乃至「エヂバラ」か「ロンドン」かと色々思案をしたが幸ひ或る西洋人の紹介を持つて居たから一先「ケンブリッジ」に行つて様子を見て來ようと思ふて出掛て見た是が英國内の旅行の最初である「ケンブリッジ」へつくと驚いたのは書生が運動シャツと運動靴で町の内を「ゾロ／＼」歩いて居る是は船を漕いだり丸を抛けたり又は自轉車へ乗る先生方であつて而して大學生の大部分は此先生方である夫から段々大學の様子を聽て見ると先づ普通四百磅乃至五百磅を費やす有様である此位使はないと交際杯は出來ないそうだ尤もやり方でもつと安くも出來るが世間がそういう風だから衣服其他之に相應して高い月謝も高い留學生の費用では少々無理である無理にやるとした處が交際もせず書物も買へず下宿にとち籠つて居るならば何も「ケムブリッジ」に限つた事はない少しでも樂な處に行くが善いと判断した是に於て「ケンブリッジ」も「オクスフォード」も御已めにして此度は「エヂバラ」か「ロンドン」かと考へ出した「エヂンバラ」は景色が善い詩

趣に富んで居る安くも居られるだらう。倫敦は烟と霧と馬糞で填つて居る物價も高い、で餘程「エヂンバラ」に行かうとしたが茲に一の不都合がある。「エヂンバラ」邊の英語は發音が大幅ちがう先づ日本の仙臺辨の様なものである切角英語を學びに来て仙臺の「百ズー三」杯を覺えたつて仕様がなかつた夫から倫敦の方はいやな處もあるが社會が大きい女皇が死ねば葬式が倫敦を通る王が即位すれば「プロクラメーション」が倫敦である芝居に行きたければ West End に並んで居る夫から僕に尤も都合の善いのは古本杯をさがすには（新しい本で「も」出版屋は大概倫敦である）此處が一番便利である。以上の譯で先づ倫敦に止まる事に致した。

倫敦に留まるとすれば第一學校第二宿をきめねばならぬ學校の方は University College / Prof. Ker に手紙をやつて講義傍聴の許諾を得たから先よいとて宿の方は困つた第一安直でなければならぬ第二可成閑靜な處が欲しい夫から公使館へ行つて日本人の名簿を引くり返して留學生の居つたらしい處を尋ねる事にした處が倫敦は廣い瀛車馬車交通の機關は備はつて居るが田舎者のほつと出には悲いかな之を利用する事が出来ぬ仕方ないから地圖にたよつて膝栗毛で出掛ると一二軒尋ねる内に日が暮れて仕舞ふ然も其尋ねた家が代が替つて居たり部屋が塞がつて居つたり或は滅法高かつたりして皆だめだ夫から此度は新聞の廣告を見て探し出した廣告の貸間は素敵にあるもんだよ之を見通すさへ三時間位はかゝる況んや之を尋ねるに於てをやだ此困難を経過して漸く二週間の後東京の小石川といふ様な處へ一先づ落付たすると此家がいやな家だね——且つ頗る契約違背の所爲があつたから今度は深川のはづれと云ふ様な所へ引越した道程は四五里もあるだらう随分書物杯は不便なものだよ東京の書生の様に「ランプ」を持つてこそ行かないが實にいやなもんだよ此家が Flodden Camberwell New Road S. E. 此手紙を書いて居る所だよ宿は夫で一段落が付た夫から學校の方を話さう University College へ行つて英文學の講義を聞たが第

一時の配合が悪い無暗に待たせられる恐がある講義其物は多少面白い節もあるが日本の大學の講義とさして變つた事もない瀛車へ乗つて時間を損して聴に行くよりも其費用で本を買つて讀む方が早道だといふ氣になる尤も普通の學生になつて交際もしたり圖書館へも這入たり討論會へも傍聴に出たり教師の家へも遊びに行たりしたら少しは利益があらう然し高い月謝を拂はねばならぬ入らぬ會費を徴集されねばならぬ其のみならずそんな事をして居れば二年間は烟の様に立つて仕舞ふ時間の浪費が恐いからして大學の方は傍聴生として二月許り出席して其後やめて仕舞た同時に Prof. Ker の周旋で大學へ通學すると同時に Charles と云ふ人の家へ教はりに行く此人は英詩及「シエクスピヤー」の方では専門家で自分で edit した沙翁を「オクスフォード」から出版して居る「ダウデン」の朋友で今同教授が出版しつゝある沙翁集中の「キングリヤ」の editor である「ベーカー」町の角の二階裏に下女と二人で住んで居る頗る妙な爺だよ餘り西洋人と縁が絶ても困るから此先生の所へは逗留中は行く積りだ

以上は僕の大體の經歷だ是からくだらぬ事を一二御話し様

僕は英語研究の爲に留學を命ぜられた様なものゝ二年間居つたつて到底話す事杯は満足には出来ないよ第一先方の言ふ事が確と分らないからな情ない有様さ殊に當地の中流以下の言語は Hノ音を皆抜かして鼻にかゝる様な實に曖昧ないやな語だ此は御承知の cockney で教育ある人は使はない事になつて居るが實に聴きにくい仕方ないからいゝ加減な挨拶をして御茶を濁して居るがね其實少々心細い然し上等な教育のある人になると概して分り易い芝居の役者の言語杯も頗る明晰先づ一通りは分るので少しは安心だ然し教育ある人でも無遠慮にベラ／＼嘖舌り出すと大に狼狽するよ日本の西洋人のいふ言が一通り位分つても此地では覺束ないものだよ元來日本人は六づかしい書物を讀んだり六づかしい語を知つ「て」居るが口と耳は遙かに發達して居らん此も一種の教育法かも知れぬが内地雜居の今日口と耳がはたらかないと實用に適

しないのみならず大に毛唐人に馬鹿にされるよ堂々たる日本人が随分御出になるが會話がまづいから西洋人の方では學問も會話位しか發達して居ないとか考へないつまらぬ様だが日本でも手紙の字がまづいと其人を悪く想像するといふ様な譯だから仕方がない此を改良するのは大問題だ到底僕には考へられない恐く今の日本の有様では何人も名案はあるまい然し少しでも善き方に進ませるが教育者の任である山川君杯は随分御研究被下たいと思ふ然し同じ教育のある人でも非常に分りよいのと分りにくいのとあつてね日本と同じ事だよ大幸勇吉の日本語杯は僕にも分らないからな

斯いふ譯で語學其物は到底僕には卒業が出来ないから書物讀の方に時間を使用する事にして仕舞た從つて交際杯は時間を損するから可成やらない加之西洋人との交際となると金がいるよ御馳走ばかりになつて居るとしても金が居るよまづい洋服杯は着て居られないシマには馬車を驅らなければならぬし而も餘程親密にならなければ一通りの談話しか出来ない興味のあるシンミリした話なんかはやれないからね夫も二年で語學が餘程上達する見込があれば我慢してやるがそれは以上の理由でだめだから時間を損し金を損して是といふ御見やけがない位なら始めからやらない方がいゝからね僕は下宿籠城主義とした

下宿といへば僕の下宿は随分まづい下宿だよ三階でね窓に隙があつて戸から風が這入つて顔を洗フ臺がペンキ塗の如何はしいので夫に御玩弄箱の様な本箱と横一尺竪二尺位な半まな机がある夜杯は君ストーブを燒くとドラフトが起つて戸や障子のスキかちビュー／＼風が這入る室を煖めて居るのだから冷して居るのだから分らないね夫から風の吹く日には烟突から「ストーブ」の烟を逆戻しに吹き下して室内は引き窓なしの臺所然として居る何に元の書生時代を考へれば何の事はないと瘠我慢はして居るが色々な官員や會社の役人や金持が來てねくだらない金を使ふのを見るといやになるよ日本へ歸れば彼等のある者とは同等の生活が出来る外國へ同じ官命で來て留學生と彼等の間にはかゝる差違が何故あるかと思ふと歸り度なるね然

しこんな愚癡は野暮の至りだから黙つて居るが何しろ彼等の或物が日本の利益にも何にもならない處に入らぬ金を茶々風茶に使ふのは惜いよ

下宿の有様は以上の如しだから是から下宿の家族に付て一言せざるべからざる譯となる抑も此下宿たるや先頃迄は女學校たりしものが突然下宿に變化したのである是は女學生中に流行病が起る生徒がなくなる借金が出来る不得已閉校して下宿開業借金返済策と出掛た故に此家の女主人公は固の女學校の校主にして其妹たるや學校の音樂教師たりと云ふ譯さそして此姉が閉校後結婚して亭主も同宿して居る其外に元の女學生が一人居るこふと大變上品の様に聞える僕も其積りで移つたのであるが移つて段々話をして見ると誰も話せる奴はない書物杯は一向知らない姉君の方は元はどこかの *governess* であつたとかで頻りに昔しの夜會や舞踏杯の話をする又繪がかけると云ふのが御自慢である大變な *vanity* の強い女で御相手をするのが厭だからフン／＼と云つて向通りを眺めて居ると張合がないと見えて自慢話をやめる事があつた頃は僕の人となりを知り僕の如何なる人間たるやを少し會得したと見えて餘り法螺を吹いて自慢しなくなつた頗る謹慎して殊勝である夏目の徳御天馬（編註）に及ぶと云ふ位のものだ

此女將軍の英語たるや學校の主幹たりし文にわるくはなけれども決して上品にあらず且六づかしき字杯は知らず會に俗に用いない字を使ふと「アクセント」や發音を間違へる此方の言語がムヅカシク分らないくても日本人に聞ては英國婦人の品位が落ちると云ふ様な顔で知たふりで通す頗る憐れな奴だ（山川君に取分けて申すが）一般の英國人よりも我々が學者であつて多くの書物を讀んで居つて且つ英國の事情（ある事情昔し存在して今なき様な事情）には明かであると申して差違なし前には語學の困難を申して我々は二足三文の價値なき様に申上たが斯様な點になる「と」彼等よりも威張れるよ安心し給へ或る西洋人は *pillory* といふ事知らなかつた或人は *such a one* と *such an one* であるとかで議論して居

た或る婆さんは benefit といふ字は a noun of multitude だといつて僕に教へた耳で聽た事のない書物上ニ出テくる字の「アクセント」などはよく間違へて居る然も以上の點は普通教育を受たものゝ内にあつた事其内のあるものは大學の卒業生中にあつた事と思ひ給へ

其から妹の方は極めて内場だ賢夫人である教育はさしてないがあるふりをせぬ丈が感心である夫から亭主もいゝ奴だが頗る無學で書物杯は讀んだ事もあるまい此間一所に芝居「バントマイム」を見物に行た Robinson Crusoe をやつて居つた所が實際是は小説か事實物譚かといつて僕に尋ねた

芝居といへば此ちらの芝居は奇麗だよ其代り中央の善い芝居へ行くと善い席では燕尾服をつけなければならぬ僕は赤靴ジャケツで飛び込んで極りが悪かつた事がある

交通機關は便利だね馬車電鐵地下鐵道高架鐵道色々があるよ其代りやかましくつていやだ馬車へ乗つて濟まして居ると元の方角へ連れて行かれたり瀛車を乗違へて飛でもない處へ持て行かれたりする事が澤山ある

紳士は大概「フロック」に「シルクハット」ダ中には如何しき「フロック」に屑屋の様な「シルクハット」を被つて居るのがある浪人のペンペラの羽二重と云ふ様なものだらう

先達ての女皇の葬式は見た「ハイドパーク」と云ふ處で見たが人浪を打つて到底行列に接する事が出来ない其公園の樹木に猿の様に上つてた奴が枝が折れて落る然も鐵柵で尻を突く警護の騎兵の馬で蹴られる大變な雜沓だ僕は仕方がないから下宿屋の御爺の肩車で見た西洋人の肩車は是が始ての終りだらうと思ふ行列は只金モールから手足を出した連中が續がつて通つた許りさ

僕は少々面白い本を買つた狩野君に見せたいのがある

僕は順に行けば來年の十月末若くは十一月始ニ歸朝するのだが少し佛蘭西に行つて居たいどうも佛蘭西

語が出来んと不都合だ切角洋行の序にやつて行きたいが四ヶ月か五ヶ月でいゝが留學延期をして佛蘭西に行く事は出来まいか狩野君から上田君に話して貰ひたいそうして一寸返事をよこして貰ひたい。そうするとサ來年四月位ニ歸ル譯ニナル

夫からもう一つ狩野君と山川君と菅君に御願ひ申す僕はもう熊本へ歸るのは御免蒙りたい歸つたら第一で使つてくれないかね未來の事は分らないが物が順にはこぶと見て僕も死なす狩野君も校長をして居るとした處で如何ですかな御安くまけて置きますよ

大塚君の指輪は到着したかね安達から手紙が行つたらう

山川君世帯を持つたか僕は歸つたらだれかと日本流の旅行がして見たい小天行杯を思ひ出すよ

僕は中々手紙をやらないから諸君に頼むのは妙だが時々何か書てよこして呉れ給へ御願だ宛名は公使館がいゝ下宿は移る事があるから

九七

明治三十四年二月二十日 6 Plodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より牛込區天來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ

國を出てから半年許りになる少々厭氣になつて歸り度なつた御前の手紙は二本來た許りだ其後の消息は分らない多分無事だらうと思つて居る御前でも子供でも死んだら電報位は來るだらうと思つて居る夫だから便りのないのは左程心配にはならない然し甚だ淋い山川から端書が來た先達て是は年始狀だ菅からも年始の端書をくれた其外に熊本の野々口と東京の太田と云ふ書生から年始狀が來た手紙は是丈だ

御前は子供を産んだらう子供も御前も丈夫かな少々そこが心配だから手紙のくるのを待つて居るが何とも云つてこない中根の御父つさんも御母さんも忙がしいんだらう

金巡りさへよければ少しは我慢も出来るが外國に居て然も囊中自か「ら」錢なしと來てはさすがの某も中々閉口だ早く満期放免と云ふ譯になりたいた然し書物文は切角來たものだから少しは買つて歸り度と思ふそうなる猶必^原逼する然し命に別條はない安心するが善い

段々日が立つと國の事を色々思ふおれの様な不人情なものでも頻りに御前が戀しい是丈は奇特と云つて褒めて貰はなければならぬ夫から筆の事だの中根の御父つさんや御母さんの事だの御梅さんや倫さんの事だの狩野だの正岡だの菅だの山川だの親類や友達の事なんかを無暗に考へる其癖あまり手紙はかゝない先達大坂の鈴木と時さんへ一本出した熊本の櫻井へも出した狩野大塚山川菅へ連名で出した夫から中根の御母さんへ一本出した是は此前の郵便で届くか事によると此手紙と一所に届くだらう

おれの下宿は氣に喰はない所もあるが先々辛防して居るよ妻君の妹が洗濯や室の掃除杯の世話をする中中行届いたものだシャツや股引の破けたの杯は何にも云はんでもちやんと直つて呉^原る御前も少々氣をつけ

湯淺だの俣野、土屋、杯にも逢ひ度、高知縣の書生でよく來た男一寸名前を忘れて仕舞たあの男杯の事も時々考へる

おれの下宿には〇〇と云ふサミユエル商會へ出る人が居る此人はノンキな男で地獄の話より外は何にも知らない人だ此人と時々芝居を見に行く是は一は修行の爲だから敢て贅澤ではない日本の人は地獄に金を使ふ人が中々ある惜い事だおれは謹直方正だ安心するが善い

西洋は家の立て方から服装から萬事窮^原で行かぬそして室杯は頗る陰氣だ殊に倫敦^原は陰氣でいけない昨日も三時頃「ピカードレー」と云ふ所を通つて居ると突然太陽が早仕舞をして市中は眞暗になつた市中は瓦斯と電氣で持つて居る騒ぎさ

まだくあるが是から散歩に出なければならぬからは是でやめだ
からだ本復したらちつと手紙をよこすがい、

二月二十日

鏡 どの

金之助

此手紙は明日の郵便で日本へ行く郵便日は一週間に一遍しかない

九八

明治三十四年三月九日 午前十一時三十分 6 Plodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より牛込區矢來町三番地中ノ丸
中根氏方夏目鏡へ

其後國から便があるかと思つても一向ない二月二日に横濱を出た「リオヂヤチイロ」と云ふ船が桑港沖で沈没をしたから其中におれに當た書面もありはせぬかと思つて心掛りだ

御前は産をしたのか子供は男か女か兩方共丈夫なのかどうもさつぱり分らん遠國に居ると中々心配なものだ自分で書けなければ中根の御父さんか誰かに書いて貰ふが好い夫が出來なければ土屋でも湯淺でも頼むが好い

新聞も頼んで置たが一向來ない是は經濟上の都合があると云ふならよこさんでもよろしい只だんまりですて、置くのは宜しくない注意するがよい

おれは不相變忙がしいから長い手紙を出し度ても出す暇がない諸方へは御前からよろしく言つて呉れ

芝居は修業の爲に時々行くが實に立派で魂消る許りだ昨夜も「ドルリー・レーン」と云ふ倫敦の歌舞伎座の様な處へ行つたが實に驚いた尤も其狂言は眞正の芝居ではない「バントマイム」と云つて舞臺の道具立や役者の衣装の立派なのを見せる主意であつて是は重に「クリスマス」にやるものだがはやるものだから去年から引き續いてやつて居る（倫敦は廣い處だから芝居の數も無暗にあるがはやる狂言になると三年も續けて一つ芝居をやつてをして人が這入るのだから不思議なものだ）そこで此道具立の美しき事と言つたら到底筆には盡せない觀音様の棟に彫りつけてある天人が五六百人集まつて繪にかいた龍宮の中で舞踏をして居ると其後から又五六百人が舞臺の下からセリ出してくる急に舞臺が暗くなると其次の瞬間には悉皆道具が替つて居る突然舞臺の眞中から噴水が出て此噴水が今紫色であるかと思ふと黄色になり其次には赤くなり青くなり非常な金銀を鑲めた殿閣が急に現はれて夫が柱天井の中に皆電氣がつい「て」光る「ダイヤモンド」で家が出來て居る様だ女の頭や衣服も電氣で以て赤い玉や何か、何十となくつく夫が一幕や二幕ではない差し易り引き易り實に莫大な金を費さなければ出來ない丸で極樂の活動寫眞と巡り燈籠とを合併した様だ何しろ大きな水昌宮がセリ出すかと思ふと奇麗な花園がセリ下がつて來たり其後から海に日が當つて山が青く見える處が次第に現はれて來たり是が漸々雪の降る景色に變化したり實に奇觀である

おれは丈夫だ餘程肥た様だ然し早く日本に歸りたい後は其内書いてやる

金之助

鏡 どの

九九

明治三十四年四月九日 夜 6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より下谷區上根岸町八十一番地正岡常規氏へ

其後は頓と御無沙汰をして濟まん君は病人だから固より長い手紙をよこす譯はなし虚子君も編輯多忙で「ほととぎす」文を送つてくれる位が精々だらうとは出立前から豫想して居つたのだから手紙のこないのは左迄驚かないが此方は倫敦といふ世界の勸工場の様な馬市の様な處へ來たのだから時々は見た事聞た事を君等に報道する義務がある是は單に君の病氣を慰める許りでなく虚子君に何でもよいからかいて送つて呉れると二三度頼れた時にへい、よろしう御座いますと大揚に受合つたのだから手紙をかくのは僕の義務さ夫は承知だが僕も遊びに來た譯でもなし酔興にまごついて居る仕儀でもないのだから可成時間を利用して様と思ふのでね遂々いづ方へも無音になつてまことに申譯がない（以下全集第十六卷『倫敦消息』の一参照）

四月九日夜

漱石

子規君
虚子君

（もう厭になつたから是で御免蒙る實は僕の先生の話しをし度のだがね餘程の奇人で面白いのだから然し少々頭がいたいから是で御勸辨を願はう
ほととぎす拜見、君の端書も拜見病氣がよくないそうだ困るねま、用心するがい、）

〔本文「倫敦消息」の二参照〕

今回は是で御免竹村は氣の毒な事だ

ひまがあれば通信をするこんな事をかくんでも中々時間がかゝるから惜い通信は歸朝の上見せてもらう
かも知れないから反古にせずとつて置いて呉れ給へ

二十日

漱石

子規君
虚子君

101

明治三十四年五月八日 Footing より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ

御前の手紙と中根の御母さんの手紙と筆の寫眞と御前の寫眞は五月二日に着いて皆拜見した

久々で寫眞を以て拜顔の榮を得たが不相變御兩人とも滑稽な顔をして居るには感服の至だ少々耻かしい
様な心持がしたが先づ御ふた方の御肖像をストーヴの上へ飾つて置たと下宿の神さんと妹が掃除に來
て大變御世辭を云つてほめた大變可愛らしい御嬢さんと奥さんと云つたから何日本ぢやこんなのは皆御
多福の部類に入れて仕舞んで美しいのはもつと澤山あるのさと云つてつまらない處で愛國的氣燄を吐いて
やつた筆の顔杯は中々ひょうきんなものだね此速力で滑稽的方面に變化されてはたまらない

善良なる淑女を養成するのは母のつとめだから能く心掛けて居らねばならぬ夫につけては御前自身が淑
女と云ふ事について一つの理想をもつて居なければならぬ此理想は書物を読んだり自身で考へたり又は高

尚な人に接して會得するものだ ほんやりして居ては行けない
飯を食はして着物をきせて湯をつかわせさへすれば母の務は了つたと考へられてはたまらない御頼まふ
しますよ

二週間許前に又宿替をした此度は日本橋を去る四里許り西南の方だ矢張り下宿の主人や神さんはもとの
奴だ實は變りたいのだが妙な縁故で出にくい様な譯になつて居る

當地はまだ寒ひ冬服で居る外套をきても可笑しくはない我輩の着物はきられなくなつて仕舞つた然し新
服を作る餘裕がない

菅の御父さんは病氣だつて夫から死んだか又はよくなつたか不相變食^原乏世帯の上にそんな事が湧いて來
てはたまるまい氣の毒だ山川は先達家を持つとかいふ端書をよこしたがどうしたかしらあいつは人に手紙
をよこせといつて催促をするが自分は一向よこさないけしからん奴だ

此間鈴木夫婦から手紙をよこした太陽雜誌を送つてやるとかいつてよこした二十圓許り繪葉書を買つて
よこせと云ふ御注文だ時さんは不相變御大名だよ

五月八日

金之助

鏡どの

1011

明治三十四年六月十九日 Footing より在獨乙伯林藤代頼輔氏へ

君の手紙が今十九日着した先達て福原の事での手紙もついたがいつどこへつくだか分らないからそれ

11111

なりにして置いた宜しく御工夫と書てあつたが公使館へでも通知する位の事でそれも常人さへ公使館へくれば僕の宿所は分るのだから工夫といふ程の事でもないと思つてそれつきりにした因つて同氏には面會しなかつた目下は池田菊苗氏と同宿だ同氏は頗る博學な色々の事に興味を有して居る人だ且つ頗る見識のある立派な品性を有して居る人物だ然し始終話し許りして勉強をしないからいけない近い内に同氏は宿を替る僕も替る菅の家嚴の訃音は僕の妻の所から知らせて來た

僕はね留學生になつて何にも所得はない少しは進歩した事があるかと思つて考へて見ても心が許さんから仕方がない自惚るより少しはよいかも知れぬ

第一高等學校で僕を使つてくれないかと狩野へ手紙を出した返事が來ない熊本はもう御免蒙りたい

近頃は英學者なんでもものになるのは馬鹿らしい様な感じがする何か人の爲や國の爲に出來そうなものだとボンヤリ考へて居るコンナ人間は外ニ澤山アルダラウ左様ナラ

六月十九日

金之助

藤代君

IOIII

明治三十四年八月二日 午後(時間不明) c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. 4s Bei Brandt,

Paulstrasse 24, Berlin 芳賀矢一氏へ [はがき]

拜啓

立花君の爲に記念の圖書御購求の次第拜承小生も無論賛成致候當地にて同君交際の方は頗る少かるべく

藤井君の番地聞合せ候處 120, Belgrave Road S. W. の由なれど目下 Eastbourne とやらに旅行中のよしに候其他陸軍少佐梶川某といふ人は同君の舎兄と交際あり従つて滯英中懇親の由承知致候同氏へは公使館宛にて届く事と存候其他の人は一向存じ不申候

釀金の手續及び概略の金額御通知被下候へば小生より兩君に通知致してもよろしく又貴兄にて御まとめ相成候へば小生分は直ちに貴兄へ宛御送可申上候 頓首

八月一日

夏目金之助

芳賀兄

藤代君に度々不足税を拂はして失敬御容赦可被下此カードなら大丈夫と存候如何にや是も不足税なら一寸御一報被下度候

IOE

明治三十四年八月十日 午後一時 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より牛込區矢來町三番地中ノ丸

中根氏方夏目鏡へ [はがき]

其後御無事の事と存候

其許よりは一尙書信無之或は公使館邊に滯停致し居るやと存候

日本新聞六月末より七月九日に至る迄昨八月九日落手致候

山川より二回程書面参り候

中根父上は休職のよし其後は御無沙汰に打過候よろしく其許より御傳被下度候
兩女とも健康の事と存候
鈴木夫婦よりは度々書信有之候

八月十日

夏目金之助

LOH

明治三十四年八月十七日 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より牛込區矢來町三番地中ノ丸
中根氏方夏目鏡へ 「はがき」

ロンドン

夏目金之助

八月十七日

拜啓

八月十五日土井氏パリスより來倫當分小生方に止宿の事に致候同君より肌着上下一着絹ハンケチ四枚受
取申候御厚意難有存候

中根父上の手紙其許及び梅子どの、手紙拜見致候
父上には目下御休職御閑散のよし結構に存候

其許御病氣のよし目下は定めて御全快の事猶御注意可然と存候小兒兩人とも健康のよし結構に候御梅様
華族女學校へ御通學のよしよく御勉強可被成候御梅さんの手紙はよく出來て居候猶時々御通信可被下候小
生至極丈夫御安心可被下候

先日又々轉居候只今の處は頗る上品なる 「以下七八字チギれて見えず」 姉妹と退職の陸軍大 「以下同前」 に候此御婆
さん中々親切な 「以下同前」 「クリスマス」 に見やけもの (日本の) 「以下同前」 何に手に入候は、御送り可被下
「以下同前」 其許の處へ手紙をかくと申して居候

LOK

明治三十四年九月十二日 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より東京理科大学 (學生) 寺田寅彦へ

其後は存外の御無沙汰失敬大兄も御無事御勉學何かメンデルゾーン杯をブー／＼鳴らして御得意の事と
存候小生も矢張碌々生命を維持するにいそがしく候只今は倫敦の西南に住居致居候御婆さん二人と退職の
陸軍大佐と同居で頗る老朽的生活に候此御婆さんは中々學者で佛蘭西語なんかをベラ／＼嘯舌り「シエク
スピヤー」杯を引きずり出し候大變な難有屋にて地下鐵道の御蔭でセントボールの土臺へヒッが入るとか
で大不平に候

御家内御病氣のよし是はナンボ君でも御閉口の事と御察し申上候隨分御療養專一咯血杯は一寸流行るも
のだが頗る難有からぬ奴に候子規杯もあぶなき事と心配の至に候

倫敦には無數の「アン」有之「ショーベ」「ン」「ハウワー」の説によれば 8,8000 人とか申す儀に候へば
貴兄の御近づきの先生は一寸見當り不申何れ其内面會の折も有之候へば君よりよろしくと可申候「サイラ
ス・マーナー」に逢つたら金を借りてやらうと思居候へども運悪くまだ遇ひ不申候

俣野の年始狀が九月に着致候には少々喫驚差出人が俣野丈に郵便が半年以上道草を喰つて居つた事と存
候竹崎君落第のよし落第の一返位は心地よきものに候益奮發して御遣り可被成候

學問をやるならコスモポリタンのものに限り候英文學なんかは椽の下の方持日本へ歸つても英吉利に居

つてもあたまの上がる瀨は無之候小生の様な一寸生意氣になりたるもの、見せしめにはよき修業に候君
なんかは大に専門の物理學でしつかりやり給へ本日の新聞で Prof. Ricker の British Association でや
つた Atomic Theory 二關する演説を讀んだ大に面白い僕も何か科學がやり度なつた此手紙がつく時分
には君も此演説を讀だらう

ついで此間池田菊苗氏（化學者）が歸國した同氏とは暫く倫敦で同居して居つた色々話をしたが頗る立派
な學者だ化學者として同氏の造詣は僕には分らないが大なる頭の學者であるといふ事は慥かである同氏は
僕の友人の中で尊敬すべき人の一人と思ふ君の事をよく話して置たから暇があつたら是非訪問して話を
し給へ君の専門上其他に大に利益がある事と信ずる

僕も歸つて熊本へは行き度ない可成東京に居りたい然し東京に口があるかないか分らず其上熊本へは義
理があるから頗る閉口さ

何か其他面白い事を書いて上げ「た」いが一寸今考へ出せない君は寫真を送れとか云ふ注文であつたが
忘れた譯ではないが大なる寫真はちと高いから餘り買へない歸るときに御見やけに少し買つて上げあげま
しやう

僕は留學期限を一年のばして佛蘭西へ行き度が聞届られさうにもない

君下宿で淋しければ時々僕の留守宅へでも遊びに行つて見給へ——それも話しがなくてつまらないか！
—夫ならよし給へ

僕の趣味は頗る東洋的發句的だから倫敦杯にはむかない支那へでも洋行してフカの緒か何かをどうも乙
だ杯と言ひながら賞翫して見度い
貞ちゃんへよろしく

九月十二日

漱石

寅日子様

IOH

明治三十四年九月二十二日 10 Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より牛込區矢來町三番地中ノ丸

中根氏方夏目鏡

其後御無事御暮らし被成候事と存候筆も恒も丈夫に成人致居候ならんよく／＼氣をつけ御養育有之度候
小生無事勉強致居候間皆々様へよろしく御申聞可被下候近頃少々胃弱の氣味に候胃は日本に居る時分より
餘りよろしからず當地にては重に肉食を致す故猶閉口致候

近頃は文學書は嫌になり候科學上の書物を讀み居候當地にて材料を集め歸朝後一卷の著書を致す積りな
れどおれの事だからあてにはならない只今本を讀んで居ると切角自分の考へた事がみんな書いてあつた忌
ましい

先達櫻井氏より手紙參り候其前櫻井氏宛にて留學延期（佛國へ）の件周旋頼み置候處延期は文部省にて
一切聞き届けぬ由につき泣寝入に候歸朝後は東京に居り度と思へど此様子では熊本へ歸らねばならぬかも
知れぬ御前も其覺悟をして居るがい、先達御梅さんの手紙には博士になつて早く御歸りなさいとあつた博
士になるとはだれが申した博士なんかは馬鹿々々敷博士なんかを難有る様ではだめだ御前はおれの女房だ
から其位な見識は持つて居らなくてははいけないよ

山川から先達て手紙が二本來た山川は此次此次といつて書くとき短かい手紙だへ々な擊劍使ひが懸聲ばか

り仰山でちつとも斬り込まないのと同様だ」

寺田寅彦から手紙をよこした妻君が病氣で咯血をした相だそれから子供が生れたさうだ氣の毒と御目出度のが鉢合せをして居る

中根の御父さんも御母さんも御達者だらう、日本新聞は時々來る大抵一週間に一返位來る
端書でもよいから二週間に一度位宛は書面をよこさなくてはいかん子供杯があると心配になるから、皆さんへよろしく

九月二十二日

金之助

鏡 どの

108

明治三十四年九月二十六日 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より牛込區矢來町三番地中ノ丸

中根氏方夏目鏡へ

八月末御差出の書狀拜見致候小供も其許も少々御病氣のよしの處もはや御全快のよし結構に候小生も不相變に候

下女暇をとり嘸かし御多忙御氣の毒に候金が足りなくて御不自由是も御察し申す然し因果とあきらめて辛防しなさい人間は生きて苦しむ爲めの動物かも知れない

倫さんの手紙によると筆は何か大變な強情ばりの容子だ男子は多少強情がなくては如何んが女が無暗に強情ではこまる又之を直すに無暗に押入に入れたりしては如何んよ仕置も臨機應變にするのはいゝがた

厳しくしては如何ぬ小供の性質は遺傳によるは勿論であるが大體六七歳迄が尤も肝要の時機だから決して瞬時も油断をしては如何ん可成スナホな正直な人間にする様に工夫なさい

鈴木からも手紙が來て夫婦とも寶塚の温泉で洒落れて居る相だ

中根の御兩人始め其他の諸先生も皆丈夫だ相で結構だ

入齒の事も承知時機を見てやれたらやるがいゝ無理をするにはあたらな此頃は長い手紙をかくのがオツクーだから是でやめる

九月二十六日

金之助

鏡 どの

寺田寅彦から手紙が來た寺田の妻は吐血した夫に病氣後子を生んださうだ妻は國へ歸し自身は下宿をする

可愛相だから時々僕の留守宅へでも遊びに行けと申してやつた行くかも知れない

土屋湯淺俣野とも落第のよし氣の毒に候

落第なんか恐れる様では仕様がな落第は良き經驗だ奮發してやる様に御申聞可被成候

109

明治三十四年十一月二十日 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より高知縣土佐郡江ノ口町大川筋

寺田寅彦へ

今十一月二十日。君の手紙を拜見、何か肺尖カタルとかで御上京にならぬ由コイツは少々厄介の事と遠方から御心配申上る先日大學宛にて手紙を一通出したが恐らく君の處へは届くまい、

油畫やバイオリンや俳句や寔に小説の主人公見た様で結構に思ふが其上に病氣で海濱へ養生に来て居る杯は近頃の文學狂が好んで寫し出す種と思ふが既に妻あり子ありとなつては少々相場が下落する

小生不相變碌々別段國家の爲にこれと申す御奉公を出來かねる様で實に申譯がない

今から十年もしたら何か出來想に思ふが此十年が昔からの事だから頗るあてにならない

こちらの様子も種々申述る事もあるがどうもひまがなくていづ方へも御無沙汰のみをして居るから君にも御勘辨を願はねばならぬ

君の妻君は御病氣はどうです君の子供は丈夫ですか

學校杯はどうでもよいから精々療治をして御両親に安心をさせるのが專一と思ひます

明日の晩は當地で有名な Party と云ふ女の歌を「アルバート・ホール」へき、に行く積り小生に音楽杯はちとも分らんが話の種故此高名なうたひ手の妙音一寸拜聴し様と思ふ先は是丈 草々

寺 田 君

漱 石

倫敦有歴日

110

明治三十四年十二月十八日 50 Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より下谷區上根岸町八十一番地

正岡常規氏へ

〔前略〕日曜日に「ハイド・パーク」杯へ行くと盛に大道演説をやつて居るこちらでは「イエス・キリスト」の神よ「アーメン」先生が皸枯聲で口説いて居ると五六間離れて無神論者が怒鳴つて居る「地獄？地獄とは何だ若し神を信ぜん者が地獄に落ちるならヴォルテールも地獄に居るだらうインガールも地獄に居るだらう吾輩はくだらぬ人間の充滿して居る極樂よりもかゝる豪傑の集つて居る地獄の方が遙にましだと思ふ」僕の理想的アマダレ演説よりも餘程氣盛が高い之を稱して鼻息あらしき演説といふので之も雄辯法杯に見當らない形容詞のつく使ひやうだ此無神論者の向側に Humanitarian の旗を押立て、「コムト」の假色を使つて居る奴がある其隣では頻りに「ハックスレー」の説を駁して居る其筋向にシナビた先生がからだに似合ない太い聲を出して「諸君予は前年日本に到りかの地にて有名なるマーキス・アイトー（伊藤侯爵のこと）に面會して同氏が宗教に關する意見を親しく聽き得たのであります……」どれもこれも善い加減な事ばかり述立て、居る

先達「セント・ジエームス・ホール」で日本の柔術使と西洋の相撲取の勝負があつて二百五十圓懸賞相撲だといふから早速出掛て見た五十錢の席が賣切れて這入れないから壹圓二十五錢奮發して入場仕つたが夫でも日本の豊稜敷見た様な處で向の正面でやつて居る人間の顔などはとても分らん五六圓出さないと顔のはつきり分る處迄は行れない頗る高いぢやないか相撲だから我慢するが美人でも見に来たのなら壹圓二十五錢返して貰つて出て行く方がいゝと思ふソナシミツタレタ事は休題として肝心の日本對英吉利の相撲はどう方がついたかといふと時間が後れてやるひまがないといふのでとう／＼御流れになつて仕舞つた其代り瑞西のチャンピオンと英吉利のチャンピオンの勝負を見た西洋の相撲なんて頗る間の抜けたものだよ膝をついても横になつても逆立をしても兩肩がピタリと土俵の上へついて然も一二と行司が勘定する間此ピタリの體度を保つて居なければ負でないつて云ふんだから大に埒のあかない譯さ蛙のやうにへたバツ

テ居る奴を後ろから抱いて倒さうとする倒されまいとする坐り相撲の子分見たやうな眞似をして居る御蔭で十二時頃迄かゝつた難有仕合である翌日起きて新聞を見ると夕十二時迄かゝつた勝負がチャンとかいてあるには驚いたこつちの新聞なんて物はエライ物だね

僕は又移つたよ五ヶ閑地不得閑三十五年七處移なんと三十五年に七度居を移す位な事では自慢にやらない僕なんか英吉利へ来てからもう五返目だ今度の處は御婆さんが二人退職陸軍大佐といふ御爺さんが一人丸で老人國へ島流しにやられたやうな仕合せこの御婆さんが「ミルトン」や「シエクスピヤー」を讀んで居ておまけに佛蘭西語をペラ／＼辯ずるのだから一寸恐縮する「夏目さん此句の出處を御存知ですか」杯と仰せられる事がある「あなたは太變英語が御上手ですが餘程おちいさい時分から御習ひなすつたんでせう」杯と持上げられた事もある人豈自ら知らざらんや冗談言つちやいけないと申度なるこちらへ来て御世辭を眞に受けて居ると太變な事になる男は左程でもないが女なんかはよく「wonderful」など、愚にもつかない御世辭をいふ下手な方に「wonderful」ですかと皮肉をいふこともある「中略」今や濃霧窓に迫つて書齋晝暗く時計一時を報ぜんとして撫腹食を欲する事頗なり此美しき數句を千金の掉尾として筆を擱く

『ほこ、ぎす』第五卷第五號より轉載

一一一

明治三十五年二月二日 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方

夏目鏡

拜啓愈新年と相成寒氣烈敷候處先々御無事の由大慶に存候クリスマス贈品として注文致し候品押繪二枚ハンケチ一枚は去る一月六日到着受取申候時節遅れたれどやらぬよりよしと思ひ御婆さんにつかはし申候

御面倒の段御禮申上候越えて一月二十日に其元の手紙到着是亦披見致候皆々壯健のよし珍重に存候川住様御逝去のよし御くやみ申上候

其許の手紙にはそれやこれやにて音信を忘たり云々とあれど「それやこれや」とは何の言譯やら頼と合點不參候其許はとまり掛にでも川住へ看病にでも被參候や又川住殿死後手傳の爲毎日回家へ止宿被致居候や去らば二週間に一返の端書位かけぬひまは有之間敷と存候冬着の仕度とて朝から寐るまでかゝる譯には有之まじと存候元來留守中朝は何時頃起きて夜は何時頃寐らるゝや去年つかはし候二週間に一返位端書にて安否を通信せよと申つかはしたる書狀(端書)を讀みたるにや讀まぬにや此方より右の端書を出したるは去年九月二十二日なれば十月末にはつきし筈なり而して其許の最近の手紙は十二月十三日日附なれば此方の手紙到着の日より凡そ一月半ばかり捨置たるなり又其以前とても二月許り音信なければつまり前後を通じて四月許此方へ一片の音信もせざるなりそれで「それやこれや」位な言譯でよしと思ふや又多忙其他にて音信を繁くする事出来ずば何故始めより斷はり置かざるや左すれば此方にて心配なく一年でも二年でも安心して過すべきに、去りとしては餘り愚かなる事なりよく考へよく思ふて口をきくべし又事をなすべし以來ちと氣をつけるがよろしい

二月二日

金之助

鏡 どの

一一二

明治三十五年二月十六日 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common London, S. W. より小石川區林町六十四番地菅虎雄氏へ

其後は御無沙汰をして濟みません不相變頑健には候へども近頃の寒氣には閉口水道の鐵管が氷つて破裂し瓦斯がつけられぬ始末厄介に候氷すべりを始めて見て經驗を増した位の事に候漸々留學期もせまり學問も根つからはかどらず頗る不景氣なり歸つて教師なんかするのは厭でたまらない況んや熊本迄歸るに於てをや夫を考へると英國に生涯居る方が氣樂でよろしい近頃は文學書杯は讀まない心理學の本やら進化論の本やらやたらに讀む何か著書をやらうと思ふが僕の事だから御流れになるかも知れませんが先は御挨拶迄
匆々

二月十六日

金之助

菅 様

一一三

明治三十五年二月十七日 午後五時 〇 Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より 愛媛縣温泉郡今出町

村上平太郎氏へ 〔はがき〕

新年の賀狀拜見此方よりは御無沙汰をしてまことに申譯なく候當地寒氣烈敷頗る難澁に候

花賣に寒し眞珠の耳飾

なつかしの紙衣もあらず行李の底

三階に獨り寐に行く寒かな

二月十六日

金之助

霧 月 様

一一四

明治三十五年三月十日 〇 Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より 牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方

夏目鏡へ

年始狀筆の日記倫君の日記いづれも披見致候右は去る二月二十日に着致候皆々元氣にて結構に存候此方も丈夫にて暮し居候間御安神ある可く候

先日中一週間程寒氣烈敷水道鐵管が破裂し瓦斯もつけられぬ始末に困じ果候が昨今は非常の暖氣にて木の芽春の草花などほつ々見當る様に相成候世界廣しと雖倫敦位氣候の劇變する處は無之と存候霧は有名なるものにて之を角切りにして罐詰にして日本へ持歸度位に候當地にて始めて氷すべりなるものを見物致候甚だ面白相なるが險呑故未だ試みず

倫さんの日記も筆の日記も面白かつ〔た〕からひまがあつたら又御つかはし可被成候倫さんは近頃大改良大奮發のよし至極結構に存候家の中に入り出てへーくピョコトくして居る者杯を相手にして居てはいけないそれから古人の書を読むと無暗に古人の言行が眞似たくなる自分で小説的な人間になつて仕舞ふ若い内はこんな弊がよくあるからよく考へて表面上の役者の人物にならない様にしなればいけない良賈は深藏あるなきが如しと言ふから無暗に人を凌いだり出過ぎたりしてはいけない學問は智識を増す丈の道具ではない性を矯めて眞の大丈夫になるのが大主眼である眞の大丈夫とは自分の事ばかり考へないで人の爲世の爲めに働くといふ大な志のある人をいふ然し志許あつても何が人の爲になるか日本の現在ではどん

な事が急務か夫々熟考して深思せねば容易にわからない是が智識の必要なる點である大丈夫の人格を備へて又智識より得たる大活眼を有する底の男にならなければ人に向つて威張れないよく／＼細心に今から其方向へ進行あらん事を希望します今の内の一舉一動は皆將來實となつて出てくる決してゆるかせにしてはいかぬ人間大體の價値は十八九二十位の間にかまると慎み給へ勵み給へ

其許もよく氣をつけて二女を養育あるべく候留學期も漸々縮少十一月位に出發歸國のつもり何れ來年始頃は歸着の事と存候

三月十日

金之助

鏡 どの

一五

明治三十五年三月十五日 午後五時 o/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. 1902 牛込區矢來町三番地

中ノ丸丙五十八號中根重一氏

拜復二月十二日御差出の御書狀昨三月十四〔日〕着拜見致候いつも御壯健御暮しの段奉恭賀候鏡及二女生活の模様につき委細御報知被下御手数數拜謝致候皆々無事のよしにて安堵致候鏡よりは其後二回程通信有之但し十一月出の書面は到着不致右は物品の誤には無之候や

御辭職後多少御困難の御模様も承はり痛心致候政海目下の有様にては官吏程不安全のものは有之間敷且銳意計畫の事業も緒に就かざる内に後任者の爲に打壞され候事と存候かくの如くならば只變化のみにて進化は覺束なき事と存候

日英同盟以後歐洲諸新聞の之に對する評論一時は引きもきらざる有様に候ひしが昨今は漸く下火と相成候處當地在留の日本人共申合せ林公使幹旋の勞を謝する爲め物品贈與の計畫有之小生も五圓程寄附致候きりつめたる留學費中まゝ如斯臨時費の支出を命ぜられ甚だ困却致候新聞電報欄にて承知致候が此同盟事件の後本國にては非常に騒ぎ居候よし斯の如き事に騒ぎ候は恰も貧人が富家と縁組を取結びたる喜しさの餘り鐘太鼓を叩きて村中かけ廻る様なものにも候はん固より今日國際上の事は道義よりも利益を主に致し居候へば前者の發達せる個人の例を以て日英間の事を喩へんは妥當ならざるやの觀も有之べくと存候へども此位の事に満足致し候様にては甚だ心元なく被存候が如何の覺召にや

國運の進歩の財源にあるは申迄も無之候へば御申越の如く財政整理と外國貿易とは目下の急務と存候同時に國運の進歩は此財源を如何に使用するかに歸着致候只己のみを考ふる數多の人間に萬金を與へ候とも只財産の不均より國歩の艱難を生ずる虞あるのみと致候歐洲今日文明の失敗は明かに貧富の懸隔甚しきに基因致候此不均は幾多有爲の人材を年々餓死せしめ凍死せしめ若くは無教育に終らしめ却つて平凡なる金持をして愚なる主張を實行せしめる傾なくやと存候幸ひにして平凡なるものも今日の教育を受ければ一應の分別生じ且耶蘇教の隨性と佛國革命の殷鑑遠からざるよりは是等庸凡なる金持共も利己一遍に流れず他の爲め人の爲に盡力致候形跡有之候は今日失敗の社會の壽命を幾分か長くする事と存候日本にて之と同様の境遇に向ひ候はゞ(現に向ひつゝあると存候)かの土方人足の智識文字の發達する未來に於ては由々しき大事と存候 カールマークスの所論の如きは單に純粹の理窟としても缺點有之べくとは存候へども今日の世界に此説の出づるは當然の事と存候小生は固より政治經濟の事に暗く候へども一寸氣餒が吐き度なり候間斯様な事を申上候「夏目が知りもせぬに」杯と御笑被下間敷候

著述の御目的にて材料御蒐集のよし結構に存候私も當地着後(去年八九月頃より)より一著述を思ひ立

ち目下日夜讀書とノートをとると自己の考を少し宛かくのとを商買^原に致候同じ書を著はすなら西洋人の糟粕では詰らない人に見せても一通はづかしからぬ者と存じ勵精致居候然し問題が如何にも大問題故わらくすると流れるかと存候よし首尾よく出来上り候とも二年や三年ではとても成就仕る間敷かと存候出来上らぬ今日わが著書杯事々敷吹聴致候は生れぬ赤子に名前をつけて騒ぐ様なものに候へども序故一應申上候先づ小生の考にては「世界を如何に觀るべきや」と云ふ論より始め夫より人生を如何に解釋すべきやの問題に移り夫より人生の意義目的及び其活力の變化を論じ次に開化の如何なる者なるやを論じ開化を構造する諸原素を解剖し其聯合して發展する方向よりして文藝の開化に及す影響及其何物なるかを論ずる積りに候斯様な大き「な」事故哲學にも歴史にも政治にも心理にも生物學にも進化論にも關係致候故自分ながら其大膽なるにあきれ候事も有之候へども思ひ立候事故行く處迄行く積に候斯様な決心を致候と但欲しきは時と金に御座候日本へ歸りて語學教師杯に追つかはれ候ては思索の暇も讀書のひまも無之かと心配致候時は金を十萬圓拾つて圖書館を立て其中で著書をする夢を見る杯愚にもつかぬ事に御座候此手紙差上候後は又當分御無沙汰致すやも計り兼候間右様御了知被下度候 敬具

三月十五日

金之助拜

中根父上様

一六

明治三十五年三月十八日 of Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方
夏目鏡

二月十四日出の書狀今三月十八日到着披見致候寫眞も同時に到着致候

御前の顔は非常に太つて驚ろいた恒の目玉の大いにも驚いた筆の顔の變つたのにも驚いた自分の顔も大分變つたらうと思ふ然し自分にはわからない

此方よりも書面を出さないと云ふ苦狀だが己は今迄返事を出さなかつた事はない又急がしいから度々はかけぬと先最初から斷つてある斷つて無沙汰をするのと無斷で無沙汰をするのとは大變違ふ心配になるから度々端書で音信をせよと云ふのと疑るのと一所にされてはたまらないよく落付て手紙を見るがよい女の脳髓は事理がわからない様に出来て居るなら仕様がな

おれの事を世間で色々に言ふつてどんな事を言つて居るのか、おれも御前の信用してくれる程の君子でもないから何をして居るか實は分らんのさ世間の奴が何かいふなら言はせて置くがよろしい

先達櫻井さんから又熊本へ歸つて貰ひ度が一己の御都合はどうだと云つてきたから實の所を白狀すると歸り度ないといつてやつた此さきどうなるか分らないが先々遠くへ行くと云つて覺悟して居ないといけな

い 近頃は著述を仕様と思つて大に奮發して居る己の著書だからどうせ賣れる様なものではない又出来上るとも保證出来ん先々ゆつくりかまへてやる著書なんかやらうと思ふと金が欲しくなる教師なんかはいやになる

山川は妻帯をするつて候補者を詮議中ださうだが至極よからうあいつも今年三十六でおれと同じ歳だから少しは世帯じみて見るがよからう

英國で衣服をつくらなくてはならないから百圓ばかり金をかりた歸國旅行費の中で返済する積りだそれから中根のおとつさんから借りた六十圓も其内から返す積り今から中々計畫がむづかしい

筆は中々方々へ出掛てあるく様だがわるい友達杯と遊してはいけない
鈴木の小兒の病氣は少しも知らなかつたそれでもよくなつて結構だ
倫敦では日本人が大分居るが少しも交際をしない會杯へも出た事がない土井とも近頃は減多に遇はない
たつた一人で氣樂でよろしい世間の人間共がおれの事を何とかいひ度ても己が何をして居るか知つてる者
はない 彼等はどこから材料を得てそんな事をいふか聞て御覽

三月十八日

金之助

鏡 どの

皆さんへよろしく
手紙は封臘で封じてよこさるべし

一七

明治三十五年四月十三日 c/o Miss Leale, 8, The Chase, Clapham Common, London, S. W. 牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方

夏目鏡

二月二十八日附の手紙本月上旬着披見致候其許も二女も丈夫にて何よりの事と存候此方も無事勉學御安
神あるべく候當地も漸々あたゝかに相成候へども未だストーブに火を焚き居候木の芽はちら／＼見受候
勉強するには今日の如き境遇まことに安氣にてよろしけれど其他の點に於ては矢張日本の方すみよき心
地爲致候いづれ今年十二月頃には歸朝致す事と存候

筆の日記は面白く存候度々御つかはし可被成候

鈴木の二女病氣のよし氣の毒に存候然し最早本復のよし結構に存候

色々かき度事あれど何をかいてよきやら分らぬ故今度は是丈にてやめに致候

四月十三日

金之助

鏡 どの

一八

明治三十五年四月十七日 c/o Miss Leale, 8, The Chase, Clapham Common, London, S. W. 牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方

夏目鏡

三月十一日附の手紙今十七日落手披見致候留守中色々多忙にて困難のよし委細の様子相分り候甚だ氣の
毒の事ながら今少し辛防可被成候いづれ今年末には歸朝のつもり故其後は何とか方法も立ち少しは樂にな
るべくと存候然しおれの事だから到底金持になつて有福にはくらせないと覺悟はして居て貰はねばならぬ
とにかく熊本へは歸り度ないが義理もある事故我儘な運動も出來ず只成行にまかせるより仕方がないと思
ひ居るなり實は少し著書の目的をたて只今は日夜其方へむけ勉強致居候日本へ歸へれば斯様にのんきに讀
書も思考も出來んそれ丈は洋行の御蔭と思ふ其他に別段洋行の利益もない

小兒兩人共無事にて成育何よりの事と存候よく氣をつけ御そだて可被成候俣野湯淺土屋杯時々參る様子
貧乏しても貧乏なりによく御遇あるべく候彼等は余の不在にも關らず訪問致しくれ候は甚だ感心の事に候、
今年になり此方の手紙一本もとゞかぬとは心得ぬ事に候今日迄に三四通出し候近頃日記をかゝぬ故いつ頃

か記憶せねど第一通は三月頃には到着すべき筈と存候是にはクリスマスを送物の禮と疎信の小言とをかきたり其次は倫君に關する事を多くかきたり其次きはほんの返事に一通かきたり其次が此手紙なり

日本の留學生にて茨木、岡倉といふ二氏來る二十三日頃當地へ到着の筈なり歸るものくるもの世は様々に候かくすつたのもんだのと騒いで世涯暮すものに候これが濟めば筆の所謂の、様に成る義に候譯もへちまも何も無之只面白からぬ中に時々面白き事のある世界と思ひ居らるべし面白き中に面白からぬ事のある浮世と思ふが故にくる敷なり生涯に愉快な事は沙の中にまじる金の如く僅かしかなきなり

當地には櫻といふものなく春になつても物足らぬ心地に候且つ大抵は無風流なる事物と人間のみにて雅と申す趣も無之文明がかくの如きものならば野蠻の方が却つて面白く候鐵道の音氣車の烟馬車の響腦病杯ある人は一日も倫敦には住みがたかるべきかと思はれ候日本に歸りての第一の樂みは蕎麥を食ひ日本米を食ひ日本服をきて日のあたる椽側に寐ころんで庭でも見る是が願に候夫から野原へ出て蝶々やけんくを

御梅さんもだん「く」成人したから御嫁に行くのだらうまだ口はないか筆や恒が大きくなつたらどうして嫁にやらう杯と考へるといやになつて仕舞ふ四五日前中村是公が近頃は四千圓位なくては嫁にやれな

四月十七日

金之助

鏡

明治三十五年四月中旬 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. 4s 在倫敦渡邊傳右衛門氏

御端書拜見御轉居の由拜承毎々英語の教授をつけられ候よし定めて御上達の事と存候小生不相變蟄居愚かなる事のみ考居候ちと御散歩の節太良兄と御立寄可被下候近頃の天氣風はけしく物騒に候日本の櫻といふもの無之物たらぬ様被感候はいかゞ

句あるべくも花なき國に客となり

叱正

金之助

春 溪 兄

梧 下

明治三十五年五月十四日 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. 4s 牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方

夏目鏡

四月四日出の書面は去る九日到着披見致候又宿の婆さんへの贈物は今十四日朝到着直ちにつかはし候何だかガラスの箱へ入れて應接間へかざり立て、居る様子西洋人は小供らしきものなり婆さんより其許へ宜敷禮をいふてくれとの事なり

手紙の趣によれば夜は十二時過朝は九時十時頃迄も寐るよし夜はともかくも朝は少々早く起きる様に注

意あり度し日本の諺にも早寐宵張はあしきものとしてある位其邊は心得あるべし九時か十時迄寐る女は妾か、娼妓か、下等社會の女ばかりと思ふ苟も相應の家に生れて相應の教育あるものは斯様のふしだらなものは澤山見當らぬ様に考へらるまづ矢來町三番を門並しらべて見よ左様の妻君其許を除くの外例あるまじ此事は洋行前にも常に申したる様に思へど其許は左程感ぜぬ様なりし夏目の奥さんは朝九時十時迄寐るとあつては少々外聞わるき心地せらる其許は如何考へらるゝや尤も病氣は特別の事なれど先達の手紙によれば非常に丈夫になりし由なれば身體に異状なき限はつとめて早く起きる様心掛らるべし且小兒の教育上にもよろしからざる結果ありと思ふ筆などが成人して嫁に行つて矢張九時十時迄寐るとあつては余は未來の婿に對して甚だ申譯なき心地せらる其許の御両親はそれを何とも思はれざるかも知らねど余は大に何とも思ふなり力めて己れの弊を除くは人間第一の義務なり且早起は健康上に必要なりことに眼あしき時杯は早く寐て早く起るが專一なるべし

五月に入りて若葉の時節なるにも關せず頗る冷氣にてストーヴを焚く始末いやな所なり春になつても櫻はさかず物足らぬ心地なり

宿の下女は病身なる由もし傳染病（肺病等）の嫌疑あらば速かに解雇あるべし抱かれたり又は食物杯を口うつしにしたり甚だ危険あるべし但し此邊は其許にも考あるべければ改めて申す必要もある間敷と思へど注意の爲申遣はずなり

恒の寫眞もとゞけるとありたれど寫眞は到着せず

熊本のフアーデルは時々手紙をよこし候

皆々へよろしく

五月十四日

金之助

鏡 どの

III

明治三十五年七月二日 of Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. 4 牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方

夏目鏡へ

書狀一通寫眞一束端書一牧外に倫氏梅子端書各一葉落手披見致候其許持病起り相のよしよく寐てよく食つてよく運動して小兒と遊べばすぐ癒る事と存候

此方は不相變無事御安心可有之候只今巴理より淺井忠と申す人歸朝の序拙寓へ止宿是は晝の先生にて色畫の話杯承り居候又一所に参り候芳賀矢一氏も淺井氏と同船にて來る四日出發歸途に上る筈に候

皆々が歸ると自分も歸り度なり候然し日本にてかくの如くのんきにひまがあつて勉強が出来たら少しは人に見せられる著書も出來相なれど歸れば中々追使はるゝ故左様勝手には不參しかたなきものに候

二女とも丈夫の事と存候筆はインフルに罹り候よし然しすぐ癒り候由にて安心、倫君は高等學校の試験準備中のよし勉強專一に候御梅さんは華族學校へ通ふよし英語なかなか出來ぬ方がよろしい日本の婦人が西洋的になつては大變ぢやこちらの男は婦人に對して皆召使の如きものである御嫁に行く心配なか御無用とあるがまだ御嫁に行き度はありませんか

七月二日

金之助

鏡 どの

三三三

明治三十五年九月十二日 午後四時四十五分 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より牛込區矢來町

三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ

八月六日發の書狀今九月十一日到着披見致候其元の病氣の快よく兩女とも壯健の由にて安堵致候筆は大分成人致候由恒も少々は口を聞候由丹精して御養育頼み入候御見やけも此分にては覺束なく候

近頃は神經衰弱にて氣分勝れず甚だ困り居候然し大したる事は無之候へば御安神可被下候

父上も母上も倫君も梅子さんも其他皆々丈夫の事と存候

御地は秋暑の候にて嘸かし凌ぎがたき事と存候當地は存外涼しく今日も細雨蕭々たる有様に候

近來何となく氣分鬱陶敷書見も碌々出來ず心外に候生を天地の間に亨けて此一生をなす事もなく送り候様の腦になりはせぬかと自ら疑懼致居候然しわが事は案じるに及ばず御身及び二女を大切に御加養可被成候

倫君の手狀も拜見致候一意御勉強の程偏に希望致候

新聞は九月一ぱいにてよろしく候

九月十二日

金之助

鏡 どの

三三三

明治三十五年十一月一日 c/o Miss Loale, 81 The Chase, Clapham Common, London S. W. より麹町區富士見町四ノ八高濱清氏へ

啓子規病狀は毎度御惠送のほとゞぎすにて承知致候處終焉の模様逐一御報被下奉謝候小生出發の當時より生きて面會致す事は到底叶ひ申間敷と存候是は雙方とも同じ様な心持にて別れ候事故今更驚きは不致只只氣の毒と申より外なく候但しかゝる病苦になやみ候よりも早く往生致す方或は本人の幸福かと存候倫敦通信の儀は子規存生中慰藉かたゞかき送り候筆のすさび取るに足らぬ冗言と御覽被下度其後も何かかき送り度とは存候ひしかど御存じの通りの無精ものにて其上時間がなにか勉強をせねばならぬ杯と生意氣な事ばかり申しついゝ御無沙汰をして居る中に故人は白玉樓中の人と化し去り候様の次第誠に大兄等に對しても申し譯なく亡友に對しても慚愧の至に候

同人生前の事につき何か書けとの仰せ承知は致し候へども何をかきてよきや一向わからず漠然として取り纏めつかぬに閉口致候

諸小生來五日愈々倫敦發にて歸國の途に上り候へば着の上久々にて拜顔種々御物語可仕萬事は其節まで御預りと願ひ度此手紙は米國を経て小生よりも四五日さきに到着致す事と存候子規追悼の句何かと案じ煩ひ候へどもかく筒袖姿にてビステキのみ食ひ居候者には容易に俳想なるもの出現仕らず昨夜ストローヅの傍にて左の駄句を得申候得たと申すよりは寧ろ無理やりに得さしめたる次第に候へば只申譯の爲め御笑草として御覽に入候近頃の如く半ば西洋人にて半日本人にては甚だ妙ちきりんなものに候

文章杯かき候ても日本語でかけば西洋語が無茶苦茶に出て參候又西洋語にて認め候へばくるしくなりて日本語にし度なり何とも始末におへぬ代物と相成候日本に歸り候へば隨分の高襟黨に有之べく胸に花を挿して自轉車へ乗りて御目にかける位は何でもなく候

倫敦にて子規の訃を聞きて

筒袖や秋の柩にしたがはず
手向くべき線香もなくて暮の秋
霧黄なる市に動くや影法師
きりくすの昔を忍び歸るべし
招かざる薄に歸り來る人ぞ
皆蕪雜句をなさず 叱正

〔ほむぎす〕第六卷第六號より轉載

一一四

明治三十六年二月五日 午後五時(分不明) 牛込區矢來町三番地中ノ丸丙六十號中根氏方より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

啓

滯英中は色々御交情を辱ふし鳴謝此事に御座候其後留學期限も満期と相成去冬倫敦發船中にて越年去月二十三日漸く歸京仕候早速御報可申上筈の處彼是多忙荏苒今日に至り候段御海想可被下候いづれ其内拜眉の上ゆるく御話し可申上候 以上

二月五日

夏目金之助

渡邊様
榻下

一一五

明治三十六年二月九日 午後零時三十分 牛込區矢來町三番地中ノ丸丙六十號中根氏方より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

拜啓一昨日は唐突參堂御多忙の折から嘸かし御迷惑と存候御蔭にて横濱見物を致し面白く一日を消し申候小生只今家屋搜索中身分も未だ定まらず日々くらしの生活を營み居候何れ近日東京へ御出向の節は是非御來訪被下度待上候田中君へも御禮狀可差上筈の處是にて御免蒙り候間大兄よりよろしく御傳聲願上候 勿々不悉

二月九日

金

渡邊様
研北

一一六

明治三十六年二月二十三日 午後三時二十分 牛込區矢來町三番地中ノ丸丙六十號中根氏方より小石川區林町六十四番地菅虎雄氏へ

頃日来毎々まかり出いづも御邪魔致失敬御免可被下候昨日は又時分時にまかり出御馳走に相成難有御禮申上候俎先般來御配慮にあつかり候住宅一件先方より來る二十五日に引拂ふ旨申越候につき當方にては翌二十六日に引移り度と存候番地は北山伏町三十一番地に候御閑の節は御光來待上候 以上

二月二十二日

金之助

虎 雄 様
座 右

一一七

明治三十六年三月六日 午前十一時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より越後國古志郡六日市村大字蛇山細貝勝逸氏へ

拜復

御手紙拜見致候短冊染筆の儀承知仕候小生歸朝以來俗事多忙俳句と申すものは殆んど忘却の有様従つて近作と申すもの一句も無之實は御謝絶申上けんかと存候へども切角の御依頼故舊句相認め御笑草に御目にかけて申候先は右御返事まで 草々頓首

二月六日

夏目金之助

細 貝 様

一一八

明治三十六年三月九日 午後一時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より熊本第五高等學校奥太一郎氏へ

其後は頼と御無音に打過候御壯勝御精勤の事と存候降つて小生歸朝以後萬事茫漠日々空しく消光致居候然し身體も別段の事なく頑健に罷在候間乍憚御休神可被下候歸朝後身邊の事に關しては矢張熊本向へ下向の筈の處色々事情有之當地にとゞまる事と相成候に就ては當分乍遺憾不得拜顔目下英語部の狀況如何に御座〔候〕や小生東京へとゞまる事と相成候に就ては御校に少からぬ御迷惑相懸候事と心痛致居候事情不得

已義に候へども一半は小生不注意より生じ候事と深く懺悔罷在候遠山君其他へも御詫狀可差出筈なれど大兄よりよろしく御傳へ被下度候スキート氏近況如何に候や倫敦にて分袂以後未だ一回の音信も無之候へども乍蔭好評のよし承はり安堵致居候不相變熱心授業の事と存候フアーデル氏六月以後解傭の由氣の毒に存候櫻井氏にも折角周旋の勞をとられ居候事と推察致候へどもさし當り思はしき口も御座なき由大兄は依然寄宿の方へ御關係に候や矢張り御多忙の事と存候先は右歸朝後御無沙汰御見舞旁近況御報知まで 草々不

三月八日

夏目金之助

奥 太一郎様
座 下

一一九

明治三十六年三月九日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區林町六十四番地菅虎雄氏へ

今朝は寢込へ御來駕褥中にて大失敬申上候諸小生熊本の方愈辭職と事きまり候に就ては醫師の珍斷書入用との事に有之候へども知人中に醫者の知己無之大兄より吳秀三君に小生が神經衰弱なる旨の珍斷書を書て呉る様依頼して被下間鋪候や小生は一度倫敦にて面會致候事あれど君程懇意ならず鳥渡ぢかにたのみにくし何分よろしく願上候 以上

三月九日

金 之 助

虎 雄 様

1110

明治三十六年三月十七日 午後零時(分不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

拜啓先日以後御無沙汰に打過候其後轉宅の爲色々多忙御招の梅見も夫なりに相成候緒小生先日漸く表面の處へ寄寓しばらく尻を落付る事に相成候間一寸御報申上候先日參堂の節御座敷にて拜見致候蘭數株御惠送被下候へば幸甚と存候貧居にて床間に何の裝飾も無之ふと先日御話しを思出し此段願上候尤も澤山無之候へば無理に頂戴仕らずともよろしく餘つてたら頂き度と存候田中君へもよろ敷御傳被下度候先は右用事のみ 草々不一

三月十六日

夏目金之助

渡 邊 様

座 下

1111

明治三十六年三月十九日 午前十一時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

芳墨拜見仕候芝居見物御誘ひ被下難有奉謝候小生歸朝以來兎角不精にて芝居杯も見るも一向のり氣に相成る間敷かと存候尤も折角ノ御誘引故或は出馬致すやも計りがたく候へど元來何時頃どこへ參るにや又月末にて懐中甚だ不如意ならんと思はる全體いくら位かゝるのですか一寸御しらせ下さい君の手紙と行違に

小生の手紙は横濱へ參り候事と存候蘭の儀出來得るなら頂戴仕度候御出京の節は御立寄待上候 以上

三月十八日

金

渡 邊 様

座 下

1112

明治三十六年三月二十二日 午後二時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

御手紙拜見今日ことによると御出の由御待申上候二十九日芝居見物の儀は月末にて少々多忙ことに小生近來芝居杯申すのんきな量見にならず乍残念御斷り申上候いづれ其内落付候へば御供致し度と存候先は御返事迄 草々不一

二十二日

金

渡 邊 様

1113

明治三十六年三月二十三日 午後二時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

華墨拜誦仕候小生在宅の時日はほとんど不定なれど先不精ものといふ前提より論理的に結論を下す時は大抵うちに寐て居ると云ふ命題を得ることかと存候此頃は一定の職業なき爲毎日々々瓢箪の化物然と消光

致居候只御光來の節は一寸端書を御つかはし被下候へば御待ち可申上候拙寓偏鄙にて何の風情も無之加之
貧居御馳走も致しがたく候先づ一日田舎へ遠足する積で御出かけなさい 以上

金

二十三日

太良様

俳榻下

一三四

明治三十六年四月十三日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より熊本第五高等學校奥太一郎氏へ

尊書拜見仕候春暖の候愈御清穆御精勤奉賀候小生歸朝後碌々消光今に何事も成さず慚汗の至に候御地英語部内の状況逐々御報知被下先々無事に進行致居候模様安心致候殊にスギト氏非常の熱心にて職務に盡力被致居候由甚だ満足の至に不堪實は同氏傭入の當時より小生は別段の知己に無之候へば幾分かの危険を冒して周旋致候次第はからずもかゝる熱心家を得て學校は勿論他の諸教員迄其利益を享候段意外の仕合に候小生は其時より一回の書信も不仕御面會の節はよろしく小生より感謝の意を御傳被下度候猶英語部内の件其他とも遠山君と共に御盡力被下度小生如きもの参り候とても別段學校の爲にも相成間敷かと存候小生は是より餘暇を得て多少研學の便宜を得度と希望致居候へども人事不如意の世の中なれば如何になり行くや自身にも見當相つき兼候遠方にて容易に御目にかゝる事も出来ず御話も承はり兼候残念に存候其内何等かの時機に御上京にも相成候へば久々にて聲咳に接し度と待居候御承知の菊池謙氏上京明日同氏の爲に會を開く筈に候先は右御返事迄 匆々頓首

四月十三日

金之助

奥様

一三五

明治三十六年五月九日 午後七時三十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より熊本縣球磨郡湯前村井上藤太郎氏へ

拜啓貴併並びに白扇會集御送被下難有奉謝候

小生は目下大多忙にて近來俳句とは全く絶縁の有様に候へば評選等の儀は到底御依頼に應じがたく候い
づれ近日盧子碧梧桐兩君の内にも依頼致し見るべくと存候

先は右御返事迄 匆々頓首

十日

夏目金之助

井上藤太郎様

一三六

明治三十六年五月二十一日 午後七時三十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より久留米市築嶋町小畑氏方菅虎雄氏へ

御書拜見仕候愈御出發の期にせまり嘸かし御多忙の事と存候小生は存外閑暇にて學校へ出て駄辯を弄し居候大學の講義わからぬ由にて大分不評判 俳人時々來訪又々邪道へ引き入れられさうなり藤代先日より病氣本日承り候へば肺炎の由しかし最早全快の事と存候第一高は遙かにのんきに候熊本より責任なく愉快に候大學の方は此學期に試験をして見て其模様次第にて考案を立て考案次第にては小生は辭任を申出る覺悟

に候もし左様なれば小生の目的通の研究をなす積に候大塚の三女病氣にて死去夫が爲同人よりの借錢返却の爲め貧乏なる山川を煩し候山川は不相替に候先日一寸訪問自轉車の稽古をして戻り申候近頃晝寢病再發何にもせず寢て居り候不平でも病氣でもなく只寐たいから寐る次第甚だ意味なき寐方に候膜野の父死去の由氣の毒の至に存候同人今回も亦落第の事と存候支那へも一寸参り度候然し教へるものがないから困却致候日本語を二時間許教て三百元くれるわけには参りませんか先ハ御返事迄 匂々不一

金

二十一日

虎 雄 様

座 下

一三七

明治三十六年六月八日 午前十一時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より熊本縣球磨郡湯前村井上藤太郎氏へ

拜啓白扇會報第九號わざ／＼御送被下難有存候右會報は活版ならぬ處大に雅味あるやに虚子とも申合候内容も面白く拜見仕候

近頃地方俳句會の吟什見るべきもの多く却つて本場の東京を凌ぐ佳句もまゝ見受候様に存候ほとゝぎす杯にても地方俳句會の句の中には大にふるうて居るのがあると先日四方太と話し申候

小生は先日申上候通最早俳界中の人に無之新しき句杯もほとんど作り不申頃日来ほとゝぎす關係の人にせめられて又々邪道に陥りかけて居候其内蕪句相認め御送御笑覽に可供候 以上

六月八日

夏目金之助

微笑 先生

座 下

一三八

明治三十六年六月十四日 午後十一時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より清國南京三江師範學堂菅虎雄氏へ

尊翰拜誦無事御着の段奉賀候目下ゴタ／＼デ休暇のよし珍重存候可成ゴタ／＼ヲ長クシテ休ム算段ヲスベシ教授ナンカ何デモイ、サ僕ガ教ヘル生徒ニ支那人ノ何トカ云フノガアル僕ハスキナ男ダヨ朝鮮人モ居ル是モスキダ高等學校ハスキダ大學ハヤメル積ダ一方案ヲ立テナケレバナラン何ノカンノツテ一學期立ツテ仕舞ツタ僕モ一度神社佛閣ノ様ナ家ニ住ンデ見度イ學問ナンカスルナ馬鹿氣タモンサネ骨董商ノ方ガイイヨ僕ハ高等學校へ行ツテ駄辯ヲ弄レテ月給ヲモラツテ居ル夫デモ中々良教師ダト獨リテ思ツテ爾大學ノ講義モ大得意ダガワカラナイソウダ、アンナ講義ヲツマケルノハ生徒ニ氣ノ毒ダ、トイツテ生徒ニ得ノ行ク様ナハ教エルノガイヤダ、試験ヲシテ見ルニドウシテモ西洋人デナクテハ駄目ダヨ、

近來晝寢病再發グ／＼寐ルヨ博士ニモ教授ニモナリ度ナイ人間ハ食ツテ居レバソレデヨロシイノサ大著述モ時ト金ノ問題ダカラ出來ナケレバ出來ナイデモ構ハナイ天勾踐ヲ空フスルト云フ譯カネ近來南隣ノハツチャン北隣ノ四郎チヤン背後ノ學校ノ生徒諸君日課ヲ定メテ色々ナヲやツテ居ルヨ是モ一學期結了ト云フ譯サネ

其外何モカクヲガナイ御留守宅へハ其後伺ハナイ御變モアルマイヨ大塚ノ三女ガ先達テ病氣デ死ンダ僕ハ見舞ニ綱ヲヤツテ笑ハレタ

僕ハ切角調ヘカケタヲ丸デ忘レテ仕舞ツタ愚ナ話シダ(ノート)ナンカ焚テ仕舞フト思フ

君ノ狀袋ト半切ハ氣ニ入ツタサスガ支那的ダネ
今常公ガ泣イテ居ルヨアイツハ泣テ仕方ガナイ、山川不相變デ困ル僕モ相變ラズデ困ル
右早速御答迄實ハ少々氣取ツテ夏目ハ字ガ上手ニナツタト云ハレタカツタガソナ山氣モナクナツタカ
ラ天真爛漫タル處デ御免蒙ル 左様ナラ

六月十四日

金

虎 雄 様

坐 下

君ガ居ナクナツテ悪口ヲ鬪ハス相手ガ居ナクナツテ甚ダ無聊ヲ感ズルヨ

一三九

明治三十六年六月十七日 午後五時(分不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より熊本縣球磨郡湯前村井上藤太郎氏へ

啓白扇會投稿用紙わざ／＼御送被下候につき別紙蕪句數首御笑覽に供し申候近頃俳句杯やりたる事なく
候間頗るマヅキものばかりに候右用事迄 匆々頓首

六月十七日

金

微 笑 様

愚かければ獨りすゞしくおはします
無人島の天子とならば涼しかろ
短夜や夜討をかくるひまもなく

更衣同心衆の十手かな
ひとりきくや夏鶯の亂鳴
蝙蝠や一筋町の旅藝者
蝙蝠に近し小鍛冶が鎚の音
市の灯に美なる莓を見付たり
玻璃盤に露のしたゝる莓かな
能もなき教師とならんあら涼し
蚊帳青く涼しき顔にふきつける
更衣沂に浴すべき願あり
薔薇ちるや天似孫の詩見厭たり

一四〇

明治三十六年七月三日 午後十二時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より清國南京三江師範學堂菅虎雄氏へ

七月一日第二ノ手紙ガ來タ色々ナ珍事ガ書テアツテ面白カツタ車ト酒ト間違ツタリ驢馬デ落ちカ、ツタ
リ頗ル支那的ダカラ妙ダ日本ニ面白イ事ハナイヨ京坂合併相撲位ナ者ダ大學モ高等學校モ試験ハスンダ昨
日ハ點數會議デ朝カラ晩迄引張「ラ」レル只黙ツテ名説ヲ謹聽スル許リダガ中々草臥ルモンダナ一明日カ
ラハ入學試験トクルカラ又厄介ダドーモ人間ハ生キタイ爲ニ生キテ居ツテソーシテ生キタイ爲メニ苦勞ス
ルイクラ骨ガ折レテモ生キテ居ル方が善イノト見エル夫ガ高ジルトイクラ骨ガ折レテモ名譽ガトリタクナ
ル學問ガ出來タガル金ガ欲シクナル實ニ變ナ奴サネ

君ノ御母サンハ病氣ダツテ君ノ一家ハ郷里ヘ引上タ相ダナ昨日藤代カラ聞タ君又心配ガ一ツ殖タナ家族ハ當分國ヘ置クガイ、可成金ヲタメテ半世ノ落托ヲ回復スルサ世ノ中デハ貧乏ヲ不名譽ト思ツテ居ルカラ君モコ、デ名譽回復ヲスルサ骨董ノ掘出物ノト云フテ矢張りイカサマ物ヲツカマサレルノダラウ假令然ラズトスルモ貯蓄ヲ廢シテ骨董ニ打込ンデハ所謂名譽回復ガ出來ンヨ

發句ナンカ下火極マルマルデ作ル氣ニナラン然シ退窟凌ギニ時々ヤル是ハ得意ノ餘ニ出ルノデハナイ一時ノ鬱散ト云フ資格サ時ニ僕近頃ノホト、ギスニ自轉車日記ト云フ名文ヲ已テ得ズ草シテ載セタカラ見給ヘ甚ダ上品ナラザル文章ダガ中々ウマイヨ

君教授ノ傍支那語ヲ勉強シ給ヘ君ノ様ナ無器用ナ者デモ熱心ニヤレバ上達スルダラウソシテ支那ノ書物ヲ讀メ僕ハ支那文學ハ大スキダガスキダ杯ト云フ程知ツテハ居ラナイヨ

僕大學ヲヤメル積デ學長ノ所ヘ行ツテ一應卑見ヲ開陳シタガ學長大氣餒ヲ以テ僕ヲ萎縮セシメタソコデ僕唯々諾々トシテ退クマコトニ器量ノワルイ話シヂヤナイカ

狩野も大塚も藤代も相變らん

藤代は君ノ心配スル程ナクハナイダラウ、大塚モソソナニ落膽シテ居ナイ様ダゼ尤モ是ハ僕ノ様ナ不人情ナ人間カラ見ルカラ左様ニ見エルノカモ知レナイ狩野ハ狩野サ萬古不易ト云フベキ代物ダ然シ熊本時代ヨリモ元氣ガアルラシイ山川ハドウナルカ僕モ近來面會シナイ僕ハナマケル方ニイソガシイ男ダカラ御無沙汰ヲスルノサ大ニ盡力シテやレツテ中々氣ガ進マナイ様ダカラ一寸ムヅカシイソレニ周旋シ様ト思フ口モナイ實ハ甚ダ氣ノ毒ニ存ジテ居ルガドウモ仕様ガナイ君ノ方ニ口ガアレバ夫コソ結構ダガ當分夫モ六ツカシイト云フナラ仕方ガナイ

近頃梅雨ノ天氣鬱陶敷甚ダ困リ入ル平生ノ物草太郎ハ益物草太郎ニナル(樂寢晝寢われは物草太郎なり)

杯とすまして居る内に天罰觀面胃病、腦病、神經衰弱症併發醫者モ匙ヲ投ゲルト云フ始末ハ近キ將來ニ於テノ出來事ト察セラレル

山川ハ近キ將來ニ於テ氣狂ニナルト?ドーダカ分ラナイ普通ノ人ハ大概氣狂ダ自分デ氣狂デナイト自信シテ居ル許リサ何ノ事ハナイ世ノ中ト云フ者ハ氣狂ノ共進會ト云フ様ナ物サ其中ノ大氣狂ヲ稱シテ英雄トカ豪傑トカ天才トカスベツタトカ轉ンダトカ云フ迄ダラウ御前サンダノ吾輩ノ如キハ小氣狂ダカラ駄目サ鳥渡泥棒ノ様ナモノデ大泥棒ハ人カラ崇拜セラレ小泥棒ハ牢屋ヘ入ル世ノ中ハ種類ノ差デナクテ單ニ程度ノ差デ反對ノ物ニナツテ仕舞フ黑白ナカト云フノハソレサ

支那ヘ行カナクツテモ豚ト同化スル位ノ決心ガナケレバ世ノ中ハ渡ツテ行カレヤシナイ幸ニ南京迄出張シタノダカラ可成豚ヲ觀察シテ歸ルトキニハ立派ナ豚ニナツテキ給ヘ御前サンノ様ナ潔癖家ニハイ、訓練ダ是カラ禪學ナンドヲやメテ豚學ヲヤルベシダ吾輩ハ唯ゴロシテ居ル所丈ハ豚ヲ學ビ得テ其骨髓ヲ得テ居ルト自ラ信ジテ居ル其他モ追々稽古ヲシタラ遼東ノ豚位ニハナレルダラウト思フ

明日カラ入學試験デ朝七時カラツラマル譯サ七時カラツラマルニシテモ試験ヲスル方ハマダイ、ガサレル爲ニツラマルノハタマランネ然シソレモ自分ノ得ノイクコトダカラ誰モスルノサ馬鹿ニシテイラ

君ハ時々菊謙ト議論ヲスル相ダナ兩方共剛情ダカラ面白イダラウ僕君ヲ失ツテ惡口ノ相手ガ居ナクナツテ甚ダ寂寥ノ至ニ堪ヘン僕モ支那ヘ行キタイヨ

今度ハ此位ニシテ置カウ又改メテ現參スル先身體ヲ大事ニ氣樂ニ暮シ給ヘ 匆匆頓首

七月二日夜

金之助

虎 雄 様

菊謙へヨロシク、アイツ四百元ノ月俸デ大得意ダラウ

一四一

明治三十六年七月三日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より熊本第五高等學校奥本一郎氏へ

漸々暑氣相催し候處愈御清勝奉賀候次に小生不相變碌々消光罷在候間乍憚御休神可被下候目下入學試験にて随分多忙毎日朝七時より出校には恐入候御校にても同様定めて御いそがしき事と遙察候小生は高等學校と大學とかけもちにて兩方とも碌な事は致せもせず致さうともせず勝手好加減主義にてやり居候大兄などの様な真面目な人より見れば墮落の極に候御地景況如何に御座候や御序の節御もらし被下度候あまり御無沙汰致候間一寸御左右伺上候 匆々

七月三日

金

奥

様

榻下

一四二

明治三十六年九月十四日 午後二時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より清國南京三江師範學堂菅虎雄氏へ「封筒の表に「菅虎雄大人虎皮」とあり」

漸々秋冷の候と相成候處愈御清勝奉賀候小生不相變神經衰弱意氣銷沈と申す次第に御座候過日俣野生參り大兄大分得意のよし承り候船遊山親睦會の事なども傳聞致候小生夏中籠居大塚は一家引きまとも鎌倉へ參り候狩野は避暑のかはりに學校へ通勤致候先日は結構なる菓子折頂戴難有存候愚妻先日より又歸宅致居

候大なる腹をかへて起居自在ならず如何なる美人も孕むといふ事は甚だ美術的ならぬものに候況んや荆妻に於てをやかね學校も漸く始まる講義も例の如く不得要領底にて御免蒙るつもり之君の法帖はまだ拜見致さず實は御留守宅へは御無沙汰をして一向參らん其内行かうと思ふがまづあてにならない天下にあてになるものは金だけだから金をため給へ菊地は矢張元氣であらう是へも無沙汰をして居る君からよろしく頼むよ、何だか「御座候」に始まつて「頼むよ」に了る手紙杯は實に前後一貫せぬ様だが龍頭蛇尾は僕の大得意の處だから其積で讀み給へ、

其外何にもかく事がないから是でやめる 失敬

九月十四日

金

虎

雄様

山川は淨土宗の學校へ行く一週八時間程 (オハリ)

一四三

明治三十六年九月十五日 午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より熊本縣球磨郡湯前村井上藤太郎氏へ

拜啓秋氣相催ふし候處愈御清勝奉賀候御刊行の白扇會報毎度御送にあづかり難有存候過日は蕪稿御求めに相成候處近頃俳神に見離され候せいか一向作句無之不得已其儘に致し置候不惡御容赦可被下候先は右御禮旁御挨拶迄 匆々不一

九月十五日

夏目金之助

一七五

一七四

井上藤太郎様
貴下

一四四

明治三十七年一月三日 午後八時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ
〔自筆水彩畫繪はがき 盆栽の松水仙背景
は屏風らし〕

人の上春を寫すや繪そら言

漱石

一四五

明治三十七年二月九日 午前零時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十六番地鹽谷方寺田寅彦へ
〔はがき〕
藤村操女子

水底の感

水の底、水の底。住まば水の底。深き契り、深く沈めて、永く住まん、君と我。
黒髪の、長き亂れ。藻屑もつれて、ゆるく漾ふ。夢ならぬ夢の命か。暗からぬ暗きあたり。
うれし水底。清き吾等に、譏り遠く憂透らす。有耶無耶の心ゆらぎて、愛の影ほの見ゆ。

二月八日

一四六

明治三十七年二月十四日 午前十一時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區盛町三十六番地同學會内野村傳四へ
〔はがき〕
小生の下駄無事に消光罷在候御休神可被下候大兄の足の裏の直覺誤りなき事を保證致候間右主婦へ御申

聞可然と存候

一四七

明治三十七年三月二十七日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小松武治氏へ
拜啓先日御持參のリヤ王物語拜見一々原文と對照候爲め存外手間どり候今分にては他の分も相應に時日
を要すべきかと存候乍失敬少々添削を施し申候へば御披見の上御取捨可被下候 以上

三月二十七日

夏目金之助

小松様

一四八

明治三十七年四月二十一日 午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町島津男爵邸内野間眞綱へ
拜啓伊豫國西條の中學にて practical English の出来る文學士一名入用のよし至急申込有之月俸は七拾
圓なり校長は松平圓次郎と云ふ二十六年出の文學士なり御心當なきや否や御返事を待つ 草々
四月二十一日

金之助

野間兄

御閑なときに御遊に御出可被成候

鳩鳴いて烟の如き春に入る
杏として桃花に入るや水の色

一四九

明治三十七年四月 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小松武治氏へ
御依頼の冬物語閣下御急ぎの事と存候間召使を以て御送り申候御落掌可被下候
是にて沙翁物語も一先結了一寸一服出来る譯に候 以上

夏目金之助

小松武 二様

一五〇

明治三十七年五月三十日 午前零時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町島津男爵邸内野間眞綱へ
啓上

君病氣のよしにて日比谷中學をやめるとか代理をさがして居るとか聞けり實事にや病氣とは何病なるや
少しの事ならば辛防しては如何學校を卒業した許りの者が二十五六時間の授業に堪えぬ杯云ふ様な事では
駄目に候君の年輩より言へば三十時乃至四十時の働きは多きに失せずと思ふ
夫とも他に大功名心でもあつて自分の勉強が必要とあらば特別なり又家族其他に不愉快な事又は心配あ
りて精力を其方に消耗すとあらば是も格別なり去れど常態にあるものが僅々二十五六時をもて餘すとは情

なき次第ならずや

且島津家の授業は一年限にて御免蒙るを得べし中學の口は今やめればすきな時に手に入ると限らず此點
より云ふも辛防肝要なり或は地方行を希望するやも知らねど地方は俗務の爲め二十五六時間の授業よりも
困難なるべし

右は入らざる事ながら御忠告迄に申上候何卒御一考ありたし

五月二十九日

金

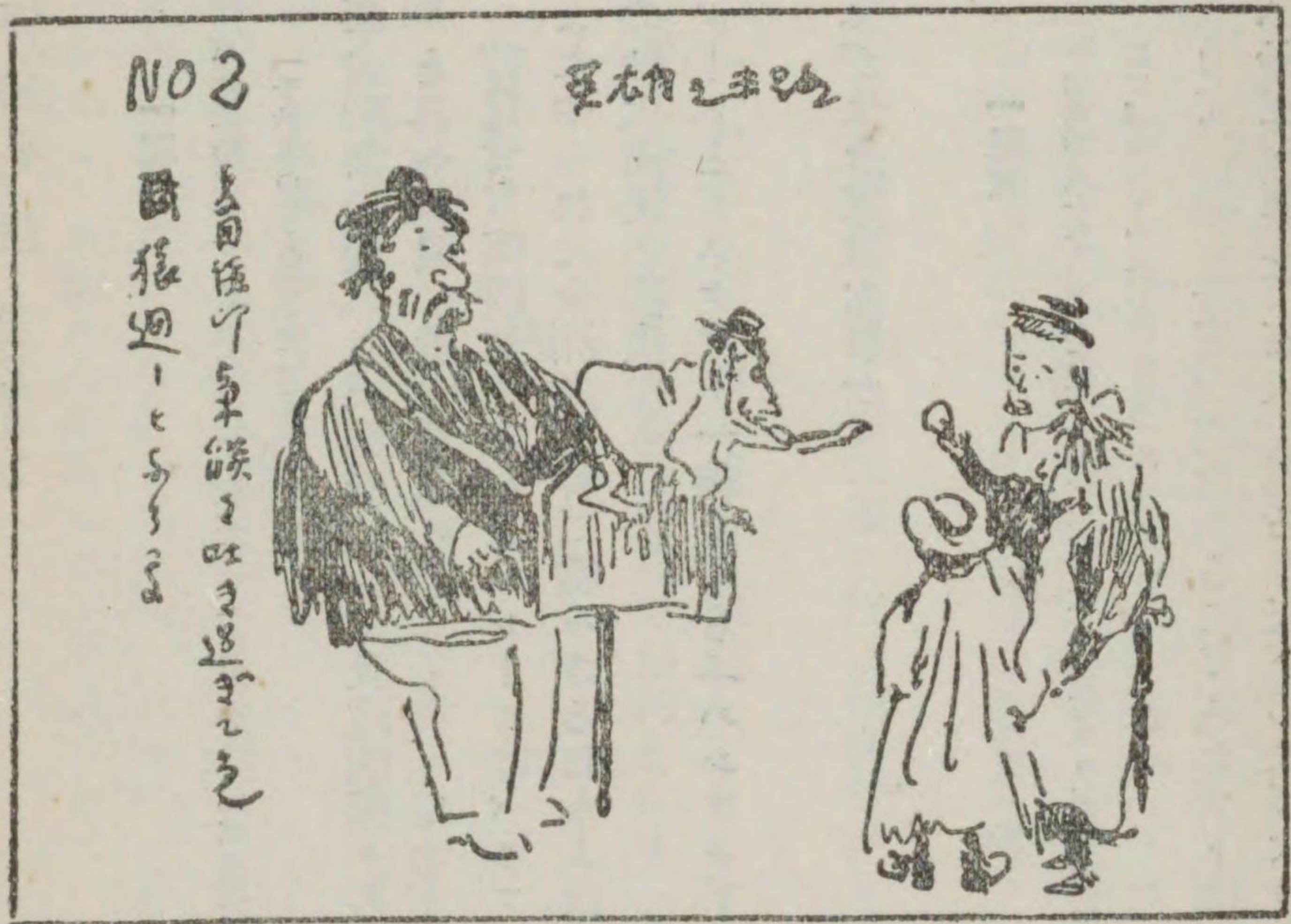
眞 綱 様

一五一

明治三十七年六月三日 午後七時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區臺町三十六番地同學會内野村傳四へ [はがき]
只今高等學校にて島田三郎君の演説を聴て歸れり僕も駄辯を弄する事は人に負けぬ積りだが斯程迄に駄
辯は振り舞はせない彼の辯は雄辯でも巧辯でも能辯でもない要するに平なる板辯と云ふものなり僕の講義
中の駄辯と異なる處なし
太陽にある大塚夫人の戦争の新體詩を見よ、無學の老卒が一杯機嫌で作れる阿呆陀羅經の如し女のくせ
によせばいゝのに、それを思ふと僕の從軍行杯はうまいものだ。行春や重たき琵琶の抱心とは蕪村の秀句
に候。橋口は又繪葉書をよこした

野村傳四仁兄大人閣下 [表の宛名に]

一五二



NO 2

本郷の土地

本郷の土地
 本郷の土地
 本郷の土地

明治三十七年六月四日 午後六時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區豊町三十六番地同學舎内野村傳四へ
 〔自筆ペン書〕

一五三

野村傳四先生 〔表の宛名に〕



No 1 Yellow Flowers of Mr. K. N

大正三十七年六月四日
 午後六時四十分

野村傳四先生
 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區豊町三十六番地同學舎内野村傳四へ

MIXED MELODY

明治三十七年六月四日 午後六時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區豊町三十六番地同學舎内野村傳四へ
 〔自筆ペン書〕

一八〇

野村傳四先生〔表の宛名に〕

一八二

一五四

明治三十七年六月十七日 午後零時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區墨堤町三十六番地同學會内野村傳四へ 〔はがき 表の署名に
「千駄木の住人某先生」にあり〕

昨日散歩の序同學會の前を通れり没趣味にして且汚穢極まる建物なり傳四先生此内に閉居して試験の下
調をなしつゝあるかと思へば氣の毒の至なり

傳四先生の答案を瞥見せり傳四先生のバラフレーズはバラフレーズにあらずミスプレースなり
日本の運送船がまたやられた金洲丸事件に鑑みざる日本人はさすがに大國〔民〕の襟度を具したるもの
か持ちたくなきものは大國民の襟度なり

昨日ハンケチ一ダースとビスケット一箱をもらふハンケチで汗をふきビスケットをかぢる

轉居せんと思ふがよき家はなきか

一五五

明治三十七年六月十八日 午前九時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區墨堤町三十六番地同學會内野村傳四へ 〔はがき 凡て赤インキ
にて認めあり、表の署名に「某先生より」にあり〕

ビスケットをかぢりて試験の答案を検査するにビスケットはずん／＼方付くけれども答案の方は一向進
まない、物徂徠云ふ炒豆を喫して古人を罵るは天下の快事なりと余云ふビスケットをかぢつて學生を罵る

は天下の不愉快なりと傳兄以て如何となす

僕は一文なしの癖に近頃しきりに住宅の圖案を考へて居る夫故に書物を讀んで居つても茶座敷や築山が
眼に映じて書物がわからん、かゝる先生に答案を閱せらるゝ學生は幸か不幸か傳兄以て如何となす

君が英文が下手なのは書物を澤山讀まんからである、小言を申す我輩も決して上手ではないが日進月歩
の今日弟子たるものは先生を凌がなくてはいけないから其積りで多少工夫して書物を讀まねばいかんよ傳
君以て如何となす

橋口が又繪端書をくれた靜かな海に雲の峯それに白帆原甘いものだ僕の手腕よりも少々上等の様だ傳君以
て如何となす

どこか善い借家はないだらうか休暇の始めに引越してそこで夏中勉強を仕様と思ふ傳君以て如何となす
そして君は手傳に來て呉れるだらうね傳君以て如何となす

一五六

明治三十七年六月二十二日 午後二時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區墨堤町三十六番地同學會内野村傳四へ 〔はがき 凡て赤インキ
にて認めあり〕

君が遠慮して來なくとも毎日來客で繁昌だよ

ビスケットは事件頗る進行して最早一個もない

其代り答案の方は到底豫定の如く行動する譯にいかない、君の答案は存外マツイ此次にはもつとうまく
や〔ら〕なくてはいかんよ 小山内や中川の方が餘程よろしい

二十二日

先 生

一八三

明治三十七年六月二十七日 使ひ持参 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎氏へ

梅雨漸くはれて少々うれしき天氣と相成申候植物研究も定めてはかどる事と存候ちと氣餒を吐きに御光來可被下候小生轉宅の野心を起し本郷小石川は勿論四谷麻布青山邊迄詮索甚だ汗の出る事に候探點それこれにて存外手間どり御迷惑の事と存候別紙御廻付及候間可然御取計願上候 以上

君に櫻の實をもらひ其後ある人よりビスケツトを貰ひ兩三日前乙なる西洋料理を御馳走になり果報相つゞき候結果下痢を催ふし試験調もものうく候

芥舟先生

金

二の組の西村の點なし欠席かしらん

明治三十七年六月二十八日 午後二時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區小日向臺町一丁目三番地川淵正幸氏へ

先日は突然まかり出失敬致候借家早速御報知被下難有存候右御宅へ上候前に見たる家にて牧野と申す華族の家に候新らしけれど屋敷狭く格別に不廉と存候間やめに致候其他諸々詮索致し候へども思はしき家も無之につき目下ある處へ交渉中まよれば夫へ移る積に候

御病氣精々御加養可然と存候氣分のよきときは遊びに御出可被成候
先は御禮まで 匆匆
二十八日

夏目金之助

川淵様

明治三十七年六月二十九日 午前零時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河盛町島津男爵邸内野間真綱へ

先日は失敬諸々ぶらやきの上西洋料理の御馳走に相成候處其翌日より下痢を催ふし今に至る迄粥を食ひ居候餘り食ひなれぬものを食ひし爲か將御馳走しつぬ人が奮發した爲か主治醫には分りかね候
一昨日家をさがし候處偶然川淵正幸の家の前へ出候故訪問致候去年から髪をからず髭を剃らずと申しまことにいやはや二十世紀の俊寛に御座候君や僕の心經衰弱も漸々斯様にハイカラに成る事と存候明星の投書家杯の新體詩の主人公となり候へば少々位の病氣は我滿致すべく候先は遅引ながら御禮旁下痢御報迄
匆匆頓首
二十八日

金

眞綱様

明治三十七年七月一日 午前零時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より赤坂區水川町十八番地彌富齋雄氏へ
 拜啓昨日は遠路御光來の處何の風情も無之失敬此事に御座候其節御申置の貸物件につき御配慮を煩はし
 難有存候空家二間の繪圖面其他詳細御申越被下御手数数の段恐入候實は只今寄寓致居候家の家賃は二十五圓
 に有之目下の處夫より多額の屋賃は拂ひがたくと存候尤も二家の内Bの方は稍低廉とは存候へども是亦二
 十五圓を超過致候故今回は御斷り申上候右御禮旁御返事迄匆匆如斯に候 以上
 三十日

彌富様

座下

夏目金之助

一六一

明治三十七年七月三日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町島津男爵邸内野間眞綱へ
 昨日は御光來の處何の風情もなく失敬此事に候其節御話の島津家家庭教師の件只今湯淺生參り候につき
 一寸申談じ候處大に志望の由につきもし大兄御辭任の際は同人御推舉被下度右御舎迄至急申入候
 昨夜皆川氏方へ參る筈の處寺田生來訪又々新體詩杯の批評にて遂に遅く相成失敬致候
 別紙繪葉がき御注文故差上候中々うまく出來候實物よりはよろきる處御賞翫可被下候 以上
 七月三日

眞綱様

金

一六二

明治三十七年七月十六日(?) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より皆川正禮へ
 拜啓去る地方より新文學士一名招聘の件小生方まで申來候につきては一寸御面會の上御相談申上度に付
 御ひま有之候は、御光來被下度候實は參堂可仕筈なれど目下顔に腫物生じ鼻まで漆喰を塗りをり候故乍恐
 縮御足勞を煩し度候 以上 (うっし)

一六三

明治三十七年七月(?) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ (目録水彩畫繪はがき)
 繪はがきを難有
 あの色が非常に氣に入つたが全體あれは何の繪ですか一寸見當がつかない
 是は久し振でかいたら無暗にきたなくなつた夜だか晝だか分らないから(春日影)とかいた

一六四

明治三十七年七月十八日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十二番地菅虎雄氏へ
 君から貰つた紙へ君から貰つた筆を以て君から授かつた法を實行してかくと斯様なものが出来る才子は
 違つたもので一時間許り稽古するとすぐ此位になるうまいものでせうほめてくれないと進歩しない
 此詩は僕が洋行する時に作つた傑作で書と共に後世に傳ふるに足るから君に進呈する
 君の處へ行くと何が取得がある僕は魏故南陽張府君墓誌を習ふ事約三時間君の傳授は實に窮窟千萬のも

のたる事を悟り得た 以上
十八日

虎 雄 兄

坐 下

金

生死因縁無了期
色相世界現狂癡
迤邐校屨塵中滯
迢遞正冠天外之
得失忘懷當是佛
江山滿目悉吾師
前程浩蕩八千里
欲學葛藤文字拔

一六五

明治三十七年七月二十日 午前九時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町島津男爵邸内野間眞綱へ
尊書拜見島津家の方は今年繼續の事と相成候よし湯淺の方は多分神宮皇學館の方へまとまる事と存候
へば御心配被下間敷候日比谷の方も十時間御受持のよし承知致候可相成は二十五六時間御持ち可被成候浮

世はウン／＼働くものに候皆川君一昨夜來り何か發句をかいてくれと云ふから詩箋に十五葉無茶苦茶にか
いてやり候是は近頃習ひたる漢魏六朝の筆法にて凄いものに候一牧十圓宛とすれば何でも百五六十圓の商
買に候鼻上の漆喰自然剝落もとの如く玉子の如くうつくしき美男に相成候へば御安神可被下候暑中如何御
暮し被成候や一日が、りにて寐轉びに御出掛可相成候

俣野大觀先生卒業彼云ふ訪問は教師の家に限るかうして寐轉んで話しをして居ても小言を言はれないと
僕の家にて寐轉ぶもの曰く俣野大觀曰野村傳四半轉びをやるもの曰く寺田寅彦曰く小林郁危坐するもの曰
く野間眞綱曰く野老山長角

橋口は屢繪端書をくれる中々うまいもので僕の御手際では到底競争が出来ん野村が靜岡から端書をよこ
した曰く濛雨しきりにてマダム フジの曲線美を賞する事が出来ませんと柄にない圖案と存候
不相變金ほしく金なく涼を欲して涼を得ず

涼しい處で美人の御給仕で甘い物をたべてそして一日遊んで只で歸りたく候 以上
七月二十日

金

眞 綱 様

漢魏六朝の筆法も暑氣の爲め少々崩れ申候
無人島の天子とならば涼しかろ

一六六

明治三十七年七月二十四日 午後六時三十分

本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ

〔自筆水彩畫繪はがき〕

西洋人の肖像

名畫なる故

三尺以内に近付くべからず

一六七

明治三十七年七月二十五日 午後五時(以下不明)

本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ

〔はがき〕

昨日君の所へ繪端書を出した處小童誤つて切手を貼せず定めて御迷惑の事と存候然し御覽の通の名畫故切手位の事は御勘辨ありたし

十錢で名畫を得たり時鳥

一六八

明治三十七年七月二十七日 午前十一時十分

本郷區駒込千駄木町五十七番地より相模國葉山岩倉家別邸小松武治氏へ

拜啓其後起居如何當時岩倉家の別荘に御消光のよし避暑の爲め良策と存候

却説湯淺生件につき種々御配慮を煩はし感佩此事に候實は當人も在京を希望し從來の研究を續け度素志切なりしも鼻の下要求もだしがたく先般文部省澤柳氏の周旋にて伊勢神宮皇學館へ高等官六等年俸八百にて略内定致したるやに承はり居候然る處貴君よりの手紙にて在京の望も萬更にあらざるを知り當人の爲甚だ遺憾の至に不堪因て澤柳及神宮皇學館の方へ不義理を醸さる程度内に於て當人今一應熟考の餘地を與へたくと存候就ては岩倉家の方の職務繁簡性質等待遇等今少し委細の所承知致し度と存候につき御多忙中

甚だ御氣の毒と存候得ども右御聞合せの上湯淺方迄直接に御報被下間敷くや當時彼は横濱市伊勢町二丁目官舎内に起居罷り在候只今落手の貴翰は愚見附記の同人方へ廻付致置候間左様御承知置被下度候
臨終本件につき御配慮を煩はしたる岩倉家の人々並び家扶君へよろしく御禮御傳被下度候 以上

七月二十七日

夏目金之助

小松 武治 様

一六九

明治三十七年八月十五日 午前十一時十分

本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ

〔自筆水彩畫繪はがき 摸様化〕

されたる流水と落葉と

先日はまかり出御邪魔致候
不忍池畔の散歩に躑を見て御歸りの由そんなものが繪の材料にも文章の材料にもなりません、近頃散歩には出るが根つから材料がない
繪葉書はやめにしやうと思つたが又謀叛心を出して此度は自製ならぬ一牧八厘のやつを十枚許買つて來ました其二枚へ少し風替りのものを書いたから送ります素人くさい處が好い所です褒めなくてははいけません

秋立や斷りもなくかやの内
ばつさりと後架の上の一葉かな

漱石

一九一